第1話 「変身！ まじかる☆アリサ！」

脚本 山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
モナくん
○
マキアス・レーグニッツ
エリオット・クレイグ
エリゼ・シュバルツァー
クロウ・アームブラスト
トワ・ハーシェル
シャロン・クルーガー
○
リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
怪物
○
その他



昨年PS Vitaで発売され、今年はPS4版「eX+」もリリース予定の『東京ザナドゥ』。その作中に登場した「閃の軌跡」シリーズのキャラクターが多数登場する公式二次創作（？）作品『魔法少女まじかる☆アリサ』が、強力タッグでまさかの作品化！

□ アバンタイトル――

フワッと揺れる金色の髪――。

少女の声　「はあああああっ！」

空に飛び立ったピンク色の服を来た魔法少女――まじかる☆アリサが、鮮やかな飛び蹴りを放つ。

その足から魔法の光が迸り、

魔界皇子　「くううう……っ！」

ガードしていた両腕に蹴りを食らったのは黒衣の少年――魔界皇子リィンである。

アリサの隣に飛んできた謎の妖精、モナ君が、

モナ　「今だモナ！」

まじかる☆アリサ　「現れなさい！　愛の弓、トゥインクル・スター！」

掌に光が集まり、その手に出現する弓、トゥインクルスター。

まじかる☆アリサ　「――ついに追い詰めたわよ、魔界皇子！」

手にした愛弓、トゥインクル・スターを、片膝を突いた皇子に向けて構える。

魔界皇子　「フッ、さすがだな……。我が宿敵、まじかる☆アリサ！」

立ち上がり、宙に浮かぶと、余裕の表情でアリサを見下ろす皇子。

と、目元のゴーグルにピシッと亀裂が走り、僅かにその瞳が露わになる。

まじかる☆アリサ　「！　……」

一瞬、弓を引くアリサの手が止まる。

モナ　「アリサ、どうしたモナ!?　今がチャンスモナ！」

アリサ、ハッとなって、

まじかる☆アリサ　「……え、ええ、分かってるわ！」

弓を引きしぼり、狙いを定め、愛の力を一点に集中させるアリサ。

まじかる☆アリサ　「はあああああっ！」

皇子は両腕を広げて身構え、

魔界皇子　「さあ、来い！　今宵訪れた常闇の舞台の幕を引くために！
俺の右腕に潜む【魔】――見事に打ち破ってみせるがいい！」

右手に嵌まった黒い宝石から、右腕全体にオーラが吹き出す。

アリサ、キッと皇子を見やると、

まじかる☆アリサ「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター!!」

愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

皇子、右手に収束させた黒いオーラで矢を受け止めるが、

魔界皇子「ぐ……！　ぐおわあああああっ!!」

耐えきれず、ハート型の光に包まれて大爆発！

まじかる☆アリサ「……！」

モナ「やったモナ!?」

だが——

魔界皇子の声「……フッ」

爆煙が晴れると、傷つきながらも宙に浮いた皇子の姿が
露わになる。

魔界皇子「フハハハハっ！　足りぬ、足りぬわ！　その程度か、
まじかる☆アリサよ!!」

まじかる☆アリサ「く……！」

皇子のゴーグルが破壊され、露わになったその素顔は——。

まじかる☆アリサ「（目を瞠り）うそ……！」

そこに——ピピピピと目覚し時計の音が忍び込んで来て。

□ ドサッとベッドから落ちるアリサ

アリサ「う、う〜〜ん……」

窓の外から聞こえる雀の囀り。
パジャマ姿のアリサが、ベッドから落ちて床で鳴り響く
目覚ましを手に取る。
時計は9時を指していて、

アリサ「ええっ!?　もうこんな時間っ！」

慌てて飛び起きるアリサ。

□ アリサの家・リビング

私服に着替えたアリサが飛び込んでくると、
メイドのシャロンが頭を下げる。

シャロン「おはようございます。アリサお嬢様」

アリサ「もうっ、シャロン！　どうして起こしてくれないのよっ!?」
赤い宝石付きのペンダントを上着にしまいつつ、
シャロンに歩み寄るアリサ。
シャロン「春休みですし、ごゆっくりおやすみになられてはと」
そう言いつつ、コップにアイスティーを注ぐシャロン。
シロップも多め。
アリサ「だ・か・ら！　今日からアルバイトだって言ったでしょ」
シャロン「あら、イリーナ様は、お認めになられてないようですが？」
アリサ「母様は関係ないわ。もう子供じゃないんだし、自分のお金は、
自分で稼いでみせるんだから！」
シャロン「そうおっしゃる割には、ベッドから派手に落ちた音が
聞こえたような……」
アリサ「お、落ちてないしっ！」
シャロン、クスッと笑いつつ、
シャロン「どうぞ、ガムシロップたっぷりのアイスティーですわ」
アリサ、受け取ったアイスティーのコップを
一気に飲み干すと、
アリサ「もう……。みんな子供扱いして。じゃあ、行ってきますっ！」
シャロン「いってらっしゃいませ、お嬢様」
勢いよく飛び出して行くアリサ。

□オープニング

□商店街の通り
――を駆けていくアリサ。
アリサ「(M)急がなきゃ！　初日から遅刻なんてありえないわ！」
ポケットから顔を出して、揺れているモナくんキーホルダー。
アリサ「(M)それにしても……何であんな夢……」

×　×　×

フラッシュ――戦うまじかるアリサの姿。
アリサ「(M)高二にもなって、あんな恥ずかしい格好で、
魔法少女だなんて……」

フラッシュ——対峙する魔界皇子。

アリサ　「(M) しかも、何なのよ、あの変態みたいな男はっ！」

フラッシュ——露わになる魔界皇子の顔が僅かに思い起こされて。

アリサ　「(M) でも、あの顔……どこかで見たことあるような……」

×　×　×

と、ハッとなるアリサ。

アリサ　「——あ！」

目の前の曲がり角から、黒髪の少年——リィンが歩いて来たのだ。(私服)

リィン　「え……！」

アリサ　「きゃあああっ！」

止まりきれず、真正面からリィンにぶつかってしまうアリサ。

×　×　×

×　×　×

その瞬間——アリサの胸の中で、ボウッと赤く光るペンダントの宝石。

×　×　×

アリサ　「え……！」

×　×　×

同じく——リィンの胸ポケットで光る黒い宝石。

×　×　×

リィン　「う……！」

二人の間に、一瞬小さく光が生まれるが、

アリサ　「あああっ！」

そのまま派手に倒れ込んでしまい——。



アリサ　「……あいたたた」

　倒れて蹲っているアリサ。

アリサ　「（Ｍ）今のって……いったい……」

リィンの声　「だ、大丈夫か？」

アリサ　「え？　ええ……」

　アリサが顔を上げると――。

アリサ　「！」

　なんと、下敷きになったリィンの顔が、アリサの胸に埋もれていたのだ。

アリサ　「な、な、な……っ！　この、へ、変態っ！」

　思わず立ち上がり手を振り上げるアリサ。

リィン　「ち、違う！　これは……！」

少女の声　「リィン兄様！」

アリサ　「え!?」

　振り上げた手を止めるアリサ。

リィン　「エリゼ……！」

　現れた黒髪の少女、エリゼが、アリサに詰め寄ってきて、

エリゼ　「兄様を変態呼ばわりとは、聞き捨てなりませんわ！
　あなたの方から、倒れかかったのでしょう！」

アリサ　「そ、そんなっ!?」

エリゼ　「この目でしかと見ましたわ！　悪い虫が付かないよう、
　私がお守りします！」

　パッと両手を広げて立ちはだかるエリゼ。

アリサ　「なっ！　誰が悪い虫ですって！」

　リィン、エリゼを止めて、

リィン　「やめるんだ、エリゼ。前をよく見てなかった俺も
　悪いんだから……」

エリゼ　「ですが……」

　アリサ、リィンの顔を見てハッとなり、

アリサ　「あなた……そういえば、同じ学年の……？」

リィン　「ああ……。リィン・シュバルツァーだ。君は、確か……」

アリサ　「アリサ――。アリサ・ラインフォルトよ」

リィン　「その、アリサ……。本当にすまなかった！」

　パッと頭を下げるリィン。

アリサ　「あ、い、いえ、私もちょっと考えごとをしてたわけだし、
　何て言うかその、悪かったわ……」

リィン　「い、いや、俺の方こそ……助けるためとはいえ……
　あんなことになるなんて……すまない！」

アリサ　「なっ！」

　暫し赤面して、俯くアリサ。

アリサ　「（M）なによ……。私の下敷きになったのは、怪我させない
　ためってわけ？」

　二人の間に暫し漂う気まずい空気。

　その間にズイッと、エリゼが割り込んで、

エリゼ　「私、妹のエリゼ・シュバルツァーと申します。この春から、
　兄と同じ高校に通いますので」

アリサ　「そ、そうなの……。後輩になるんだ。よろしくね。エリゼちゃん」

　エリゼ、ムッと少し不満そうに、

エリゼ　「『ちゃん』づけは、ご遠慮いただけます？」

アリサ　「（苦笑）あ、あはは……」

リィン　「俺達は、ちょうど朝食に出て来た所なんだ。アリサはどこに？」

アリサ、ハッとなり、スマホを見て、

アリサ　「ああっ！　いけないっ！　遅刻だわーーっ！」

□ サブタイトル

□ マクモナルド・全景

【ようこそモナ！】と吹き出しつきの黄色いマスコット、モナ君の看板が掲げられたハンバーガーチェーン店である。

アリサの声　「いらっしゃいませ……！」

□ 同・店内

店員の制服を着たアリサが、ぺこりと来店したお客にお辞儀する。

アリサ　「ご注文は？　あ、はい。ええと……セットでしたら、たぶん、こちらのポテトとドリンク付きが、お得で……」

メニューを指さしつつ、たどたどしく接客するアリサに、

トワ　「アリサちゃん、注文は私に任せてっ。こっちを、テーブルのお客さんに届けてあげてね」

と、先輩店員のトワが助け船を出し、セットなどが載ったトレーを手渡す。

アリサ　「あ、すみません、トワ先輩」

×　×　×

アリサがトレーを手に、焦りながらパタパタとテーブル席へ。

アリサ　「お待たせしました！　ご注文のモナバーガーセット三つに、パンケーキセット……」

と、言いかけて、固まるアリサ。

マキアス　「なんだ、君か？　こんな所で会うとは奇遇だな」

キラリとメガネを光らせる、堅物そうな同級生のマキアス。学生服姿。

アリサ　「マ、マキアス！」

エリオット「あははっ。春休みにアルバイトなんて、頑張ってるんだね」
　同じく同級生のエリオットが微笑む。
　（衣装は特に指定なし。制服でも）
アリサ「エリオット！」
　さらに、リィンとエリゼもいて、
リィン「（気まずそうに）や、やあ、アリサ」
エリゼ「また現れましたわね、悪い虫！」
　ビシッとアリサを指さすエリゼ。
アリサ「な、な、何であなた達までいるのよっ！」
　ワナワナ震えるアリサに、
エリオット「リィンが新入生の妹を、紹介してくれるって言うから」
マキアス「そもそも、ここは一年の頃から、僕らのたまり場なのだが」
アリサ「えええっ！」
　驚くアリサ。
アリサ「（M）うかつだったわ……。クラスメートが来るお店だったなんて……」
エリオット「リィンとアリサって、知り合いだったんだ？　意外だね」

リィン「あ、ああ、ちょっとした縁でな……」
　苦笑するリィン。
エリゼ「兄様、この方に縁なんて言葉は似合いませんわ。強いて言うなら腐れ縁です」
アリサ「（カチンと）あーら、お客様、こちらがご注文のパンケーキセットでございます」
　ガシャンと乱暴にエリゼの前にパンケーキセットを置くアリサ。
エリオット「それ、僕のだよ」
アリサ「あんたのかいっ！」
　マキアス、メガネをずり上げ、
マキアス「ところで、風紀委員として、一応聞いておくが、学校にバイトの許可は取ったんだろうな？」
アリサ「ええ、それは当然よ」
エリオット「あれ？　でもアリサの家って、お小遣いに困りそうには見えないけど？」
マキアス「確かに、ラインフォルト財閥といえば、この国屈指の

リィン　「そうだったのか？　企業グループ。その跡取り娘の君が、アルバイトとは……」

エリゼ　「人は見かけによりませんね」

　　アリサ、汗ジトで後ずさり、

アリサ　「そ、それとこれとは、関係ないでしょ！　とにかく、ごゆっくりどうぞーっ！」

　　慌てて去って行った。

マキアス　「何なんだ、アレは……」

エリオット　「トイレじゃないの」

　　パクとパンケーキを頬張るエリオット。

□　店の前を人々が行き交う（時間経過）

　　自動ドアのチャイムが鳴り、店内に客が入ってくる。

トワ　「いらっしゃいませっ」

　　客の男、カウンターになれなれしく肘を突き、

男　「よっ、トワ。いつものセットで頼むぜ」

　　む、と頬を膨らませるトワ。

トワ　「クロウ君。私だからいいけど、新人さんに、そんな注文しちゃいけないんだからね」

　　そう言われたのは、私服にバンダナ姿のクロウ。

　　笑いながら頭を掻きつつ、

クロウ　「いやあ、わりぃわりぃ。トワが相手だと、ついな」

　　トワ、レジを操作すると、

トワ　「もうっ。フィッシュバーガーセット。760ミラだよ」

　　クロウ、財布を取り出すと、

クロウ　「おっ……？　やべ、ちょっと足りねえな……まけてくれない？」

トワ　「（キリッと）まけられません」

クロウ　「ちぇっ、つめてーなー」

　　と、テーブル席のリィン達に気付いて、

クロウ　「よお、リィンじゃねーか。な、150ミラ貸してくれない？」

　　リィン、その声に振り向いて、

リィン　「クロウ先輩。こないだブレードで負けたからって、50ミラ貸したばかりじゃないですか……」

クロウ　「そうだったか？　ハハッ。三年になったら耳揃えて返すから、
な、頼むぜ」

リィン　「春休みになったら返すって、言ってませんでした？」

クロウ　「今度の約束は守る！　絶対守るから！　なっ、この通りっ！」

必死に手を合わせて頼むクロウに、

トワ　「あのね。先輩が後輩にたかるのは、いけないんだからね。
リィンくんも甘やかしちゃだめだよ」

ジト目で睨むトワ。

リィン　「すみません、トワ会長……」

クロウ　「へぇへぇ。生徒会長様に言われちゃ、仕方ねぇ。じゃ、単品で頼むぜ」

苦笑しながらお金を払うクロウ。

トワ　「はーい。フィッシュバーガー単品入りま～す」

営業スマイルで受け取るトワ。

そこに――

アリサ　「店内清掃終わりました！」

箒とちりとりを手にやってくるアリサ。

トワ　「うん。じゃあ、アリサちゃんは、お昼休みに行ってきてね」

アリサ　「はい！」

クロウ　「へぇ。あんたが新人さんか？」

アリサを見やるクロウ。

アリサ　「え？」

トワ　「同じクラスのクロウくんだよ」

アリサ　「あ、二年のアリサ・ラインフォルトです」

クロウ　「そっか。ま、よろしくな」

そう言い、アリサとすれ違っていくクロウ、ふと立ち止まる。
アリサの胸元で、微かに、赤いペンダントが輝くように
見えたのだ。

クロウ　「……ん？」

振り返って、アリサの胸元を目で追うクロウだったが、
ドスッと軽く肘打ちされ、

トワ　「なーに見てるのかなあ、クロウ君？」

トレイを持ってきたトワがジト目で睨む。

クロウ　「ははっ！　な、何も見てねぇって！」

慌てて目を逸らし、フィッシュバーガーのトレイを

受け取った。

□　同・バックヤードの休憩室

　　大きく伸びをするアリサ。

アリサ「ううう～ん……はぁあ……」

　　と、グーッとお腹が鳴る。

アリサ「（お腹を押さえ）……ううっ。朝ご飯、食べてなかったのよね……」

　　その時、ドアが開いて、

トワ「おつかれさま～！　はい、お昼ご飯だよ」

　　ハンバーガーセットを持って来るトワ。

アリサ「わあ！　ありがとうございます！」

　　アリサ、微笑み、トワに頭を下げる。

トワ「初日で慣れないことも多いと思うけど、よく頑張ってるね。感心感心」

アリサ「そんな……。まだまだです。朝は遅刻しそうになるし、注文だって、まともに取れないし……」

　　ハンバーガーの包みを広げつつ、

アリサ「自分でお金を稼ぐのって、こんなに大変なことだったんですね……」

　　溜息をつき、ハンバーガーを齧るアリサ。

アリサ「！　おいしい……！」

　　途端に笑顔になって頬張る。

アリサ「マクモのバーガー、前から一度、食べてみたかったんです！」

トワ「ええっ!?　マクモ食べたことないの!?それは、女子高生としてありえないよ！」

アリサ「ええ……。その……お店に入ったのも、面接の時が初めてで……」

トワ「ふうん……。アルバイトを始めたのって、何か事情があるのかな？」

アリサ「……大したことじゃないんですけど。どうしても、行きたい場所があって」

□　アリサの回想――（10年前）

　　――6歳くらいの幼いアリサが、山道を泣きながら

歩いている。

アリサの声　「小さい頃、家族で旅行に行った山で、道に迷ってしまって……」
　——アリサの前に現れた同い年くらいの少年が
　その手を取り、優しく微笑む。（顔は見せない）

アリサの声　「そんな私を、親切に助けてくれて、麓まで送ってくれた男の子がいたんです……」
　——お礼に自分の髪留めを渡すアリサ。
　すると、少年は赤い宝石をお返しに手渡してくれた。

アリサの声　「その子の名前も顔も、今では、憶えてないけど……」

□　回想戻って——

アリサ　「いつか自分の力でお金を貯めて、会いに行こうって、ずっと思ってたんです」

トワ　「へぇー。じゃあその男の子が、アリサちゃんの初恋の人なんだ？」

アリサ　「え!?　そ、そうなのかな……って、いや、そんなこと全然考えたことなくて！」

□　同・店内の客席

赤面して俯くアリサだったが、

アリサ　「でも……。その子にもらった宝石は、ペンダントにして、今でも大事に身につけてるんですよ」

トワ　「ほんとに！　見せて見せてっ！」
　アリサ、胸元に手を入れて、

アリサ　「ええ……これです」
　赤い宝石のついたペンダントを、取り出して見せる。

トワ　「わあ！　綺麗だね！」
　トワ、少し驚きの顔になって、

トワ　「あれ？　光ってる？」

アリサ　「え!?」
　言われて胸元の宝石を見ると、微かに赤く光っている宝石。

アリサ　「ほんとだ……！」
　鼓動を打つように点滅する赤い宝石。

エリゼ　　クロウ達と雑談を続けるリィン。
「それで、兄様ったら、私が引越してくると聞いて、徹夜して部屋を片付けて下さったんです」
クロウ　「へぇ、いいとこあるじゃねえか」
リィン　「いや、散らかってたら、何を言われるか分からないし……」
その時、突如、ドクンとリィンの胸の鼓動が高鳴る。
リィン　「ぐっ……！」
胸を押さえて俯くリィン。
エリゼ　「どうなさいましたの、リィン兄様？」
クロウ　「おい、リィン？」
リィン、ゆっくりと顔を上げると、
リィン　「い、いや、何でもない……。ちょっと待っててくれ」
そう言い、席を立つリィン。
マキアス　「大丈夫なのか？」
エリオット　「トイレじゃないの」
ズズッとジュースを飲むエリオット。
クロウ　「（リィンを見やり）……」

□同・店の裏手の路地

リィン　「ぐっ……はぁっはぁっはぁっ……」
裏口から、リィンが胸を押さえながら出てくる。
リィン　「な、何なんだ、この感じ……」
押さえた胸から、黒いオーラが漏れ出してきて、
リィン　「うぐっ……！」
たまらず、胸ポケットから右手で何かを取り出す。
それは、ダイヤのような形の宝石。黒いオーラを放っていた。
リィン　「！」

×　×　×

回想――部屋の片付けをするリィンが、引き出しの奥から宝石を見つける。
首を傾げ、胸ポケットに入れるリィン。



× × ×

リィン　「(M) 部屋からたまたま出てきた……宝石……!?」

と、右手の中でブワッと宝石の黒いオーラがさらに溢れ出す。

リィン　「ぐうううっ……!」

オーラに右手を包まれて、身もだえるリィン。

リィ　「ぐわぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

宝石は不気味に輝きながら、リィンの右手の甲に
嵌まっていく。

リィン　「あぁぁぁぁぁーーーーっ……!」

次の瞬間、リィンの全身が黒いオーラに包まれていき——。

× × ×

休憩室——

アリサ　「何、この声……!?」

一人でペンダントの赤い宝石を見つめていたアリサが、

ハッと気付いて。

〈中ＣＭ〉

第１話後半に続く



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

『東京ザナドゥ』に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第1話Bパート。実際の映画などでも使われている「シナリオ台本」と同じ形式でお届けする新体験をとくとご覧あれ！

第1話『変身！ まじかる☆アリサ！』

脚本 山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）

モナくん

○

マキアス・レーグニッツ

エリオット・クレイグ

エリゼ・シュバルツァー

クロウ・アームブラスト

トワ・ハーシェル

シャロン・クルーガー

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）

怪 物

○

その他

□ 店の裏手の路地

エリゼが裏口を開けて、

エリゼ　「リィン兄様？　どこですか？」

辺りをキョロキョロ見回す。
と、ガラッとゴミ箱の崩れる音がして、
ハッと振り向く。

エリゼ　「兄様……!?」

男の声　「はぁっはぁっはぁっ……」

だが、そこに蹲っていたのは——全身黒づくめで、ゴーグル、ヘッドホンを装着した謎の男。

魔界皇子　「足りぬ……疼きが足りぬ……」

エリゼ　「……な！」

魔界皇子　「我が両手を満たす、皇子の印が足りぬっ……！」

厨二な言葉を吐きながらガバッと立ち上がる男。

エリゼ　「きゃあああぁ……！」

ドン引きするエリゼ。

アリサ　「……どうしたの!?」

そこに、アリサが駆け付ける。

エリゼ　「へ、へ、変態ですっ！」

涙ながらにアリサに抱きつくエリゼ。

アリサ　「え!?」

アリサの前で、両手を翳す皇子。
左手には何も嵌まっておらず、右手には黒い宝石が嵌まっている。

魔界皇子　「我は魔界のプリンス、魔界皇子！　人間よ！　我が左手を埋める、皇子の印を差し出すがいいっ！」

アリサ　「た、確かに変態だわっ……！」

だが、皇子、全く気にも留めず、

魔界皇子　「フハハハハ！　魔界皇子の名のもとに、裁きの断罪を下す時が来たれり！」

右手を振りかざすと、黒いオーラが放たれる。

アリサとエリゼ　「きゃああっ！」

吹っ飛ばされてしまう二人。

エリゼ　「兄……様……」

気絶するエリゼ。

アリサ　「ううっ……」

意識朦朧となるアリサ。

皇子、無言で歩き去って行く。

□ 同・店内

――に悲鳴が聞こえてくる。

エリオット　「ん……!?」

外を見やるエリオット。

× × ×

魔界皇子　「わはははははっ！」

叫んだ皇子が、右手から黒いオーラを放つと、商店街の看板や八百屋の果物などを次々に吹っ飛ばしていく。

魔界皇子　「愚かなり、人間共よ。我が手の疼きを癒やす印、差し出すがいい！」

悲鳴を上げて逃げ惑う通行人達。

店から飛び出して来るマキアス達。

クロウ　「おいおい、真っ昼間から露出多すぎじゃねえか？」

マキアス　「なんなんだ、君は!?　変態なのかっ!?」

エリオット　「うん、変態だね」

皇子、動じず、マキアスを睨むと、

魔界皇子　「ククク。ちょうどいい。その眼鏡、我が闇の眷属としていただくぞ！」

マキアス　「なにっ!?」

皇子が右手から放ったオーラが、マキアスの眼鏡を包む！

すると、眼鏡は宙に浮かび上がり、

マキアス　「メガネ！　僕のメガネがっ!?」

眼鏡を探すマキアスの前で、見る見る巨大化していき、
メガネの怪物になった！

魔界皇子　「ゆけ！　メガネール！　この世界を恐怖によって
服従させるのだ！」

メガネール　「メガネール!!」

咆吼を上げると、通行人たちに光線を放つ怪物。

通行人たち　「（悲鳴）きゃあぁっ！」

　喰らった通行人達は、みんなマキアスと同じ型の眼鏡をかけてしまい、

通行人A　「な、何、この眼鏡!?　外れない！」

通行人B　「ダサい！　ダサすぎるわっ！」

　マキアス、目をシパシパさせつつ、

マキアス　「くそおっ！　見えないが、分かるぞ！　僕の眼鏡をバカにするなあぁっ！」

エリオット　「あれは僕もちょっと……」

□　店裏の路地

　気を失っていたアリサの胸のペンダントが淡く点滅する。

アリサ　「ううっ……」

　隣で倒れているエリゼに気付くアリサ。

アリサ　「だ、大丈夫……!?」

　と――表通りから悲鳴が聞こえてきて、

アリサ　「！」

　振り返るアリサ。

アリサ　「なに!?　いったい何が……!?」

　さらに、ペンダントの光が増した時である。

声　「モナモナ～～ッ！」

　突如、上空から猛スピードで降ってくる黄色く輝く光の塊。

アリサ　「えっ!?」

　光の塊は、アリサの制服ポケットから覗くマクモナルドのマスコット、モナ君に吸い込まれていき。

　次の瞬間――。

モナ　「モナ！　やっと会えたモナーっ！」

　ポンッとぬいぐるみサイズに大きくなって、ポケットから飛び出した！

アリサ　「しゃ、しゃ、しゃべったーーっ!?」

モナ　「詳しい話は後モナ！　魔界皇子にこの世界が狙われてるモナ！」

　驚くアリサの前で浮遊するモナ。

アリサ　「はあっ!?」

モナ「君が持つ魔界皇子の印の欠片を、奴は探してるモナ！」

　と、アリサの胸のペンダントを指さす。

モナ「皇子の欠片があいつの元に揃ったら、大変なことになるモナ……！」

　ガクガク震えて怯えるモナ君。

アリサ「ちょ、ちょっと待って！　魔界皇子とか、何とかの欠片とか、いきなり言われても意味わかんないし！　あなた、何なのよ⁉」

モナ「モナは……モナ国王だモナ……！」

アリサ「モナ王⁉　アイスか何か⁉」

モナ「いいから行くモナっ！」

　ドンッとアリサの背中を強引に押すモナ。

アリサ「きゃっ！」

□商店街の通り

トワ「みんな、こっちだよ！　早く逃げて！」

　トワが避難誘導するが、大混乱の商店街。

メガネール「メガネール！」

　放った光線がトワを直撃！

トワ「ひゃあああっ！」

　どこかで見たような丸眼鏡になるトワ。

トワ「なんで私だけ、丸い眼鏡なのっ⁉」

クロウ「トワ！」

　トワの手を引き、店内に逃げるクロウ。

魔界皇子「ふはははははっ！」

×　×　×

　路地の影から——その様子を見て愕然となるアリサ。

　マクモナルドが、メガネのモンスターに襲われ破壊されそうになっている。

アリサ「な、何なのよ、これ……！」

モナ「キミしかいないモナ！　さあ！　この変身アイテムARCUSで、伝説の魔法少女に変身するモナ！」

　と、金属製のデバイスを手渡すモナ。

アリサ「ま、魔法少女⁉　私がっ⁉」

モナ「大丈夫モナ！　自分を信じるモナ！」

アリサ「そんな……！」

　フラッシュ——朝の夢より。
　魔界皇子と戦うまじかる☆アリサの姿。

アリサ「(M)まさか……あの夢……⁉」

　アリサ、グッとARCUSを手にする。

アリサ「(M)あれは……夢じゃなくて、本当のことだっていうの……⁉」

　その瞬間——一際強く輝く胸の赤い宝石。
　宝石はARCUSの中央にはめ込まれて一体化し、
　アリサの体が眩い光に包まれる！

魔界皇子「(気付いて)む、何だ⁉」

　その光に目を覆う皇子。

アリサ「あああっ……！」

　ARCUSの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始めるアリサ。
　——変身BANK。

まじかる☆アリサ「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

　ピンク色の服を来た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ「魔法少女まじかる☆アリサ！」

　スタッと着地し、可愛く決めポーズした。

まじかる☆アリサ「って、ええええっ⁉」

　自分の姿を見て、驚くアリサ。

まじかる☆アリサ「な、な、なんて恥ずかしい格好してんのよっ⁉」

　隣に飛んできたモナ君が、

モナ「危ないモナ‼」

まじかる☆アリサ「え⁉」

メガネール「メガネール‼」

　いきなり、眼鏡を弾丸のように連射してくる怪物。

まじかる☆アリサ「きゃっ！」

　慌てて避けると、足が光に包まれ、空高くジャンプ！

まじかる☆アリサ「って、と、飛んだーーっ！」

　宙を舞いながら驚くアリサ。

モナ「魔法少女の力モナ！　このまま、一気に蹴りを喰らわせるモナ！」

まじかる☆アリサ「け、蹴りって⁉　こうっ？」

　蹴りの構えを取ると、再び足が光に包まれ、急降下！

メガネール「(怯んで) メガネール⁉」

　だが、狙いを外して怪物の目前に落下。

　アスファルトが激しく弾け飛ぶ。

まじかる☆アリサ「す、凄い力……！」

　驚きの顔で自分の足を見やる。

魔界皇子「ほほう……。貴様、人の身で、この魔界皇子に抗うつもりか？」

　アリサの前に立ちはだかる皇子。

まじかる☆アリサ「あなたは……！」

モナ「魔界皇子！　大人しく、まじかる☆アリサの軍門に降るモナ！」

まじかる☆アリサ「ちょ、ちょっと、煽らないでよ！」

魔界皇子「ククク！　よかろう。ならば、我が力を……。この世を常闇に包む魔界皇子の力の片鱗を見せてやろう！」

　ブワッと右手から黒いオーラを放つ皇子。

まじかる☆アリサ「きゃあっ⁉」

　オーラを食らい、吹っ飛ばされるアリサ。

×　×　×

　店内から見ているマキアスや、トワたちがそれに気付いて、

エリオット「あれは……！」

トワ「女の子が、戦ってる……⁉」

マキアス「見えない！　見えないぞっ！」

クロウ「……！」

×　×　×

メガネール「メガネール！」

　さらに、アリサに突進してくる怪物。

モナ「来るモナ！」

まじかる☆アリサ「っ！」

　咄嗟に地面を蹴り、キックを繰り出すが、

まじかる☆アリサ「ああっ！」

　勢い余って壁に激突してしまう。

その背後に回り込むメガネール。

メガネール　「メガネール！」

まじかる☆アリサ　「くっ……！」

振り返り、パンチや蹴りを、必死に両腕でガードして
耐えるが、ついに喰らって、

まじかる☆アリサ　「きゃあああっ！」

道路に叩き付けられるアリサ。

モナ　「しっかりモナっ！」

まじかる☆アリサ　「はぁはぁ……やっぱり、だめよ……。私なんかに……
魔法少女だなんて……」

傷つき、項垂れるアリサ。

魔界皇子　「ククク。口ほどにもない。とどめだ！」

メガネール　「メガネール！」

アリサに突進するメガネール。

その時である――。

トワの声　「頑張ってっ！」

まじかる☆アリサ　「！」

店のドアから身を乗り出したトワやエリオット達が、

エリオット　「負けるなっ！」

マキアス　「よく分からんが、眼鏡を頼む！」

クロウ　「かましてやれっ！」

一斉にアリサに声援を送る。

まじかる☆アリサ　「みんな……！」

その声に、ハッと顔を上げるアリサ。

まじかる☆アリサ　「そうよ……みんなの……」

フラッシュ――笑顔で歓談するリィンや
マキアス、エリゼたちの姿。
――笑顔で働くトワの姿。

必死に立ち上がるアリサ。

まじかる☆アリサ　「みんなの大事な場所を……守らなきゃっ！」

ブワッと魔法の光に体が包まれ、光を纏った拳を、
目前に迫った怪物にカウンターで喰らわせた。

メガネール　「メガネール⁉」

ドゴオオオンと吹っ飛んで電柱に叩きつけられる怪物。



魔界皇子　「なにっ⁉」

まじかる☆アリサ　「（手を見て）あたった……！」

刹那――ARCUSに魔法の光が集まり、カッと強い虹色の閃光を放つと、アリサの手に出現する大きな弓。

まじかる☆アリサ　「これは⁉」

モナ　「伝説の愛の弓、トゥインクル・スターモナ！　みんなを思うアリサの心に、応えてくれたモナ！」

まじかる☆アリサ　「愛の弓……トゥインクル・スター……！」

メガネール　「メガネール……！」

キッと決意の顔になると、トゥインクル・スターを構える。

突っ込んでくる怪物に狙いを定め、弓を引き絞るアリサ。

まじかる☆アリサ　「はあああああっ！」

愛の力が矢の先に集中して――。

まじかる☆アリサ　「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ　「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター‼」

愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

虹色の矢は怪物の体を貫いて、ハート型の光で包み込む。

メガネール　「メガネールっ!!」

断末魔と共に浄化される怪物。

モナ　「やったモナ！」

まじかる☆アリサ　「……！」

元に戻ったマキアスの眼鏡が、アリサの手元に落ちてくる。

魔界皇子　「ぬううっ！　まじかる☆アリサ……。その名、しかと我が記憶に刻みつけた。いずれ、常闇の世界へ葬ってくれるわっ！」

そう言うと、黒いオーラに包まれて姿を消す皇子。

辺りの破壊された建物が元に戻っていき、

トワ　「(眼鏡が消え)あっ！」

人々の眼鏡も消えていく。

エリオット、クロウ達が駆け寄ってきて、

クロウ　「やるじゃねえか！」

エリオット　「ねえねえ、君、名前は!?」

まじかる☆アリサ　「な、名乗るほどの者じゃありません」

汗ジトで引くアリサ。

マキアス　「メガネ、メガネ……」

まじかる☆アリサ　「はい、どうぞ」

と、マキアスに眼鏡をかけてやる。

マキアス　「(その顔を見て)！」

アリサ、ニッコリ微笑むと、空高くジャンプして去っていく。

その姿を呆然と目で追うマキアス。

マキアス　「(赤面し)……いいな」

エリオット　「うん」

頷くエリオット。

□同・店の裏の路地

変身の解けたアリサが、エリゼを抱き起こしている。

アリサ　「エリゼちゃん、大丈夫？」

エリゼ、ゆっくりと目を覚まして、

エリゼ　「……ううっ……兄様？　リィン兄様はどこに……？」

立ち上がり、辺りを見回すエリゼ。

アリサ「さ、さあ、どこかしら……？」

エリゼ「おどき下さい！　リィン兄様！　兄様はどこですか！
兄様ーーっ！」

リィンを探して走っていくエリゼ。
モナがアリサの背後から顔を出して、

モナ「すごい兄妹愛モナ……」

アリサ「そういえば、リィンの姿、見なかったような……？」

□離れた公園の茂み――

リィン「ハァハァハァハァ……」

変身が解けたリィンが、苦しそうに右手を押さえている。

リィン「何なんだ……。この宝石は……いったい何なんだっ……。
俺は今まで、何をしていたんだ……!?」

その右手の甲には、どす黒い宝石が埋め込まれていて――。

〈つづく〉



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第2話Aパート！　魔法少女となってしまったアリサの新たな学生生活は苦難の連続に見舞われて……!?

第2話「二人目の魔法少女!?」

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）

モナくん

○

ラウラ・S・アルゼイド

エマ・ミルスティン

マキアス・レーグニッツ

エリオット・クレイグ

エリゼ・シュバルツァー

クロウ・アームブラスト

トワ・ハーシェル

シャロン・クルーガー

トヴァル・ランドナー

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）

○

その他

□朝――

目覚ましが鳴り響く中で、

モナ 「アリサ、起きるモナ！　朝だモナ！」

ベッドの上でピョンピョン跳びはねているモナくん。

アリサ 「ん……」

アリサ、ゆっくりと目を開けると、その視界にドアップで映るモナくん。

アリサ 「ああ、なんだ……。夢か……」

布団を被り、また眠ろうとするアリサに、

モナ 「夢じゃないモナ!!」

と、アリサの顔に覆い被さった。

アリサ 「(息ができず) む、むぐぐぐ……」

慌ててモナくんを引っぱがすアリサ。

アリサ 「ぷはあああっ……！　し、死ぬかと思ったじゃないの！」

モナ 「こっちも死ぬかと思ったモナ……」

壁にベシャッと張り付いて、平らになっているモナくん。

アリサ 「……あ、ご、ごめん……」

アリサ、ふうっと息を吐いて立ち上がると――。

アリサ 「あれはやっぱり……」

× × ×

フラッシュ――#1より。

――魔法少女に変身して戦うアリサ。

――その前に立ちはだかる魔界皇子。

――眼鏡の怪物などの様子が脳裏に蘇る。

× × ×

アリサ 「本当のことだったのよね……」

モナ 「当たり前モナ！　君は魔法少女になったんだモナ！」

アリサ、モナくんの顔を掴むと、

アリサ 「昨日は帰ってくるなり疲れて寝ちゃったけど……

　　　　　あなた何者なのよ？」

モナ　　「モナ⁉」

アリサ　「魔法少女って、いったい何⁉　ちゃんと説明して！」

　　　ズイッとモナくんに額を近づける。

モナ　　「そ、それはこれから、たっぷり説明するモナ‼」

　　　キランと目を輝かせるモナくん。

□ オープニング

□ 自室でいきなり変身するアリサ

まじかる☆アリサ　「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

　　　ピンク色の服を来た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ　「魔法少女まじかる☆アリサ！」

　　　自分の姿を鏡でマジマジと見て、汗ジトになるアリサ。

まじかる☆アリサ　「うう、やっぱりこれは絶対に、人には見せられない衣装だわ……」

モナ　　「そうモナ。魔法少女であることは、絶対に人にバレてはいけない

　　　　モナ！」

　　　怖い顔で言うモナくん。

まじかる☆アリサ　「も、もし、バレちゃったら？」

モナ　　「モナになってしまうモナ！」

まじかる☆アリサ　「えええええーーっ‼」

×　×　×

　　　アリサのイメージ——

　　　モナくんと手を繋いだ、モナの姿のアリサ

　　　（髪型がアリサのまま）が、

　　　マクモのカウンターでお客を出迎える。

モナアリサ　「いらっしゃいませモナ！」

×　×　×

　　　顔面蒼白のアリサ、ポンと変身が解けて、

アリサ「そ、そんなの絶対いやーーーーっ!!」
モナ「ショックで変身が解けたモナ」
アリサ「そりゃそうよ！　絶対いやよ！（モナくんを指さし）そんな姿なんかに誰が……！」
と、モナくん、わざとらしく黄昏れて、
モナ「モナも、好きでこの姿になったわけじゃないモナ」
アリサ「あ、ああ、そうだったわね……。あなたは元々、どんな姿だったの？」
モナ「ふ、それは秘密モナ……。モナはモナの国の国王モナ」
アリサ「モナモナうるさい……」
モナ「ちゃんと聞くモナ！　そもそも、『ARCUS』は、モナの国に昔から伝わっていた伝説の変身アイテムモナ」
アリサ「これが……伝説のアイテム？」
ARCUSを取り出すアリサ。
モナ「実は、魔王によってモナの国は征服され、この『ARCUS』を手に、命からがら脱出してきたモナ！」
と、どこからともなく残り二つのARCUSを取り出すモナ。
アリサ「あと二つもあるの!?　っていうか、魔王ってなに!?
あの魔界皇子に関係あるの!?」
モナ「奴は魔王の息子……。この世界を征服しようと企んでいるに違いないモナ！　魔界皇子を倒して、モナの国も救って欲しいモナ！」
アリサ「ちょ、ちょっと待ってよ！　話が壮大すぎてわけが分からな……」
その時——コンコンとノックされる部屋の扉。
アリサ「!?」
扉の向こうから、
シャロンの声「アリサお嬢さま。今朝は、アルバイトはよろしいのですか？」
アリサ「あ！　そ、そうだったわ！　すぐ行くから！」
慌てて着替え始めるアリサ。
すぐにハッと気付いて——。
アリサ「あなたはあっち向いてなさい！」
モナ「モナっ!?」
またもベシっと壁に叩きつけられるモナくん。
モナ「国王にこの仕打ち、ひどいモナ……」
ずるりと落ちて。

□ マクモナルド・全景

昨日の事件が嘘のように片付いている商店街。
人通りも戻っている。

□ 同・店内

トワ「町もすっかり元通りだね」
カウンターから外の様子を見ているトワ。
アリサ「ええ、よかったですね」
モナくんもマスコットのふりをしてカウンターにいる。
トワ「そういえば、アリサちゃんは見たの? 魔法少女?」
アリサ「え!? ま、魔法少女!? わ、私は休憩室でお昼寝してたので……。
後で話を聞いただけなんですけど……」
焦って誤魔化すアリサ。
トワ「そっか、残念だなぁ」
スマホを取り出して見せるトワ。
タップして写真のアルバムを開く。
トワ「昨日出た怪物さんと変態さんだっけ? 魔法少女さんと一緒に
撮影したんだけど……」

× × ×

回想フラッシュ――応援しながら、トワやエリオット、
クロウたちが、戦うまじかる☆アリサをスマホで撮影する。

× × ×

だが、開いた写真には、壊れた町以外は
何も映っておらず――。
トワ「あの子達が姿を消したら、写真も消えちゃってたんだよね」
アリサ「(汗ジトで) へ、へえ、不思議なこともあるんですね……」

トワ　「町も元に戻ったし、結局ニュースにもならなくて、都市伝説みたいに言われてるんだよ」

モナがウンウンと頷いている。

モナ　「（小声）これも魔法少女のちからモ…モガッ！」

アリサ、慌ててモナの口を塞ぐ。

トワ　「あれ？　何か言った？」

アリサ　「い、いえ何でも！」

トワ、そのまま離れて、機材の整備を始めたりする。

アリサ　「（小声）あんな姿が晒されなくて、ホッとしたわ……」

モナ　「（口を開いて）あんな姿とは失礼モナ。あれは我が国で由緒正しき……」

アリサ　「ちょっと、黙って……！　あなたはマスコットのふりをしてなさい！」

モナの口を押さえつけるアリサ。

モナ　「モガガガガ！」

その時、お店の自動ドアが開いて、

トワ　「いらっしゃいませっ！」

アリサ　「あ、いらっしゃ……」

その言葉を遮って、

マキアス　「美少女だっ‼」

バンッと店に入ってくるマキアス。

マキアス　「あの美少女を、探しているんだ！　どこだ、美少女は⁉」

店内を必死に見渡すマキアス。

アリサ　「は、はあっ⁉」

トワ　「どうしたの、マキアスくん？」

エリオットが後から続いてきて、

エリオット　「すみません。昨日から、必死になって、あの魔法少女を探してるみたいで……」

やや呆れ気味のエリオットに被せて、

マキアス　「そうとも！　彼女は僕の眼鏡の恩人！　天使！　いや、女神様だっ！」

バンッとカウンターを叩いて、

マキアス　「何としても探し出し、あの時のお礼を一言だな！　そ、そして、お礼の後は、こ、この恋文をだなっ……！」

アリサの前で、ラブレターを取り出すマキアス。

アリサ「うわ、キモッ……」

ドン引きするアリサ。

マキアス「君に言われる筋合いはないっ!! 美少女はどこだっ!?」

アリサ「し、知らないわよっ！」

トワ「えぇっと、ご注文は……」

エリオット、暴れるマキアスを羽交い締めにして、

エリオット「はいはい、どうどう。他のお客さんに迷惑がかかるからね～。あ、モナバーガーセットと、僕はパンケーキで」

マキアス「ぬうう！ どこだ、僕の想い人はどこだあぁあっ！」

トワ「はーい。お買い上げありがとうございまーす」

さすがに営業スマイルが崩れかかっているトワ。

アリサも汗ジトで見送りつつ、

アリサ「そういえば、リィンは？ 昨日は、あなた達と一緒じゃなかったの？」

エリオット「ああ、体調を崩して先に帰ったんだって、後で連絡が来たよ」

アリサ「そっか……。ちょっと心配ね……」

□リィンの部屋

トントンと部屋の扉を叩く手。

エリゼ「兄様、リィン兄様……？」

× × ×

部屋の中――。

ベッドの上で一人、蹲っているリィン。

リィン「だ、大丈夫だ、エリゼ……。食事なら、そこに置いていってくれ」

エリゼの声「ですが……」

ドアに手をかける音に。

リィン「入るなっ！」

必死に叫ぶリィン。

リィン「頼むから、俺の部屋には……一歩も入らないでくれ……」

謎の黒い宝石が右手に嵌まっており、ドクンドクンと、

鼓動と共に疼いている。

リィン 「ハァハァハァ……」

黒い宝石を見やるリィン。

リィン 「(M) これは何なんだ……。俺はいったい何をしていたんだ……
何も分からない……」

苦悩するリィン。

× × ×

エリゼ、扉の前に食事のトレイを置き、

エリゼ 「(M) まさかとは思いますが……。リィン兄様が……
ひきこもりに!?」

ショックを受けているエリゼ。

□ それから数日後の新学期――

□ アリサ達の通う高校・全景

ライノの花が咲き乱れる中、生徒達が登校してくる。

□ 同・校門前

アリサの姿もあり、モナくんが、マスコットのふりをして、
鞄にくっついている。

アリサ 「結局、あれから怪物も変態も出なかったわね」

モナ 「油断できないモナ。いつ奴らが来てもいいように、備えるモナ」

アリサ 「心配しすぎよ。このまま何事もなく、平和に過ごせたらいいわ」

と、何かの予感のように、ザザッと一陣の風が吹いて
ライノの花びらが舞う。

アリサ 「(思わず目を覆い)!」

× × ×

一人、校外の通りを歩く生徒(※実はリィン。
まだ姿は見せない)が、風に吹かれ、黒い手袋で覆った



右手で顔を隠す。

生徒　「（学校を見やり）……」

× × ×

と、モナくんが何かにハッと気付いて、

モナ　「アリサ！」

アリサ　「え⁉」

モナ　「見えてるモナ！」

なんと、風に吹かれてアリサのスカートがめくれて、
モナくんの位置からはバッチリ見えていた。

マキアス　「なんだ、今の声は？」

ちょうど後ろを、エリオットと共に歩いていたマキアスが、
思わずアリサの方を 振り向き、

マキアス　「あ……！」

スカートの中を目撃しそうになった時である！

女生徒の声　「はあああっ‼」

ドゴンとマキアスに強烈な竹刀の一撃を食らわせる女生徒。

マキアス　「ぐわあぁあっ!!」

　派手に吹っ飛び、地面を転がっていくマキアス。

　アリサ、慌ててスカートを抑え、

アリサ　「ラ、ラウラ……！」

　振り切った竹刀をスッとかっこよく構えたのは、長髪の少女
　――ラウラである。

ラウラ　「女生徒のスカートの中を覗くなど、不届き千万！
このアルゼイドの剣にかけて、成敗してくれる！」

　ぶっ倒れているマキアス。

　周りの女生徒から「素敵っ！」「ラウラ様！」などと、
　黄色い声援が飛び交う。

ラウラ　「危ないところであったな、アリサ」

アリサ　「あ、え、えっと……。ありがとうって言えばいいのかしら……」

　戸惑っているアリサの所に、

エマ　「いえ、今のは不可抗力と言いますか、彼に責任はないのでは……」

　眼鏡の少女エマも歩み寄ってくる。

ラウラ　「そ、そうなのか……？」

　マキアス、頭を抑えながら、

マキアス　「くっ……。エマ君の言うとおりだぞ。僕は風紀委員だ。
そんな破廉恥なまねをするものか！」

　立ち上がるマキアス。

エリオット　「（ボソッと）生きてたんだ」

マキアス　「（苦笑しつつ）さすが、剣道場の娘の一撃。かなり効いたけどな
……」

　ラウラ、マキアスに歩み寄り、

ラウラ　「すまない。大変失礼した！」

　頭を下げて謝るラウラ。

マキアス　「そんなに気にしないでくれ。大丈夫だ」

ラウラ　「いや、剣の道に生きる者として、あってはならぬ間違い。
誠にすまなかった！」

　土下座してマキアスに謝るラウラ。

マキアス　「ちょ、ちょっと……！」

　辺りを見ると、「何よ、あの男」「ラウラ様に何を」などと、
ヒソヒソ話す女子生徒の姿が。

アリサ「あ、ああ！　もういいわ！　ラウラ、エマ！　早く教室に行きましょ!!」

　アリサ、ラウラとエマの背を押していく。

□ 校内にチャイムが鳴り響く

□ 同・教室

アリサ「何はともあれ、二人とも一年生でも同じクラスのようね」

ラウラ「うん。皆、よろしく頼むぞ」

エマ「はい、こちらこそ」

　固まって席に着いているアリサたち。

　他にも、フェリスやベッキーなどの姿もある。

　（クラスメートは適宜）マキアスとエリオットも同じくいる。

　ラウラ、アリサの鞄を見やって、

ラウラ「ときに、先程から気になっているのだが……」

アリサ「え？」

　モナくんのマスコットをじっと見やるラウラ。

アリサ「ああ、これのこと？」

　モナくんのマスコット付き鞄を見せる。

ラウラ「も、勿論、私自身が気になっているのではないぞ！」

　ゴホンと咳払いして、

ラウラ「道場の子供たちの間で話題のようでな！　同じ門下として、如何なる物なのか知っておきたくてな！」

アリサ「どうぞ、じっくり触ってみて」

　モナくんを差し出すアリサ。

モナ「（M）モナっ!?」

ラウラ「そ、そうか……」

　恐る恐る手を伸ばすラウラ。

ラウラ「し、しかし、この私が……このような可愛い物を触るなど、な……」

　赤面し、遠慮しているラウラに、

アリサ「いいのいいの、減るもんじゃないし」

モナ「（M）そういう問題モナ!?」

エマ「マクモナルドのマスコット。女子にも、大人気ですものね」

ラウラ「い、いやいや、女子などと、この私が……。だが、構わぬというのなら、ほんの少しだけ……」

　と、手を伸ばしたとき――。

ラウラ「(手を止めて) む?」

　何かの気配に気付くラウラ。

　ガラッと教室の後ろの扉が開いて入って来たのは、リィンだった。

　ラウラと、アリサたち、手を止めてそちらに注目し、

アリサ「あら、リィン。久しぶりね」

　と、挨拶するアリサ。

リィン「……ああ」

　一言返事をすると、アリサの席の後ろに座るリィン。

アリサ「(気付いて) その手……?」

　見ると、リィンは右手に黒い手袋をはめている。

マキアス「どうしたんだ、リィン?」

エリオット「怪我でもしたの?」

リィン「いや、何でもない……」

　マキアスとエリオット、ラウラも見て、

ラウラ「ふむ……。同じ剣の道を志す者として、看過できぬな」

アリサ「そうよ。大丈夫なの?」

　心配したアリサが、リィンの手に触れようとすると――。

リィン「触るなっ――!」

　思わず大声で叫ぶリィン。

アリサ「ど、どうしたのよ……!?」

　驚くアリサたち一同。

リィン「……!」

　ハッと我に返るリィン。

　右手を暫し見つめ、何かを決意すると、バッと椅子の上に立ち上がり、

リィン「わ、我が右手は……闇の眷属のしもべなり! 触れる物全てを、取り込んでしまうのだ!!」

　いきなり厨二病臭い台詞を吐く。

アリサ「は、はあっ!?」

ラウラ「何なのだ⁉」

ドン引きするアリサたち。

マキアス「リィン、君はまさか、あの変態皇子の真似でもしてるのか⁉」

リィン「ハ、ハーッハハハハ！　まあ、そんなところだ！
ハーッハハハハ！」

その濃いキャラに他の女子達もドン引き。

アリサ「へ、変よね……。あんなキャラじゃなかったような……」

ラウラ「うん。何やら、どす黒い邪念のようなものを感じるな……」

エリオット「ただの厨二病じゃないの？」

そこに——

教師の声「よっ、待たせたな！」

颯爽と入ってくる教師。

トヴァル「担任のトヴァルだ！」

白衣を着た化学教師のトヴァルだ。

エマが首を傾げて、

エマ「あの……。このクラスの担任はサラ先生とお聞きしていたのですが？」

トヴァル「ああ。確かにそうだったが、サラ先生は先日、寿退職されてな！」

アリサたち「ええーーっ⁉」

ドっと驚きの声に包まれる教室。

マキアス「あ、あの、万年独身、大酒飲み残念女教師と言われたサラ先生が⁉」

エリオット「言い過ぎだよ。だいたい当たってるけど」

トヴァル、生徒達を見渡し、

トヴァル「おいおい、静かにしろ。早速、お前達に新しい仲間を紹介するぞ」

ザワっと盛り上がる教室。

アリサ「転校生かしら？」

エマ「二年からとは、珍しいですね……」

トヴァル「ほら、入れー！」

男子生徒の声「うーっス」

トヴァルの呼び掛けに、教室に入ってくる男子生徒。

（顔は見せず）

アリサ「……えっ！」

呆気に取られるアリサ。



黒板の前で、大きくチョークでカカッと名前を書いていく
男子生徒の手。
男子生徒、黒板に名前を書き終えると、一同を振り向いて、

リィン　「なっ……！」

クロウ　「——クロウ・アームブラストです。今日から皆さんと一緒の
クラスで、お世話になります」

と、真面目に挨拶するクロウに、

リィン　「ク、クロウ先輩⁉　何でクロウ先輩がここにっ⁉」

ざわざわと驚く生徒たちに、

トヴァル　「いやあ、コイツちょいと単位が足りなくてな。
ようは留年ってやつだ」

クロウ、リィンにウィンクし、

クロウ　「ってなわけで、50ミラはまた来年返すぜ。よろしく頼むわ！」

リィン　「はあああっっ⁉」

クロウのあまりの軽さに、呆れ果てるリィンとアリサたちで
——。

〈中CM〉

「二人目の魔法少女⁉」

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）

モナくん

○

エマ・ミルスティン

マキアス・レーグニッツ

エリオット・クレイグ

エリゼ・シュバルツァー

フェリス・フロラルド

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）

怪物

魔界貴族ユーシス

○

その他



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第2話Bパート！　新たな魔法少女も登場し、物語の舞台は整っていき……!?

□ 高校・体育館

ラウラの声「はああああっ!!」

□ 同・ステージ

——で、竹刀を振るったラウラ（胴着も着ている）が、

ラウラ「めーーんっ!!」

人形に被せた剣道着に、見事な面を打ち込んだ。

「きゃあ！」

「素敵ーっ！」

などと、一斉にステージ下の女子達から、拍手喝采がわき起こる。

——新一年生向けの部活紹介中である。

ラウラ、マイクを手に、

ラウラ「私はラウラ・S・アルゼイドだ。実家は剣道場で、今も修行中の身……」

スッとかっこよく竹刀を構えて、

ラウラ「例え学業中であっても、常にフィジカルを鍛える。そのために我ら女子水泳部はもってこいの場だ！　強き肉体と心を持つ新入部員を求めている！」

呼吸一つ乱さず話すラウラ。

× × ×

その様子を——ステージ袖に控えたアリサが、驚きの顔で見ている。

アリサ「さすが、ラウラ。あんなに激しいパフォーマンスをしても、呼吸一つ乱れてないわね……」

アリサはラクロス部のユニフォームで、ラケットも手にしていて、ポケットにモナ君を忍ばせている。

モナ「なかなかだモナ。第二の魔法少女の素質を感じさせるモナ」

アリサ「ちょ、あんたは黙ってて……！」

同じ部のフェリスが、

フェリス　「アリサさん、集中なさって。ラクロス部も、新入生獲得を目指しますわよ！」

アリサ　「え、ええ……」

　慌ててモナ君を引っ込めるアリサ。

×　×　×

　ステージ上のラウラ、マイクを手に盛り上がって、

ラウラ　「一にフィジカル、二にフィジカルだ！　我らはいつでも、待っているぞっ!!」

　拍手喝采が巻き起こる。

　司会役のマキアス、やや汗ジト気味で、

マキアス　「以上で、女子剣道部……じゃない。女子水泳部の新歓パフォーマンスは終わりだ」

　ラウラ、ペコリと一礼して去る。

×　×　×

　ステージ袖――

　ラウラが、剣道着を着せた人形を抱えて戻ってくる横で――。

マキアスの声　「続いて、男子剣道部！」

　リィンら、男子剣道部が控えている。

リィン　「見事な打ち込みだったな」

ラウラ　「そなたらのパフォーマンスも、期待しているぞ」

リィン　「ああ……。でも、惜しいな。ラウラがうちの部に入っていれば……」

ラウラ　「仕方あるまい。この学校には、女子剣道部がないのだから」

リィン　「確かにな……」

　苦笑しつつ、片手を振るとステージに出て行くリィン。と、

　ラウラ、リィンの右手の手袋を見て、

ラウラ　「（M）あの手、やはり気になるな……。怪我などしてなければよいのだが」

×　×　×

体育館――。

一年生の生徒達の中に、エリゼもいる。

エリゼ　「いよいよ、男子剣道部！　リィン兄様の出番ですね！」

笑顔でステージを見やるエリゼ。

×　×　×

だが――。

他の部員と共に、舞台に立つリィン。

リィン　「……」

心なしか緊張して、右手を握る。

マキアス　「どうした？　男子剣道部？」

ドクンと、リィンの鼓動が高鳴る。

リィン　「――！」

ザワザワと響く一年生の声。

リィンの視界が鼓動と共に歪んでいく。

マキアス　「リィン？」

リィン　「！」

ハッとなったリィン、右手を押さえ、

リィン　「す、すまない……。俺は下がらせてもらう」

そう言い、他の部員達を残して、ステージの袖に消えていく。

×　×　×

エリゼ　「え、兄様⁉」

×　×　×

袖に戻って来たリィンに、

アリサ　「リィン？」

ラウラ　「いったい、どうしたのだ？　今朝から、様子が変だぞ？」

と、気を遣って話しかけるが、

リィン　「な、何でも無い……。大丈夫だ……」

と、出て行くリィン。

アリサ「……心配ね。この前も、体調崩したって聞いたし……」

モナ「そうモナ？」

見送るアリサ。

□体育館裏——

リィンが一人、右手を押さえながらやってくる。

リィン「くっ……またか……なぜなんだ……」

革手袋を外すと、一際黒く輝く右手の黒い宝石！

× × ×

体育館内——アリサの胸元の宝石が、ボウッと淡く輝く。

アリサ「え⁉」

× × ×

体育館前では——ラウラが、竹刀や人形を抱え、他の部員達と共に出て来る。

そこに——。

声「ぐおあああっ……！」

ラウラ「む⁉」

驚く他の部員達。

ラウラ「何事だ……！」

× × ×

ダッと体育館裏に姿を現したラウラ。

ラウラ「！」

なんとその前には、黒いオーラに全身を包まれ、リィンが変身した魔界皇子の姿が！

魔界皇子「グオオオオッ……。疼く、我が右手が、疼くっ！」

ラウラ　「ふ、不審者め……！　そこに直れ！」

　と、ラウラが竹刀を構えたとき、

魔界皇子　「ククク……。丁度いいものがあるじゃないか」

ラウラ　「なに!?」

　ラウラの傍らにある剣道着を着せた人形を見るリィン。

魔界皇子　「我が眷属として、そいつをもらいうける……！」

　カッと右手から黒いオーラを放ち、そのオーラが人形を包む。

　途端に、巨大化を始め、怪物へと変化する胴着を着た人形。

ラウラ　「――！」

　愕然となるラウラ。

□ 同・体育館内

　エリオットら吹奏楽部員が優雅に演奏をしている中で――。

　突如――ドゴン！　と、体育館の壁が突き破られる。

怪物　「オメーーン!!」

　と叫んで、剣道着を着た巨大な怪物が体育館に侵入してきたのだ。

×　×　×

アリサ　「あれは!?」

　ステージ袖から顔を出して驚くアリサ。

×　×　×

　さらに、黒衣に身を包んだ魔界皇子も壁の穴から現れる。

魔界皇子　「フハハハハ！　弱き人間共よ！　魔界皇子の名において、学校など叩きつぶしてくれるわ！　行け！」

怪物　「オメーーン!!」

　叫びながら巨体からパンチを繰り出して、体育館の壁や床を破壊していく怪物。

女子生徒　「きゃあああ！」

エリゼ　「へ、変態よーーっ！」

などと、悲鳴に包まれる体育館内。

× × ×

モナ　「アリサ、魔界皇子の襲撃モナ！　早く変身するモナ！」

アリサ　「で、でも……ここじゃ……！」

体育館内を逃げ惑う一年生達。

フェリスや、他の部の部員達もいる。

アリサ　「変身なんてできないわ……」

× × ×

ステージでは――。

バイオリンの弦を手にしたエリオットが、静かに怒りを溜めていて、

エリオット　「僕の最高のステージを邪魔するなんて……。幾ら変態でも、許さないよ……！」

× × ×

その顔を見たモナ君が、

モナ　「凄い殺気を感じるモナ！　あの子こそ、第二の魔法少女に……！」

アリサ　「エリオットは男子よ、男子っ！」

モナ　「(真顔で)　そうだったモナ!?」

× × ×

と、マキアスがエリオットの首根っこを掴んで、

マキアス　「何をやってるんだ！　全員、ここから避難だーーっ!!」

マイクで叫ぶが、

「きゃあああ！」

「助けてえええ！」

などと、大パニックに陥る体育館内。

魔界皇子　「フハハハハ！」

怪物　「オメーーン！」

　体育館を破壊する怪物。

マキアス　「くっ……どうすれば……！」

　その時——。

ラウラの声　「皆、落ち着くのだ！」

　なんと、竹刀を構えたラウラが、怪物の前に立ちはだかった。

ラウラ　「私がこやつを食い止める！　その隙に、避難を!!」

　そう言い、怪物に果敢に竹刀で挑む。

ラウラ　「はあああっ！」

　打ち込みが見事に決まったかに見えるが、

怪物　「オメーーン！」

　ガシッと竹刀を受け止める怪物。

ラウラ　「くっ……！　急げっ!!」

　鍔迫り合いしながら指示を出すラウラに、一年生の生徒達、
　一斉に逃げ出す。

×　×　×

マキアス　「さあ、僕たちも！」

エリオット　「ちぇっ……」

　エリオットと共に、生徒達を連れて逃げ出すマキアス。
　アリサはステージの幕に身を隠して残り、

アリサ　「ラウラ……無茶よ……！」

モナ　「モナ……！」

×　×　×

　ラウラ、一対一で怪物と対峙。

魔界皇子　「フハハハ！　生身で我が眷属に挑もうとは、片腹痛いわ！」

　怪物の背後に控えている皇子に、

ラウラ　「何事もフィジカルだ。この私の鍛えた腕で、化け物など追い払ってみせる！　はあああっ！」

　上段に竹刀を構えて突進！

魔界皇子　「やれ！」

怪物　「オメエエエン！」

　怪物も突進、ラウラに体当たりを喰らわせる。

ラウラ　「ぐううっ⁉」

　宙に投げ出される竹刀。

　ラウラも吹っ飛ばされ——。

　ステージに叩きつけられる。

　その脇に、落ちてきた竹刀が転がる。

　気絶したかに見えるラウラ。

魔界皇子　「ふっ。口ほどにもない。行くぞ！」

　魔界皇子、サッと踵を返し、怪物を率いて体育館を出ようとする。

×　×　×

アリサ　「……ラウラ……！」

　ステージ上のラウラに駆け寄るアリサ。

モナ　「今なら変身できるモナ！」

　体育館内は無人で、

アリサ　「そ、そうね！　分かったわ……！　ラウラ、少しだけ、待ってて……！」

　素早くアークスを掲げるアリサ。

　ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

魔界皇子　「む⁉　この光は⁉」

　驚き振り返る皇子。

　——変身ＢＡＮＫ。

まじかる☆アリサ　「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

　ピンク色の服を来た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ　「魔法少女まじかる☆アリサ！」

　スタッと着地し、可愛く決めポーズした。

魔界皇子　「おのれ、ククク、またも現れたか！　我が宿敵、まじかる☆アリサよ‼」

まじかる☆アリサ　「学校を壊すなんて、許さないわ！　はあああっ！」

　ジャンプして怪物にキック！

　その足が魔法の光に包まれて、

怪物「オメーーン!?」
　蹴りを食らい、皇子に衝突して壁に吹っ飛ばされる怪物。
魔界皇子「ぐわっ！」
　怪物との間で、壁に挟まれる皇子。
まじかる☆アリサ「や、やったわ！」
　着地するアリサ。
　その背後から——。
ラウラの声「そ、そなたは……!!」
まじかる☆アリサ「えっ——!?」
モナ「モナっ!?」
ラウラ「アリサ……なのか!?」
　なんと、ラウラは強靭な体のおかげで無傷で立ち上がっており、
ラウラ「……見たぞ……。眩き光に包まれて、そなたが変身……する
姿を……！」
まじかる☆アリサ「えええええーーっ!?」
モナ「み、見られたモナ……！」
まじかる☆アリサ「そ、そんな……！」

× × ×

　フラッシュ——モナくんと手を繋いで、仲良く登校する
モナアリサの姿！
まじかる☆アリサの声「も、モナになっちゃうわ……！」

× × ×

　アリサ慌てて誤魔化して、
まじかる☆アリサ「違う、違うのよ、ラウラ！　何も見てない、見てないわよね！」
ラウラ「いや、確かにこの目で！」
　顔面蒼白のアリサに、
モナ「心配ないモナ！　この子を魔法少女にすれば、万事解決モナ！」
まじかる☆アリサ「はあああっ!?　そ、そんな無茶苦茶な!?」
ラウラ「ま、魔法少女だと!?」
　モナくん、ピョンと跳ねて、ARCUSを差し出すと、

モナ　「この変身アイテムARCUSを使えば、君も魔法少女モナ!!
　この世界を守るため、変身するモナ!!」
ラウラ　「世界を……守る……」
　グッと考え込むラウラ。
ラウラ　「そうか……皆を守るため。ならばよかろう」
まじかる☆アリサ　「受けるの!?」
ラウラ　「だが、一つだけ条件がある」
モナ　「何でも言ってみるモナ！」
　ラウラ、スッと息を吸うと、決意の顔で、
ラウラ　「お、お……お主を、モフモフさせてくれっ……！」
モナ　「モナッ!?」
　と、魔界皇子がようやく怪物をおしどけ、
魔界皇子　「くううっ！　この俺を差し置いて、何を話している！　やれ！」
怪物　「オメメーン!!」
　突進してくる怪物に、
まじかる☆アリサ　「くっ……！　ここは、私に任せて！」
　ジャンプして、魔法の光に包まれた拳で怪物にパンチを
　食らわせる。
　ラウラはモナくんを抱え、竹刀で瓦礫を避けながら
　打ち明ける。
ラウラ　「私は幼い頃より、父に剣士として育てられてきた」

× × ×

　回想で——父と共に剣の素振りをする幼いラウラ。
ラウラの声　「それゆえ、可愛い物を愛でることを己に禁じてきたが……」
　——おもちゃ売り場で、変身魔法少女のマスコット妖精の
　クマを見る幼いラウラ。
ラウラの声　「だが、だめなのだ……。本当は私は、可愛い物がどうしようもなく
　好きなのだ！」
　——モフモフしたクマのつぶらな瞳に惹かれ、
　手を伸ばしかけるが、幼いラウラ、かぶりを振り、
　ダッシュで離れる。



× × ×

ラウラ　「そして今は……マクモナルドのマスコット……。そなたをモフモフしたくて、たまらないのだ！」

グッとモナくんに顔を近づけるラウラ。

モナ　「モナーっ⁉」

アリサ、必死に怪物と戦いながら、

まじかる☆アリサ　「頼むわ、モナくん！　私一人じゃ……！」

モナ　「し、仕方ないモナ。背に腹は変えられないモナ！　さあ、モフモフするモナ！」

ラウラ　「いいのか⁉　本当にいいのだな⁉」

モナ　「どんとこいモナ‼」

覚悟を決めてお腹を差し出すモナくん。

ラウラ　「う、うおおおおおっ！　モフモフだあああっ！」

モナくんのお腹を、思いっ切りモフモフするラウラ‼

モナ　「も、モナモナモナ～～っ！　そ、そこはだめモナ～～～っ‼」

ラウラ　「漲る……。力が、漲る‼」

モナ君が気絶寸前で意識が薄らぐ中、カッとＡＲＣＵＳが光を放つ。

ラウラ　「これは……！」

竹刀と融合し、変身アイテムになった。
（竹刀の柄にアークスが合体したような構造を想定）

ラウラ　「変身だ！」

竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。
——変身ＢＡＮＫ。

ラウラ　「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」

青い服を着て、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！

まじかる☆ラウラ　「魔法少女！　まじかる☆ラウラ!!」

着地し、かっこよく大剣を構えた。

まじかる☆ラウラ　「こ、これが、私……!?」

自分の姿を見て驚くラウラ。

まじかる☆ラウラ　「なんという……ヒラヒラ……」

思わず赤面してしまうが、

まじかる☆アリサ　「ラウラ、力を貸して！」

その声に、ハッと顔を上げ、

まじかる☆ラウラ　「心得た……！」

ダッと駆け出すラウラ。
その前に魔界皇子が立ちはだかり、

魔界皇子　「おっと。貴様の相手はこの俺だ！これでようやく二対二、対等になったな！」

と、皇子は余裕の表情を見せるが——。

まじかる☆ラウラ　「はあああああっっ！」

と、気合い一閃させたラウラの剣撃に危うく斬られそうになる皇子。

魔界皇子　「（躱して）ぬおおおおっ!?」

まじかる☆ラウラ　「ちぃっ！」

返す刀で、大剣を床に打ち付ける。
魔界皇子、なんとか飛び退き、

魔界皇子　「き、貴様は、魔法少女ではないのか!?　なんだその攻撃は!?」

ラウラ、かっこよく剣を構え、

まじかる☆ラウラ　「フ……。私は魔法などに頼らぬ！　戦いの基本は、フィジカルだあああっ!!」

ドゴーンと気合い一閃、振り回した大剣が皇子にヒット！

魔界皇子　「ぬおわあああああっ！」

体育館の屋根を突き破って吹っ飛んで行く皇子。

魔界皇子　「おのれえええ！　覚えておれ、まじかる……ではない！ふぃじかる☆ラウラよおおおっ！」

空の星になった。

怪物　「オメーン!?」

怪物がそれを見てたじろぐ。

まじかる☆ラウラ　「今だっ、アリサ!!」

まじかる☆アリサ　「ええっ！」

キッと決意の顔になると、トゥインクル・スターを光と共に出現させるアリサ。

怪物　「オメーン……！」

突っ込んでくる怪物に狙いを定め、弓を引き絞るアリサ。

まじかる☆アリサ　「はあああああっ！」

愛の力が矢の先に集中して――。

まじかる☆アリサ　「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ　「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター!!」

愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

虹色の矢は怪物の体を貫いて、ハート型の光で包み込む。

怪物　「ゴメーン!!」

断末魔と共に浄化される怪物。

まじかる☆ラウラ　「やったな！　アリサ！」

まじかる☆アリサ　「ええ……！　ラウラ！」

グッと拳を突き合わせる二人。

体育館が元に戻っていき――。

□　同・アリサたちの教室

教室に戻るラウラとアリサ。

マキアス　「ぬうう！　またも美少女が出たというのか！　なぜ僕は

避難したのだ！」

エリオット「ほんとほんと。僕も残ってたら、僕のあの手この手であいつを苦しめてやったのに」

サラッというエリオット。

アリサ「(ラウラに) どうやら、みんな気付いてないようね」

ラウラは、モナ君をモフモフしつつ、

ラウラ「魔法少女も、悪くないものだな……。これからもよろしく頼むぞ！」

モナ「か、勘弁してモナ～……」

モフモフされすぎて、激やせのモナくん。

アリサ「(苦笑して) あ、あはは……」

席に着くと、またもリィンはいない。

アリサ「そういえば、リィンは……」

心配そうに席を見た。

クロウ「……」

クロウもリィンの席を見ていて。

□魔界・全景――

黒雲に覆われた荒れ地を稲妻が照らし。
地平線に巨大な魔王の城が聳えている。

□同・玉座の間

玉座に跪く緑の服の剣士の姿。
シルエットで見える魔王に向かって、

声「かしこまりました、魔王様……」

顔を上げたのは――緑のマントを纏った貴族の青年。

ユーシス「この魔界貴族ユーシス――。名門アルバレア家の名にかけて、ご子息に助太刀して参ります」

魔界貴族ユーシスがかっこよくマントを翻して立ち上がり、人間界に向かったところで――。

〈つづく〉





●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品「魔法少女まじかる☆アリサ」を原案にしたオリジナル作品の第3話Aパート！　アリサ、ラウラと立て続けに魔法少女となった中、早くも三人目の魔法少女探しがスタート！　一方、魔界側にも暗躍する影が現れて……!?

第3話「三人目を探せ！」

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）

ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）

モナくん

○

エマ・ミルスティン

マキアス・レーグニッツ

エリオット・クレイグ

ガイウス・ウォーゼル

エリゼ・シュバルツァー

クロウ・アームブラスト

トワ・ハーシェル

ヴィヴィ

リンデ

ベッキー

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）

ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）

○

その他

□アリサの屋敷・全景（朝）

風に揺れる庭の木々の中に、白亜の豪邸が建っている。

モナの声「というわけで……！」

□同・アリサの部屋

私服姿のアリサとラウラの前で、熱弁するモナくん。

モナ「第一回！　『三人目の魔法少女を探せ』会議モナ〜〜っ！」

なぜかホワイトボードまで用意されていて、
『三人目』『魔法少女』などとペンで書かれている。

アリサ「（欠伸しつつ）ふあぁ。折角のお休みだってのに……ゆっくりしちゃだめなの」

モナ「何言ってるモナ！　事態は一刻を争うモナ！」

そんなモナくんに、ラウラが近寄り、

ラウラ「うん。動く姿も可愛いな……。また、モフモフしたくなってくるぞ……」

うっとりとした目で、モナくんに手を伸ばす。

モナ「そ、そのヨダレは何モナっ⁉」

慌てて後ずさるモナくん。

ラウラ「おっと、これは失礼した」

ヨダレを拭い、キリッとした顔に戻るラウラ。
モナくん、ホッと気を取り直して、

モナ「いいモナ！　あの魔界皇子には、手下がいるに違いないモナ！」

アリサ「手下って⁉」

ラウラ「援軍が来るということか？」

モナ「そうモナ！」

×　×　×

イメージで――
魔王城の下に勢揃いするおどろおどろしい魔王の軍団のシルエット。
ミリアムっぽい子もいたりする。

モナの声「魔界には魔王配下の魔王軍がいるモナ！　きっと今頃、怖い手下が派遣されてるに違いないモナ！」

× × ×

アリサ「そういうものなの……」

モナ「とにかく、二人のままでは不利モナ！」

　ARCUSを取り出して、

モナ「残り一つのARCUSの適合者を、すぐに探さないといけないモナ！」

ラウラ「承知した。して、どうすればいい？」

モナ「手がかりがない以上、人が多い場所に行くしかないモナ！」

アリサ「人が多い場所と言えば……。あそこしかないわ！」

　何かを思いつくアリサ。

□ オープニング

□ 山手線っぽい線路のガード下

　ガタンガタンと轟音を立てて電車が走り過ぎていく。

　そんな中――ガード下の暗闇から、

「ヒヒィイイン！」

　と、馬のいななきが聞こえてくる。なんと、暗闇の中から足音を響かせながら、見事な白馬が駆け出してきたのだ。

　その白馬の手綱を握っていたのは――。

ユーシス「ここが人間界か……」

　マントを風にたなびかせ、魔界貴族の衣装を着たユーシスであった。

　人々が行き交う通りを見やるユーシス。

　小さい子供が指さして、

子供「わー！　おうまさーん！」

母親「シッ！」

　慌てて子供の手を引き、見ないふりをして去って行く母親。

ユーシス「フン。騒々しいところだな……」

　気にも止めずに手綱を引くと、

ユーシス「行くぞ、シュトラール。我らが皇子のもとへ！」

いななきと共に駆けていくシュトラール。

□ サブタイトル

□ 原宿の竹下通りっぽい繁華街

アリサ「これよこれ！　レイトン商店の新作チョコバナナクレープ！
一度食べてみたかったの！」

　サクッとクレープを食べるアリサ。

ラウラ「ほう。バナナの上にクリームとチョコがふんだんに載せられ、
飾りにチョコビーンズをちりばめた逸品……。それでいてくどく
なく、適度な甘み……」

　などと言いつつ、クレープを食べながら
　若者で溢れた繁華街を歩いて行くアリサとラウラ。
　(ラウラは竹刀も携帯している)
　モナくん、アリサの鞄に入ったまま不満そうに、

モナ「三人目の魔法少女さがしは、どうなったモナ……」

ラウラ「そなたの分もあるぞ。どうだ？」

　と、ラウラがクレープを差し出す。

モナ「モナはモナ国王モナ！　そんな軽薄なお菓子なんていらない
モナ！」

　ぷいっとそっぽを向く。

アリサ「またモナモナうるさい……」

ラウラ「む、そうか！　そういうことなら！」

　ダッと駆けていくラウラ。

モナ「モナ？」

　ラウラ、マッハで買い物して戻り、差し出したのは、

ラウラ「これならどうだ！　モナカだっ！」

モナ「モナカ……モナ!?」

　モナカに衝撃を受けるモナくん。

モナ「モ、モナの名前を取ったお菓子があるとは……人間界、侮れない
モナ！」

　と言いつつ、モナカをサクッと囓ると、

モナ「外はサクサク！　中は甘々！　最高モナ～～っ！」

うっとりした顔になる。

ラウラ「ふふ。よかったな」

アリサ「ええ。素敵な休日よね」

と和んでいると、

モナ「って、そうじゃないモナーっ！」

真顔に戻ったモナくん、もしゃもしゃと食べながら、

モナ「早くARCUSの適合者を探すモナ！」

アリサ「ちょっと！　声が大きい！　分かってるから！」

アリサ、慌ててモナくんを鞄に押し込み、

アリサ「……適合者って、誰でもいいってわけじゃないの？」

ラウラ「そうだな。私も、何の問題もなく変身出来た気がするのだが……」

そう言い、首を傾げる二人に、モナくんが鞄から顔を出して、

モナ「そんなことはないモナ！　二人とも強い思いを持っていたから、変身が出来たモナ！」

アリサ「強い思い……？」

×　×　×

回想で——#1で。マクモナルドや仲間を守りたいと願ったアリサ。

#2で。モナくんをモフモフしたいと強く願ったラウラ。

×　×　×

ラウラ「言われてみれば……」

アリサ「確かにそうだったわね」

モナ「強い思いを持つ人に、ARCUSは反応するモナ！」

アリサとラウラ、辺りをキョロキョロ見渡して、

ラウラ「だが、強い思いを持つ人など、どうすれば分かるのだ？」

アリサ「いい匂いがしたりして、ちゃっちゃと見つからないの？」

モナ「そんな、アニメみたいに簡単にいくわけないモナ！　現実は厳しいモナ！」

と、突如、ビクッと何かの気配を感じるモナくん。

モナ「モナ!?　この感じ……強い気配モナ!?」



アリサ　「えっ!?」

ラウラ　「む？　魔界皇子か？」

　慌てて振り返るアリサとラウラ。

　だが——

「きゃああ！」

「すてきー！」

　などと、黄色い歓声と共に目つきの鋭い金髪の青年が歩いてきたのだ。

アリサ　「な、なにあれ……！」

　それは先程の衣装のユーシスで、目をハートにした少女達が取り巻いていた。

　その中には、アリサ達のクラスメート、ヴィヴィとリンデもいて、

ヴィヴィ　「あの～、それって何かのコスプレですか？　あっ、もしかしてオーディション出るとか？」

リンデ　「ちょ、ちょっと、ヴィヴィ」

　腰にはサーベル。長いマントを羽織った古風なユーシスの

出で立ちに、ドン引きするアリサたち。

アリサ「ヴィヴィとリンデまで……」

ラウラ「なんとも凄い衣装だな……」

だが、ユーシスは女子達に全く感心なく、

ユーシス「お前達になど用はない。どいてもらおうか」

そう言い、ヒュウッと口笛を吹く。

途端に、ヒヒーンといななきと共に、駆けてくるシュトラール。

アリサ「って！」

ラウラ「馬ーーーっ!?」

モナ「モナっ!?」

ビックリ仰天する一同。

一斉に引いていくヴィヴィら女子達。

ユーシス、シュトラールに乗馬すると、ゆっくりラウラ達の方に歩み寄ってくる。

ユーシス「おい、貴様達」

と、アリサとラウラを見下ろし、

アリサ「な、何……？」

ユーシス「道を開けろ」

ラウラ「む……」

竹刀に手をやるラウラだったが、

アリサ「ちょ、ちょっと、ラウラ！」

慌ててラウラを引っぱり、道を譲る。

ユーシス「それでいい。下々の者は、貴族に道を譲るのものだからな」

そう言うと、乗馬したまま過ぎ去っていくユーシス。

ラウラ、不満そうに見やって、

ラウラ「まったく、何なんだ、あの不遜な男は……。コスプレイヤーとやらか？」

アリサ「完全に不審者よ。関わり合いにならない方がよさそう……」

汗ジトで見送るアリサたち。

モナ「と、とにかく……！　強い思いを持つ人を探すモナ！」

□　点描で――街中を歩き回るアリサとラウラ

ベッキーの青果店前で、

ペッキー　「おキャベツ様が、今ならたった四分の一カットで250ミラや！
　どうや、買った買った！」

　と、勧めてくるペッキーに、汗ジトのアリサ。

アリサ　「いや、私達、一人暮らしじゃないし」

ラウラ　「た、高いな……」

モナ　「強い商売への執念を感じるモナ……！」

　と、翳してみるがARCUSは輝かない。

×　×　×

　橋から釣り糸を川に垂らしている青年——

——ガイウスが、

ガイウス　「思いか……。そうだな。君たちの思いに共鳴する風。それが行く
道を示してくれるだろう」

アリサ　「ガイウス、アドバイスは有難いんだけど……」

ラウラ　「まるで意味が分からんな」

モナ　「強い風への思いを感じるモナ……！」

ラウラ　「そもそも、男子だから……」

　と、翳してみるがARCUSは輝かない。

×　×　×

　そして、連れだって歩くエリオットとマキアスに遭遇する
アリサ達。

モナ　「モナ！　あの子には、前に強い怒りのオーラを……！」

アリサ　「だから、エリオットは男子だって男子！　みさかいないわねっ！」

モナ　「モナっ！」

　鞄に押し込まれるモナくん。

エリオット　「アリサ、ラウラ。どうしたの？」

ラウラ　「い、いや、何でもないのだ」

　アリサ、モナくんを隠しつつ、

アリサ　「あ、そうだわ。二人は、強い思いを持つ人が集まるような場所とか
……知らないかしら？」

エリオット　「強い思い……？」

マキアス　「ほほう。そういうことなら、この僕に任せて貰おうかっ！」

　キランとメガネを輝かせるマキアス。

□オープンスペースに作られたコンサートステージ

マキアス　「強い思いが集まる場所……！　それなら、アイドル志望者と、彼らを推すファンの熱狂が集うこのオーディション会場以上の場所はないっ！」

　ババン！　と、妙にシリアス顔で言うマキアス。

アリサ　「へ、へえ……」

ラウラ　「確かにここならよさそうだが……」

　軽く引きながら入口のゲート前に立っているアリサとラウラ。

アリサ　「どうしてこんな場所知ってるのよ？」

エリオット　「マキアスは実は、地下アイドルファン……」

　マキアス、慌ててエリオットの口を塞いで、

エリオット　「むごっ」

マキアス　「た、たまたまチケットが当たって　な！　僕とエリオット二人で見に来たんだ！　ははっ！」

　そう言い、ハチマキをギュッと締めて、

マキアス　「今日は男女混合のオーディションらしいぞ。なかなか楽しみだな！初めてだな、こんな所は！　ハハハハッ！」

　と、かなり乗り気でチケットを見せると、エリオットと共に入っていくマキアス。

アリサ　「結局、貴方が見たいだけじゃないのよ！」

　呆れているアリサ。

ラウラ　「どうするのだ？」

アリサ　「そうねえ……」

　と、二人が考え込んだ時——。

スカウトの声　「あ、キミっ！」

アリサとラウラ　「！」

　なんと、会場前の通りで、スカウトに呼び止められている少女を見つけた。

エマ　「あの、何でしょうか？」

　その少女はエマだったのだ。

スカウト「いいねー。キミ、飛び入りでいいからオーディションに出ない？」
アリサ、その様子を見て、
アリサ「エマ……」
と、声をかけようとするが――。
エマ「オーディション……ですか……？」
と、思い詰めた様子で考え込んでいて、
アリサ「……？」
思わず立ち止まり、オーディションの看板の陰に隠れるアリサ。
スカウト「人数が集まらなくてさ！　何人か素人さんにも声をかけてるんだよ！　お願いだからっ！」
エマ「そ、そういうことでしたら……」
エマはスカウトの誘いに頷くと、関係者入口に入っていってしまう。
アリサ「行っちゃった……」
ラウラ「おーでぃしょん？　とやらを、まさかエマが受けるのだろうか？」
アリサ「いつも物静かだし、そんなのに出るような子じゃないと思ってたけど……」
ラウラ「何やら事情がありそうだな」
モナ「強い思いを感じるモナ……」
と、モナくんがARCUSを取り出す。
モナ「この中に行けば、きっと強い思いを持つ人に出会えるモナ。三人目はここにいるかもしれないモナ！」
ARCUSも僅かに反応して光っている。
ラウラ「だが、どうやって入る？」
アリサ「私達もオーディションに出るとか？」
途端に、ラウラが赤面して、
ラウラ「な！　いやいや、人前に出るなど恥ずかしくてできぬ！　絶対あり得ぬ！」
アリサ「でも、エマのことも気になるし……」
と、二人が話していると――。
トワの声「あ！　アリサちゃん！」
現れたのは、マクモナルド衣装のトワ。
アリサ「トワ会長!?」

ラウラ「ここに来たと言うことは、まさか、オーディションに？」

　驚くアリサとラウラだったが、

トワ「え⁉　ま、まさか～。今日はね、この会場に出店を出すことになったんだよ！」

　背後には、屋台用の飾り付けや、材料を積んだ台車が止まっている。

アリサ「一人で運んできたんですか？」

トワ「うん。ちょっと大変だったよ～。他のアルバイトが休んじゃって、私だけでさ」

アリサ「……そっか」

　アリサ、何かを考えついて、

アリサ「そういうことでしたら、私達にお手伝いさせて下さい！」

トワ「え、いいけど。確か、あなたは水泳部の……」

ラウラ「ラウラ・S・アルゼイドです。い、いいのですか。……その可愛い衣装を……こんな私が……」

　興奮するラウラ。

トワ「うん。手伝ってくれるなら、大歓迎だよっ！」

　バイトの制服を差し出すトワ。

ラウラ「……おおっ！」

　思わずガッツポーズするラウラ。

アリサ「いや、そこまで喜ぶこと……？」

モナ「（ボソっと）モナ……」

□　同・会場内の客席

　アリサとラウラが、マクモナルドのバイト姿になって、客席内でポテトやハンバーガーを届けている。

アリサ「ハッピーモナセット一つですね。どうぞー」

　と、モナくん人形つきのバーガーセットを渡すアリサ。

ラウラ「ドリンクは大盛りでよかったのだな」

　などと働きつつ、控え室への通路を見やるアリサとラウラ。

アリサ「（小声で）そろそろかしら」

ラウラ「（小声で）ああ。控え室に届けるふりをして行こう」

　アリサ達、通路の方へ向かいながら、トレイに載ったモナ君に、



アリサ　「(小声で) 静かにね」

　　が、そのモナ君はピクリとも動かず——。

　　　　　× × ×

　　出張マクモナルド屋台の前。

トワ　「はーい！　いらっしゃいませーっ！　今なら『走る！　ハッピーモナくん』が、セットでついてお得ですよ〜！」

　　宣伝しているトワの横で、展示されているモナくん人形。
　　子供に引っぱられたり、潰されたりして、

モナ　「(M) ア、アリサ……！　そっちはモナじゃないモナ！　助けてモナー！」

　　涙目で心の叫びを上げる。
　　と、そこに——。

クロウ　「よ！」

リィン　「こんにちは、トワ会長」

　　と、現れたのはクロウとリィンだ、

トワ「あ！　リィンくんたち！」
エリゼ「私もいますわ」
　ペコリと挨拶するエリゼ。
トワ「エリゼちゃんも！　久しぶりだねっ」
クロウ「こんな所で一人で出店とは、トワもご苦労だなぁ」
　ポンポンとトワの頭を叩くクロウ。
トワ「違うよっ。アリサちゃんとラウラちゃんも手伝ってくれてるんだから」
リィン「へえ、アリサも……」
　と、エリゼはモナくんを見つけて、先程の子供以上に、グニュグニュと引っぱったり潰したり、いじり倒している。
エリゼ「リィン兄様。この子、柔らかくていい感じですね……」
リィン「だったらセットにするか？」
　と、クロウがすかさず間に入り、
クロウ「おっと待った。今日はここのチケットも、全部俺のおごりだって言ったろ。セット三つ頼むぜ」
トワ「ふ～ん。随分景気がいいんだ？」

クロウ「へヘッ。ちょっと臨時収入があってなぁ」
トワ「どうせ、ブレードで勝ったんでしょ？いけないんだからね」
　トワに突っ込まれたりしつつ。
クロウ「へえへえ」
　と言いつつ、セットを受け取るクロウ。
モナ「(トレイの上でM) モナ～～！」
　エリゼに掴まれ、涙目のモナくん。
エリオット「やあ、リィン！」
マキアス「き、奇遇だな！」
　席から声をかけるマキアスとエリオット。
　いつもの面々が揃い、ついに、オーディション開演のジングルが鳴る。

□同・控え室

　一人、控え室で何やら思い詰めた様子のエマ。
エマ「……」

だが、グッと決意の表情になる。

× × ×

通路を歩いていくアリサとラウラ。

アリサ「控え室はこっちかしら？」

ラウラ「いや……間違えた。この先はステージだな」

と、司会のスカウトの声がステージから聞こえてきて、

スカウトの声「では、参りましょう！ エントリーナンバー一番は……！」

□同・ステージ

『No.1』の札を胸に付けた男がババン！ とステージに立つ！

客席からザワザワと声が上がる。

× × ×

アリサとラウラ、不思議に思い、ステージ袖から覗いてみると――。

ラウラ「なっ……！ あ、あの男はっ！」

アリサ「ふ、ふ、不審者っ！」

ドン引きするアリサたち。

× × ×

なんとステージに立っていたのは、先程街で遭遇したユーシスであった。

ユーシス「……」

無言で客席を見やるユーシス。

リィン「……っ！」

その中にはリィンもいる。

ユーシスの姿に引いている観客達の中で、

クロウ「へえ、面白そうじゃねえか……」

と、意味深に呟くクロウで――。

〈中ＣＭ〉

第３話Ｂパートに続く



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第3話Bパート！　ユーシスが見せた意外なパフォーマンスとその忠誠心とは……？

第3話「二人目を探せ！」

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
モナくん

○

エマ・ミルスティン
マキアス・レーグニッツ
エリオット・クレイグ
エリゼ・シュバルツァー
クロウ・アームブラスト
トワ・ハーシェル
ヴィヴィ
リンデ
セリーヌ

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）
怪　物

○

その他

□オープンスペースのコンサートステージ

――の舞台袖から、アリサとラウラがステージを覗いている。

× × ×

その視線の先には、マントを羽織ったユーシスが登壇している。

× × ×

アリサ「なんなのよ、あの男……！」

ラウラ「あの奇抜な衣装。やはり、おーでぃしょんに出るためであったのか？」

× × ×

ユーシス「……」

無言で会場を見渡すユーシス。

ユーシス「（M）多くの人間が集まると聞き、来てはみたが……」

会場内にはマキアスやエリオットなど、大勢の姿が見える。

ユーシス「（M）皇子は見当たらぬか」

× × ×

客席で俯いているリィン。

そのためユーシスの視界には入らず。

リィン「……っ！」

ゾクッと体が震えて、右手を押さえる。

エリゼ「兄様？　どうかなさいましたの？」

リィン「い、いや……何でも……。ちょっとトイレに行ってくるよ……」

席を立つリィン。

その隣にいるクロウ、ユーシスを見て、

クロウ「なんだ、あいつ？　さっきからボーッとつっ立ってるぜ……」

×　×　×

ユーシス、きびすを返して、ステージから去ろうとしたとき
である。

司会　「で、では、まず一曲！　披露して頂きましょう！」

司会を睨むユーシス。

ユーシス　「一曲？　唄えというのか？」

司会　「え、ええ。出場して頂いた以上、最低でも何かパフォーマンスを……」

ユーシス　「パフォーマンスか……。フン。ならば、いいだろう！」

バッとマントを脱ぎ捨てるユーシス。

×　×　×

エリゼ　「まあ！」

クロウ　「！」

驚きの顔になる観客達一同。

モナ　「（小声）モナっ……！」

モナくんもエリゼの膝の上で驚く。

×　×　×

なんと、ユーシスは、首にチョーカー、黒いシャツ、
開いた襟元、黒い手袋、白いパンツという厨二な
バンドマン姿になって、ポーズを決めていたのだ！

ユーシス　「（M）少しは、この世界に馴染んでおくのもありか」

グッとマイクを構えると、

ユーシス　「いかせてもらうぞ！」

途端に流れ出したのは、ポップな曲調のイントロ。

×　×　×

客席のマキアスが、

マキアス　「こ、これはっ！　スピカの新曲、『恋のシューティングスター！』」

エリオット　「女性アイドルの曲だっけ？」

× × ×

司会「失礼、曲の変更を……！」

ユーシス「フ……構わんっ！　この通りに歌えばいいのだろう！」

　歌詞カードを手に、ノリノリで歌い始めるユーシス。

× × ×

アリサ「す、凄い……！　フリも完璧だし、音程もあってるわ！」

ラウラ「ポップなアイドル曲を、難なく歌ってみせるとは……！」

アリサ「ただの不審者と思ったけど、やるわね……」

　と、アリサ、ハッと気付いて、

アリサ「って、感心してる場合じゃないし！」

ラウラ「今のうちに、エマの所へ……！」

□同・楽屋

　鏡台の前でエマが考え込んでいる。

エマ「……」

　と、その背後に「ニャオン」という鳴き声と共に、黒猫がやってくる。

エマ「セリーヌ？」

　そう呼ばれた黒猫のセリーヌ、エマの膝の上に乗ってゴロゴロと喉を鳴らす。

エマ「心配して来てくれたの？」

　フフッと微笑むと、

エマ「私なら、大丈夫よ。姉さんの待つ世界に、少しでも、近づくために……」

　そう言い、決意の顔になり、

エマ「そのために、挑戦してみたいの」

× × ×

　アリサとラウラ、その声を、控え室の入口で聞いてしまい。

アリサ　「（小声）挑戦……？」

ラウラ　「（小声）いったい……」

と、アリサが手に持っていたトレイが傾いて、床に落ちるハッピーモナくん。

アリサ　「あ！」

カタカタと腕を振りながら走って行く。

×　×　×

セリーヌ　「フギャアアア！」

カタカタ走ってきたハッピーモナくん人形に気付いて、襲いかかるセリーヌ！

エマ　「え……!?」

セリーヌに引っかかれて、モナくん人形は哀れボロボロに。

そこに、アリサとラウラが出てきて、

アリサ　「モナくんじゃなかったんだ」

ラウラ　「おもちゃだったとは……」

エマ　「アリサさん、ラウラさん……！」

アリサとラウラ、慌てて、

アリサ　「あ！　ごめんなさいっ！」

ラウラ　「盗み聞きする気はなかったのだ！」

エマ　「二人とも、どうしてここに？」

セリーヌを撫でながら言うエマに、

アリサ　「あの、実は、エマがスカウトされてるところを見ちゃって……」

ラウラ　「このような場に、委員長のお主が出るなど、その、気になってな……」

ためらう二人に、エマ、微笑んで、

エマ　「……そうですよね。私には、似合わないかもしれません。でも……。私自身のために……やってみようと思ったんです」

アリサ　「自分のために？」

エマ、頷くと、小さなマイクを見せる。
それはおもちゃの宝石がついた、キラキラと輝く物だ。

エマ　「私には、幼馴染みの姉さんがいました」

□ エマの回想――

幼いエマと一緒に唄う綺麗な女性の姿。
（※実はヴィータ・クロチルダだが顔は見せず）
エマはおもちゃのマイクを持っている。

エマの声「とても綺麗な声で、幼い頃の私に歌を教えてくれた、憧れの人でした」

――幼いエマに手を振り去って行く女性。

エマの声「ですが、姉さんはその才能を見いだされて、海外へ行き――」

――その女性が、海外のミュージカルステージできらびやかに唄う姿。

――そして、拍手喝采を受ける姿。

エマの声「ミュージカルの大スターとして活躍するようになり、今の私では、会うこともできなくなったんです」

――現在のエマが、自室で発声の練習や、鏡の前でダンスのステップを踏む姿。

エマの声「それから私は、内緒で、発声やダンスの練習をしてきました。いつかステージで、私も活躍できるようになれば……」

□ 回想戻って――

聞き入っているアリサとラウラ。

エマ「胸を張って、姉さんに同じ舞台で会えるかもしれない。だから、このオーディションに、チャレンジしてみようと思ったんです」

アリサ「そういうことだったの……」

ラウラ「頑張っていたのだな」

エマ「恥ずかしくて、ずっと誰にも話していなかったのですが……」

顔を赤らめ、俯くエマ。

ラウラ「うん。ならば、存分にやるがいい！」

アリサ「夢があるって、素敵なことよね！　私達も応援するわ！」

笑顔で応援するアリサとラウラ。

エマ「アリサさん、ラウラさん……！」

二人の言葉に驚くエマ。

□ 同・ステージ上

ユーシス　「……フッ」

ユーシスがクルリとステップを踏んで、華麗に一回転。

アウトロが終わって、決めポーズをすると同時に――。

「きゃあああ！」

「素敵ーーっ！」

などと、会場の女子から黄色い声援が送られる。

ヴィヴィとリンデも客の中にいて、

ヴィヴィ　「ちょっと動きがキモかったけど、やるじゃない」

リンデ　「私には無理かも……」

マキアスも悔しがりながら、

マキアス　「なぜだ！　なぜか分からんが……奴には猛烈な敗北感を感じるぞ……！」

エリオット　「前世の因縁とか？」

司会がマイクを手に、

司会　「見事なパフォーマンスでした！　では、最後にお名前と出身地を！」

その言葉に、ピクッと反応するユーシス。

ユーシス　「なに？」

司会　「ですから、お名前を……」

ユーシス　「（遮り）生憎だが。人間どもに名乗る名など、持ちあわせてはいない」

客席がざわつく中で、

ユーシス　「我が主に出会えるかと期待したが……。こんなくだらない茶番に付き合わされるとはな。失礼させてもらおう」

と、去ろうとするユーシス。

マキアス　「ちょっと待ったーーっ‼」

客席で大声と共に立ち上がるマキアス。

マキアス　「僕は断じて許さないぞ！　そんな人を見下した態度でアイドルだなんて、絶対にありえないっ‼」

熱く語るマキアス。

ユーシス　「フン、庶民が」

バッサリ切って捨てるユーシス。

マキアス　「な、なんだとっ！」

ユーシス　「貴様らになど用はない。俺は探しているのだ……我が主。魔界皇子を！」

体から魔界のオーラを発するユーシス。

　その気配に、

モナ「モナっ⁉」

　と、反応するモナくん。

□同・トイレ

リィン「ぐううううっ⁉」

　黒いオーラが体から浮かび、右手の激痛に襲われるリィン。

リィン「やめてくれ……！　この痛みは……この痛みは、何なんだあああっ！」

　ドンッとオーラがリィンの体からほとばしる。

□ステージ前

　客席のマキアスと睨み合っていたユーシスが、

ユーシス「……む！」

　ハッとその気配に気付き、

ユーシス「(M) これは……もしや！」

マキアス「どうした！　この僕に、怖じ気づいたかっ！」

エリオット「落ち着きなよ、マキアス。オーディションの進行妨害だよ」

　ユーシスがマキアスを無視して、舞台袖の方へ歩き出した時である。

　ドゴオオオン！

　と、舞台袖で爆発が起こり――。

ユーシス「ぬうっ……！」

　吹っ飛ばされた瓦礫に襲われるユーシス。

マキアス「うわっ⁉」

トワ「なになにっ⁉」

　驚く観客達と、売り子のトワ。

エリゼ「きゃっ⁉」

クロウ「おっと……！」

　咄嗟にエリゼを庇うクロウ。

　その隙に、モナくん、ピョンとエリゼの膝からジャンプして逃げ出す。

×　×　×

楽屋にも——
その爆発音は響いていて、

アリサ　「なに!?」
ラウラ　「爆発……!?」
エマ　「……セリーヌ！」
脅えるセリーヌを抱くエマ。

×　×　×

ステージ上。
爆煙の中から——。

声　「うずく……。我が右手がうずく……！」
ハッとなる客席の人々。

マキアス　「こ、この声は……！」
エリオット　「いやな予感しかしない……」

パッと煙を払って姿を現したのは、

魔界皇子　「人間共よ！　この右手の疼きを癒やすため、皇子の印を差し出すがよいっ！」
舞台上で決めポーズを取る魔界皇子！

エリゼ　「へ、へ、変態ですわっ！」
またもドン引きするエリゼ。

司会者　「君、進行の邪魔だから……！」
止める司会者から、皇子、マイクを奪い、

魔界皇子　「ふはははは！　ちょうどよい物があるではないか。行け！　我が力を、人間共に知らしめるのだっ！」
マイクが黒いオーラに包まれて、巨大な怪物となった。

怪物　「オンエアーーッ！」
叫ぶ怪物。
「きゃあああ！」
と、たちまち悲鳴に包まれるオーディション会場。
ユーシス、瓦礫の中から立ち上がり、

ユーシス　「おおっ……！」

ユーシス「皇子っ！」
　皇子の姿を見て感激し、
　と、駆け出そうとした時である。
魔界皇子「俺に、近よるなぁあっ!!」
　オーラを右手から放つ魔界皇子。
ユーシス「なにっ!?」
　喰らって吹っ飛ばされる。
マキアス「何なんだ、あいつらは!?」
エリオット「仲間割れ的な？」
　と、怪物が客席の方を向き、
怪物「オンエアアアッ！」
　音波を放つ！
マキアス「うわああっ！」
　眼鏡にヒビが入るマキアス。
エリゼ「(耳を塞ぎ) きゃああっ！」
クロウ「くっ！　逃げるぞ！」
　エリゼや、クロウ、マキアス、エリオットら、一斉に
　客席から逃げ出す
モナ「たっ、大変モナ……！」
　と、逃げ惑う客席の中を、慌てて楽屋に
　走って行くモナくん。
　それをトワがバッチリ目撃して、
トワ「ええっ!?　モナくんが……！　ほんとに走ってるーーっ!?」

×　×　×

　ステージ上では――
　立ち上がったユーシスが、皇子に、
ユーシス「俺を、憶えていないのか!?」
魔界皇子「誰だ？　お前はあああっ！」
ユーシス「なっ……！」
　皇子の叫びに呼応して、
怪物「オンエアアアアア！」
　会場を音波で破壊し始める怪物。

ユーシス「ぐわっ！」
　ユーシスも音波を食らい、ダメージを受ける。
魔界皇子「ゆけえぇ！」
怪物「オンエアアアア！」
　怪物は壁を破壊し、外へと向かっていく。
ユーシス「くっ……待て……。リィン……」

□同・関係者入口

アリサ「こっちよ！」
ラウラ「とにかく避難だ！」
　出てきたアリサ、ラウラ、エマ。
　そこに──
モナ「アリサ、ラウラ！　変身モナ!!」
　と、駆けてくるモナくん！
アリサ「あ……！」
ラウラ「む……！」

エマ「え!?」
モナ「モナッ!?」
セリーヌ「キシャアアアア！」
　エマに抱かれていたセリーヌが、モナくんに襲いかかって引っかき回す。
モナ「モナ、モナ、モナアアア!?」
　エマ、その様子に驚いて、
エマ「あ、あのっ!?　そ、その子、しゃべってますよね!?」
モナ「ひいいっ！　助けてモナアア！」
エマ「ああっ！　セリーヌ！　やめなさい！」
　セリーヌ、モナを引っかき回していたが、
　エマの声で動きを止めた。
　と、その横で、
怪物「オンエアアアア！」
　壁を突き破って出てきた怪物。
エマ「えっ……！」
　アリサとラウラ、覚悟を決めて、怪物の前に進み出ると、

アリサ　「今は事情を話してる暇はないわ！」

ラウラ　「御免っ！」

素早くアークスを掲げるアリサとラウラ。

――変身ＢＡＮＫ。

二人、ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

目を閉じ、宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。

まじかる☆アリサ　「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。

まじかる☆ラウラ　「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」

アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

ラウラが青色の服を着た、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！

まじかる☆アリサ　「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」

まじかる☆ラウラ　「魔法少女！　まじかる☆ラウラ!!」

二人、スタッと着地し、かっこよく決めポーズした。

エマ　「……！　お二人が、魔法少女……!?」

まじかる☆アリサ　「大事なオーディションを台無しにするなんて……！」

まじかる☆ラウラ　「我が友が、夢のために一歩を踏み出そうとしていたのだぞ……！」

エマ　「……！」

ハッとなるエマ。

魔界皇子　「ククク。この俺には関係ないことだ！　行くぞ！
魔法少女よっ……！」

アリサとラウラにオーラの攻撃を放つ！

まじかる☆ラウラ　「効かぬっ！」

大剣ではじき飛ばすラウラ。

弾かれたオーラが怪物を直撃。

怪物　「オンエアアア!?」

×　×　×

怪物がぶつかって壁が崩れ落ちて――。

避難していたトワに、瓦礫が迫る。

トワ　「……ああっ！」

　思わず目をつぶるトワだったが、ガシッと何者かの手が瓦礫を受け止めた。

トワ　「え……⁉」

　思わず目を開くと、その前にいたのは謎の仮面の戦士《C》。

《C》　「……」

　《C》、無言で瓦礫を投げると、バッと建物の屋根に飛び上がっていく。

トワ　「だ、誰っ……⁉」

×　×　×

まじかる☆ラウラ　「アルゼイドが秘剣、篤と見よ！　奥義・洸刃乱舞！　はあああっ！」

　猛烈な剣撃で皇子を吹っ飛ばすラウラ。

魔界皇子　「くううっ！　相変わらずの、フィジカル少女めがっ……！」

　ダメージを受けるが、何とか立ち上がる。

まじかる☆アリサ　「こっちは二人なのよ！　舐めないでくれるかしら！」

　そう言うと、トゥインクル・スターを光と共に出現させるアリサ。

まじかる☆アリサ　「今度こそ、仕留めてみせるわ！」

魔界皇子　「させるかっ！」

　オーラを放つ皇子。

　だが、皇子に狙いを定め、弓を引き絞るアリサ。

まじかる☆アリサ　「はあああああっ！」

　愛の力が矢の先に集中して――。

まじかる☆アリサ　「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

　グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ　「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター‼」

　愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

　虹色の矢はオーラをはねのけ、皇子に向けて突き進む。

魔界皇子　「くううっ⁉」

　万事休すかと思われた時である！

ユーシス　「シュトラーール！」

　叫び声と共に、白馬に跨がってユーシスが駆けてくる！



ユーシス　「はああああっ！」

馬上から飛び降り、アリサの虹色の矢の前に立ちはだかる
ユーシス。

ユーシス　「（両手を広げ）っ!!」

次の瞬間、爆発に包まれる周囲。

まじかる☆アリサ　「ええっ!?」

まじかる☆ラウラ　「技を、受けただと……!?」

煙が晴れると、上半身のシャツが破れたユーシスが、
片膝を突きながらも、皇子を守っていた。

魔界皇子　「お、お前……っ!?」

戸惑う魔界皇子に、

ユーシス　「阿呆が……」

と、クールな表情で言い、

ユーシス　「産まれた日より、貴様に誓ったこの俺の忠誠。忘れたとは
言わせんぞ……」

その頬の傷から僅かに血が滲む。

魔界皇子　「！　――」

まじかる☆アリサ「あの変質者……！」
まじかる☆ラウラ「魔界皇子の部下だったのか⁉」
　ユーシス、立ち上がり、剣を構えると、
ユーシス「部下だと？　違うな……」
　ザッと踏み込み、アリサとラウラに剣撃を加えるユーシス。
　アリサに一撃を食らわせ、
まじかる☆アリサ「きゃああっ！」
　吹っ飛ばされるアリサ。
まじかる☆ラウラ「ぬうううっ！」
　振り下ろされたラウラの大剣を、ユーシス、剣で払い、
　蹴りを放って吹っ飛ばす。
まじかる☆ラウラ「うぐっ……！」
ユーシス「俺は魔界皇子の剣となり、盾となる男……。
　魔界貴族ユーシス・アルバレア！」
　剣を構えてかっこよく言う。
まじかる☆アリサ「魔界……！」
まじかる☆ラウラ「貴族……！」

　その姿を見て、頭を抱える皇子。
魔界皇子「ぐううっ……⁉」

×　×　×

　フラッシュバック――幼い頃の皇子に、幼いユーシスが
　跪く姿が一瞬蘇る。

×　×　×

魔界皇子「何なんだ……これ……は」
　その場に倒れ伏す皇子。
　ユーシス、シュトラールに跨がり、
ユーシス「はあああっ！」
　馬上からの剣術を、アリサとラウラに繰り出す。
まじかる☆ラウラ「おのれ！　馬上からとは、卑怯な！」
まじかる☆アリサ「間合いが……遠い！」

ユーシス　二人、ユーシスの剣撃を受け、忽ち壁に追い詰められてしまう。

「魔法少女など、この程度か」

剣を突き付けるユーシス。

まじかる☆アリサとラウラ「……！」

その時である――。

エマ「やめて下さい！」

エマが駆けてきて、

まじかる☆アリサ「エマ……！」

アリサとラウラを守り、立ちはだかった。

まじかる☆ラウラ「やめるのだ、エマ！」

ユーシス「どけ」

エマ「いいえ！　二人は、私の夢を、応援してくれたんです……！」

モナ「モナ……！」

ARCUSが輝き出す。

エマ「そんな二人のために、今度は私が力になりたいんです！」

その思いにARCUSが反応し――カッと輝いて、

エマのポケットに入っていた、おもちゃの小型マイクと合体！

ユーシス「（目を覆い）ぬうう⁉」

エマ「え……！」

――変身BANK。

エマ、ARCUSの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

目を閉じ、杖に変化したマイクを手にして、神々しい光に包まれるエマ。

まじかる☆エマ「みんなに届いて！　歌と光と魔法の戦士！」

エマがワインレッドの服を着た、魔法少女まじかる☆エマに変身！

まじかる☆エマ「魔法少女まじかる☆エマ！」

顔を上げたエマ、眼鏡が消え、髪が解けて、優しく微笑む。

ユーシス「さ、三人目だと⁉」

エマ、スッと息を吸うと、

まじかる☆エマ「（歌声）はぁぁぁぁっ」

その声によって震動が起こり、

ユーシス「ぬうっ！」



押し返されるユーシス。

まじかる☆アリサ「エマ……！」

まじかる☆ラウラ「そなたも魔法少女に……！」

立ち上がる二人。

まじかる☆エマ「二人とも……！　今です！」

アリサとラウラ、頷くと、

まじかる☆アリサ「たあああっ！」

アリサのジャンプキックが、ユーシスに直撃。

ユーシス「ぬうっ⁉」

まじかる☆ラウラ「喰らええええい！」

大剣を振り抜いて、

ユーシス「くっ！」

何とか腕で受け止める。

その隙に、エマは怪物に向かっていき、

まじかる☆エマ「やああああっ！」

踊るように舞いながら、怪物の音波をかわし、杖を振ると——。

怪物　「オンエエエ……」

　魔法の攻撃が怪物に直撃する。

　弱った怪物の前で、杖を構えるエマ。

まじかる☆エマ　「そびえ立て、巨いなる塔!」

　怪物を取り囲むように現れる四本の塔。

まじかる☆エマ　「ロードアルベリオン!」

　その中心部から魔法の光が飛び出して、怪物を包み込むと。

怪物　「オンエアアアア!」

まじかる☆エマ　「静かに眠って下さい」

　そう言い、目を閉じるエマの背後で浄化される怪物。

まじかる☆アリサ　「やったわ!」

まじかる☆ラウラ　「ああ!」

　と、そこに馬のいななきが響き、

三人　「!」

ユーシスの声　「この場は預けた!」

　見ると、シュトラールに跨がったユーシスが、気絶した皇子を背に乗せていた。

ユーシス　「魔法少女よ……!　魔界貴族の名において、必ずや倒してくれる!」

　そう言い残して去って行くのだった。

× × ×

　その様子をビルの屋上から伺っている黒い影――《C》の姿があって。

□ 戦い終わって――

　元に戻ったステージ前。

ラウラ　「結局、オーディションは中止か」

アリサ　「仕方ないわね……」

エマ　「いえ、お二人のお陰で、勇気がわいてきました。また今度、チャレンジしてみることにします!」

　笑顔のエマに、

モナ　「モナ!　そんなことより、魔法少女の説明モナ!　そもそも、

「魔法少女ということは、誰にも知られてはいけないモナ！
ばれたら……」

セリーヌに懐かれているモナくんが、説明しようとした時――。

トワ　「ねぇねぇ、みんな！」

と、駆け込んでくるトワ。

トワ　「凄かったよね！　また魔法少女が街を救って……！」

アリサとラウラ　「え！」

モナ　「モナっ⁉」

モナくんが喋っているところを思い切り目撃するトワ！

トワ　「……モナくんが……！　しゃしゃ、しゃべったーっ！」

アリサ　「えええええっ！　モ、モナになっちゃううううっ！」

顔面蒼白のアリサ達で――。

〈つづく〉

第4話『モナくんを追え！』

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン
モナくん
○
クロウ・アームブラスト
トワ・ハーシェル
ミリアム・オライオン
○
リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）
シュトラール

□ マクモナルド・全景

□ 同・店内

モナ 「モナ〜〜〜！ 生き返るモナ〜！」

ズズッとジュースをストローから吸ったモナくんが、
プハーと息を吐く。
その前で、トワがアリサ、ラウラ、エマから話を聞いていて、

トワ 「ふむふむ。アリサちゃんと、ラウラちゃんと、エマちゃんの三人が、魔法少女になったんだね！ 凄いねーっ！」

タブレットにメモっていくトワ。

エマ 「ええ、そうなんです！ 気付いたら、二人のように変身してまして……！」

アリサ、ラウラに耳打ちして、

アリサ 「ねえ、こんなにペラペラ喋って大丈夫なの……？」

ラウラ 「見られた以上、致し方あるまい……」

× × ×

回想——前話ラストより。
モナくんが喋っているところを思い切り目撃するトワ！

× × ×

トワ 「それで、モナくんは、モナの国の国王様なんだね？ どうしてこの世界に!?」

タブレットにどんどんメモるトワ。

モナ 「フフフ、秘密モナ。それ以上知りたいなら……。おかわりモナっ！」

ジュースの紙コップを差し出すモナ。

アリサ 「そんな場合じゃないでしょっ！」

全力でツッコミを入れるアリサ。

モナ 「ぶべらモナっ！」

吹っ飛んで窓に叩きつけられるモナくん。

モナ 「い、いきなり、何するモナ……！」

ヘロヘロで立ち上がるモナくんに、アリサが詰めよって、

アリサ「言ってたわよね。魔法少女が他の人にバレたら私達はモナになるって！　あの話はどうなったのよ!?」

モナ「も、モナっ！　そ、それはっ……！」

汗ジトで目を逸らすモナくんで。

□オープニング

□前シーンより

エマ「わ、私達がモナに!?　そ、そんなっ!?」

慌てて自分の手のひらを見るエマ。

ラウラ「そういえば、何も問題ないな……」

ラウラも自分の手を見る。

トワ「え!?　モナになるって、本当なの!?」

アリサ「魔法少女になってから、真っ先に忠告されたんですけど……」

ラウラ、モナに顔を近づけて、

ラウラ「むしろ、そなたの姿になるのは光栄なのだがな……。

ウフフフ……」

うっとりした表情になって、涎を垂らす。

×　×　×

イメージで――

モナ化したラウラが、モナエマ、モナアリサ、モナくんと輪になって、おしくらまんじゅうしたりする姿。

モナラウラ「アハハハ！　ウフフフフ！」

×　×　×

あっちの世界に行ったラウラを、アリサが呆れて見つつ、

アリサ「ああもう、また始まった……」

モナ、腕組みして真顔になり、

モナ「フフフ。よく思い出してみるモナ」

× × ×

回想——#2より。

変身する姿をラウラに目撃されるアリサ。

——#3より。

同じくエマに目撃されるアリサとラウラ。

モナの声「ラウラに変身を見られた時も、エマに見られた時も、実は何も起こっていなかったモナ！」

× × ×

アリサ「言われてみれば、確かに……」

モナ「つまり……アレは……」

アリサ「あれは……!?」

モナ「秘密を守るための方便！　嘘ということモナーーっ！」

アリサ「ええええーーーっ!?」

ズッコケるアリサたち。

トワ「あははは っ。よかったじゃない。モナにならなくて」

エマ「ええ、確かに……」

アリサ「ほんとにもう……」

アリサ、気を取り直してジュースを飲み、

アリサ「そういや、あいつ……魔界貴族って言ったかしら？」

ラウラ「ああ。あの謎の仮装男か」

アリサ「魔界皇子を助けに来たみたいだけど、いったい何者なのかしら……」

エマ「そもそも、魔界皇子さん……とは、何なのでしょうか？」

トワ「それなら、私もちょっとだけ調べてみたんだよ！」

笑顔でタブレットの画面を見せるトワ。

□ サブタイトル

□ 線路のガード下（夕方）

地図に幾つかのピンが挿されており、

アリサ　「これって……⁉」

トワ　「魔界皇子の出現場所だよ！」

タブレットを素早くタップして出現地点をピックアップするトワ。

アリサ　「マクモナルドに……」

ラウラ　「体育館……」

エマ　「それに、オーディション会場ですね」

その場所は、マクモに、体育館に、コンサート会場を示している。

トワ　「何か共通点がないかなって、ずっと考えてたんだけど……。ようやく分かったよ」

そう言い、アリサを見やるトワ。

アリサ　「え……？」

トワ　「アリサちゃんがいるところだよ！」

アリサ　「わ、私が⁉」

驚くアリサ。

トワ「うん。魔界皇子が言ってたよね、『皇子の印』とかっていうの。それを探してるんじゃないかな?」
アリサ「皇子の印……?」
エマ「何のことでしょうか?」
　途端に、モナくんが飛び上がって、
モナ「最初に説明したモナ！　アリサのペンダントの宝石が、皇子の印だモナ！」
　ピョンピョンとアリサの胸元を指さすモナくん。
アリサ「これが……!?」
　驚いて、ペンダントを取り出すアリサ。
　そこには赤い宝石が輝いている。
ラウラ「綺麗な色をしてるな」
エマ「ええ、吸い込まれるような赤……」
トワ「前に見せて貰ったとき、少し光ってたよね?」
アリサ「そういえば……」
モナ「不思議な力を感じるモナ……。モナも宝石の力に引かれて、この世界に逃げてきたモナ！」

エマ「モナさんは、なぜご自分の国から逃げてこられたんですか……?」
モナ「それはモナ……（真顔になり）語るも涙、聞くも涙の壮大なストーリーが……」
　そこに――。
クロウ「よっ！」
　と、笑顔で店に入ってくるクロウ。
モナ「！（固まり）」
クロウ「どうした、みんなお揃いで?」
アリサ「あ、い、いや、何でも……！」
トワ「注文ならどうぞー！」
　営業スマイルで立ち上がるトワ。
クロウ「おう、いつものでな」
トワ「まーた。そんなこと言って～」
　と、トワ、アリサを振り返り、
トワ「（小声）三人ともいつでも来てね。みんなのたまり場にしちゃっていいから」
アリサ「あ、はい！」

ラウラ　「かたじけない……」

　トワとクロウが離れると、モナ、プハッと息を吐いて、

モナ　「ふう〜っ。ぬいぐるみのふりも大変モナ〜〜！」

×　×　×

　マクモの外——

　モナくんが話している姿に被り、

声　「見ーつけた……！」

　ニヤリと笑い、電柱の上に立って店内を見つめている少女。

ミリアム　「フフ、今度こそ逃がさないよー」

　ピョコンと動くウサミミを装着したミリアムであった。

□ ガード下

　水たまりを踏むリィンの足。

リィン　「ハァハァハァ……！」

ユーシス　「……」

　ゆっくり歩み寄るユーシスから、必死に逃げていくリィン。

リィン　「何なんだ……何なんだ、いったい!?」

　と、ガード下から出ようとした時。

ユーシス　「シュトラール！」

　その声に応えて、

シュトラール　「ヒヒヒーン！」

　と、ガードの出口に立ちはだかる白馬のシュトラール。

リィン　「うわああっ！」

　シュトラールにぶつかり。転んでしまうリィン。

　その前に、スッと手が差し出される。

リィン　「……！」

ユーシス　「……」

　無言で手を伸ばし、リィンを見やるユーシス。

リィン　「お、お前は、誰なんだ……」

　頭を押さえたリィンはまだ記憶が戻っていない様子だ。

ユーシス　「……覚えていないのか？　この俺を……ユーシス・アルバレアを！」

リィン「う……ぐ……」

頭を押さえるリィン。

× × ×

その脳裏に——魔界皇子として戦った時の様子が次々にフラッシュバック。

× × ×

リィン「……こ、これはなんだ!? これが……俺なのかっ……!?」

ユーシス「ああ。お前こそが我が主、魔界皇子！」

差し出されたユーシスの手に、ゆっくりと右手を伸ばすリィン。

リィン「う、ぐ……」

手袋は破れて、手のひらが剥き出しになっており、そこで黒く光る宝石。

ユーシス「そうだ……。思い出せ。その両手に皇子の印を宿した者……。お前こそが……！」

そこまで言って、ハッとなるユーシス。

ユーシス「なに……!?」

慌ててリィンの左手を見やる。

そこには宝石は嵌まっておらず、

ユーシス「どういうことだ!? 印が半分しかない……これではお前は……」

左手を取るユーシスを、

リィン「やめてくれっ！」

と、振り払うリィン。

リィン「俺は、魔界皇子なんかじゃない……。俺は……リィン・シュバルツァーだ！」

叫んだ瞬間、ブワッとリィンから漆黒のオーラが立ち昇る。

ユーシス「っ……!?」

そのオーラに撥ね飛ばされ、壁に叩きつけられるユーシス。

ガードの外にあるカーブミラーに、オーラを発するリィンの姿が映る。

リィン　「（それを見て）う、うわあああっ！」
叫びながら、ガード下から逃げ出していくリィン。

ユーシス　「く……」
見送るしかないユーシス。

ユーシス　「俺は諦めぬぞ。お前が記憶を……。王子の印を取り戻すまで……！」
静かに決意して。

□ マクモナルド・店の前

——外の陽が傾いていて。

アリサ　「それじゃあ、失礼します！」

トワ　「（手を振り）うん。またねーっ！」
モナを抱えて出て来るアリサと、ラウラ、エマ。

ラウラ　「結局、あまり話が出来なかったな」

エマ　「ええ。クロウさんがそばにいましたからね」

モナ　「モナくんの壮大なストーリーは、またの機会に話すモナ！」

アリサ　「どうせ、大したことないんでしょ？モナになるって嘘ついてたし」

モナ　「モナ！　今度は嘘つかないモナ！」
などと話していた時である。
——ニュッと、モナくんの上から伸びてくるマジックハンド。

モナ　「モがっ……⁉」

アリサ　「えっ⁉」
モナくん、一瞬でマジックハンドに掴まれてしまい——。

ミリアム　「ふふっ。もーらいっ！」
なんと、電柱の上に立っていたミリアムに、捕らわれてしまった。

エマ　「あ……！」

アリサ　「ちょっと、何なの⁉」
ミリアム、マジックハンドを外して、モナをガシッと掴む。

モナ　「い、痛いモナ！　離すモナーっ！」

ラウラ　「こら！　返すのだ！　そのモナはモナでも特別なモナでな……！」

ミリアム　「知ってるよ、モナ国王だよね」
モナ、その言葉にハッとなり、

モナ　「モナーーっ！　お、お前はモナっ！！」

ミリアム　「ニシシッ！」

ニヤッと笑うミリアム。

ミリアム　「ボクは白ウサギ――。ミリアム・オライオン。モナ国王、キミを連れ戻しに来たよ！」

そう言うと、ジャンプし、商店街の屋根を伝って身軽に逃げていくミリアム。

アリサ　「ちょ、ちょっと！」

エマ　「待って下さい！」

慌ててミリアムを追っていくアリサ達。

×　×　×

クロウ　「……」

その様子を、マクモの店内で、トワと話していたクロウがチラッと見やって。



□商店街――

　ミリアムを追って、商店街を走るアリサたち。

アリサ「待ちなさーーいっ！」

ラウラ「独り占めはよくないぞ！」

エマ「ぬいぐるみなら、お店にありますから！　交換しましょう！」

アリサ「って！　そんなことじゃないと思うわよ！」

ラウラ「あの者、秘密を知ってるようだな！」

　ミリアム、追って来るアリサ達を振り返ると、

ミリアム「ニシシ、しつこいなぁ。出てきて、ガーちゃん！」

　瞬時に、空中に出現する謎のロボット――アガートラム。

ミリアム「行くよっ！　ガーちゃん！」

　アガートラム、機械のような声を発すると、ミリアムを抱えて空に飛び上がっていく。

モナ「助けてモナ～っ！」

ラウラ「ぬう！　空に逃げるとは、卑怯だぞ！」

アリサ「どうすればいいの⁉」

　エマ、はたとひらめいて、立ち止まり、

エマ「あ、あのう……」

アリサ「え？」

ラウラ「なんだ⁉」

　エマに注目するアリサたち。

エマ「私達、魔法少女ですし……。空などは飛べないのでしょうか？」

アリサ「そういえばっ！」

　ハッと気付くアリサたち。

アリサ「今まで、変身以外じゃ魔法らしいことは何ひとつやってないわ！」

ラウラ「うん。言われるまで気付かなかったな！」

エマ「きっと犬や猫とお喋りできたり、お花を育てたり、素敵な魔法が使えるのではないでしょうか！」

アリサ「そうよ！　ホウキとか出てこないのっ⁉」

×　×　×

モナ「そ、そうだったモナ！」

連れ去られながら、叫ぶモナくん。

モナ　「ARCUSに向かって、モナークモナーク！　と魔法の呪文を叫ぶモナーっ！」

ミリアム　「うるさいよ。黙っててー」

モナの口を塞ぐミリアム。

モナ　「モガガガっ！」

× × ×

アリサ、ラウラ、エマ、それを聞き、一斉にARCUSを取り出すと、

アリサ　「（汗ジト）まさかの、あいつの名前入り呪文……」

エマ　「少し恥ずかしいですが」

ラウラ　「望むところだ！」

アリサ　「せ、せーの！」

三人、ARCUSを掲げると、

三人　「モナークモナーク！」

瞬間、ARCUSが光り、パッと輝きを増した光の中から、ホウキが飛び出して来てた！

三人　「ホウキよ、出て来て！」

アリサ、ホウキを掴むと、

アリサ　「よし、追うわよっ！」

ホウキに跨がるアリサ、

ラウラ　「ああ！」

エマ　「はいっ！」

ラウラも跨がり、エマは横乗りで。

アリサを先頭に、空に飛び上がっていったところで――。

〈中CM〉

第4話Bパートに続く



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品「魔法少女まじかる☆アリサ」を原案にしたオリジナル作品の第4話Bパート！　愛しの（?）モナくんを奪われたラウラ。さらにはついにあのキャラも登場して!?

第4話「モナくんを追え！」

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）

ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）

エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）

モナくん

〇

マキアス・レーグニッツ

エリオット・クレイグ

フィー・クラウゼル

〈C〉

〇

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）

ユーシス・アルバレア（魔界貴族ユーシス）

シュトラール

ミリアム・オライオン

怪物

□ 町の上空――

アリサを先頭に、ホウキで空を飛んでいくラウラとエマ。

アリサ　「待ちなさいっ！」

ホウキに跨がっているアリサとラウラ。
その先を、アガートラムに乗ったミリアムが飛びながら
逃げていく。

ミリアム　「へへっ！　待てと言われて、待つわけないよーだっ！」

ラウラ　「我が心の友、モナくんを返すのだ！」

モナくん、ミリアムの手元で、いつの間にか鳥カゴに
捕らえられていて、

モナ　「モナーーっ！　モナは鳥じゃないモナ！　外に出すモナっ！」

スピードアップするアガートラム。

アリサ　「くっ……早いわっ！」

ラウラ　「逃がさんぞっ！」

エマは優雅にホウキに横乗りしつつ、

エマ　「あの……！　お二人とも！　そんなに声を出すと……！」

×　×　×

眼下には人通りの多い商店街。

×　×　×

その中を、マキアスとエリオットが歩いていて、

マキアス　「む？」

空を見上げるマキアス。
チラッと、飛び去るアリサ達の姿が見えてしまった。

×　×　×

アリサ　「ああっ！　み、見られちゃう！」

慌ててスカートを押さえるアリサ。
エマ、ハッと思いついて、

エマ　「こういう時こそ、魔法です！」

ARCUSを掲げるエマ。

エマ　「モナークモナーク！　雲よ、私たちを隠して下さい！」

途端に、ＡＲＣＵＳが光り輝く！

シュウウッとエマ、ラウラ、アリサたちを霧のように雲が包んで、その姿を隠していく。

× × ×

マキアス「あ、あれはっ……！」

地上のマキアス、ポカンと口を開けてその様子を見ていて、思わず指さした先を、エリオットが見る。

エリオット「え？」

そこには雲の塊しかない。

エリオット「雲がどうかしたの？」

マキアス「今！　あそこに、ホウキで空を飛ぶ少女たちがっ！」

大声を上げて必死に空を指さすマキアスに、通行人達がザワザワと騒ぐ。

エリオット、マキアスを哀れみの表情で見て、

エリオット「マキアス……。眼鏡、ヒビ入ったままだよね？　直した方がいいよ」

マキアス「だ、断じて違ーーうっ！」

× × ×

雲の中を飛んで行くアリサたち。

アリサ「この手があったわね！」

ラウラ「さすが委員長だな！」

先頭を行くアリサ。

アリサ「でも、これじゃ、あの子がどこに行ったかも……」

その瞬間——。

目の前に突然現れる大きな煙突。

アリサ「ひゃあっ！」

慌てて避けようとするアリサ。

アリサ「ぶ、ぶ、ぶつかるわーーっ！」

スピードを落とせずに、あわや衝突かと思われたとき！

エマ「モナークモナーク！　ホウキよ、止まって下さい！」

エマの魔法で、キキキーッと急ブレーキで止まるホウキ。

アリサ「きゃあああっ！」

だが、急ブレーキのために、アリサはホウキから投げ出されて落ちていく。

ラウラ「くっ……！」

パシッと、アリサの手を掴んで助け上げるラウラ。

アリサ「た、助かったわ！」

戻って来たホウキに再び跨がるアリサ。
雲が晴れると、それは銭湯の煙突だった。
アリサたち、辺りを見渡すと、アガートラムの姿は消えていて、

アリサ「あの子はどこに!?」

ラウラ「見失ったか……！」

×　×　×

ミリアム「ニッシシシ……」

ニヤリと笑って、その様子を見下ろしているミリアム。

ミリアム「こんなところに隠れてるなんて、気付かないよね」

ミリアム、煙突のてっぺんからピョコンと頭を出していて、
モナの鳥カゴを抱いていた。
アガートラムは空で姿を消している。

×　×　×

アリサ「こうなったら……！」

ＡＲＣＵＳを掲げて、

アリサ「モナークモナーク！　あの子の居場所を教えてっ！」

パッと輝くＡＲＣＵＳ。

×　×　×

すると——
地上の銭湯の釜がゴオオオと猛烈に燃えさかる。

×　×　×

ミリアム「ニシシ。このままやり過ごせば……ん？」

気付くと、モクモクと黒煙が煙突を昇ってきて。

モナ「モナッ！　モゴッ！　ガハッ！　く、苦しいモナ！　死ぬモナっ！」

黒煙に巻かれるモナとミリアム。

ミリアム「ちょ、ちょっと……何コレ！　ゴホッゴホッ！」

溜まらず、煙突から飛び出すミリアム。

エマ「いましたっ！」

アガートラムに乗ったミリアムを見つけるアリサたち。

ミリアム「ああもうっ！　せっかく逃げれると思ったのに！」

モナ「あ、危うくモナの燻製になるところだったモナ……」

ススまみれのミリアムに、アリサたち、素早く近寄っていき、

アリサ「今度こそ逃がさないわよ！」

ラウラ「返すのだ、私のモナくんを！」

と、相変わらずモナ愛溢れるラウラ。

モナ「モナっ!?　それは違うモナ！　モナはモナ国の王！　みんなのモナだモナ！」

アリサ「はいはい。モナモナうるさい……」

と言いつつ、三人、ミリアムを空中で取り囲む。

ミリアム、真っ黒のススを衣装から払って、

ミリアム「もう。ボクの衣装が台無しだよ……。折角もらったのにさ……」

キッとアリサ達を睨むと、

ミリアム「よくもやってくれたね！　オシオキだよ！　ガーちゃんっ！」

アガートラム、電子音で返事をすると、

ギュンッとアリサ達に突っ込んでいく。

アリサ「くっ！」

咄嗟に避けるアリサ。

エマ「！」

だが、背後に回り込まれるエマ。

アガートラムが腕を振り回すが、

エマ「きゃっ！」

何とか上昇してかわす。

ミリアム「ニシシ！　大したことないね！　魔法なんか使えたって、ガーちゃんの敵じゃないし！」

ラウラ「それはどうかな？」

　ラウラ、ニヤッと笑うと、ホウキの上に仁王立ちになって、

ミリアム「え⁉」

ラウラ「参るぞ！　はあああああっ！」

　なんと、背負った竹刀を抜き放ち、アガートラムに突進！

ラウラ「鉄砕刃っ！」

　ガキンっと強烈な一閃を喰らわせた！

　さすがに怯むアガートラム。

ミリアム「な、何それっ⁉」

ラウラ「アルゼイド流の極意。例え空の上であれ、水の中であれ、我が剣閃が衰えることはないっ！」

　見得を切ると、再びアガートラムに向かい、

ラウラ「たあああっ！」

　激しい剣撃を浴びせる。

アリサ「(汗ジト) 魔法少女が、ホウキに乗って剣で戦うって……。アリなの？」

エマ「私達も加勢しましょう！」

アリサ「え、ええっ！」

　アガートラムとミリアムに向かっていくアリサとエマ。

□ 近くの公園

　――のベンチで休んでいるリィン。

リィン「ハァハァ……。おかしい。この数日、俺の周りでいったい何が起こっているんだ……」

　頭を押さえて思い悩むリィン。

　そこに――。

ラウラの声「はあああっ！」

　ラウラたちの声が聞こえてくる。

リィン「む……⁉」

　驚き見上げると、空中で戦うアリサ達を発見した。

リィン「！　……な、なんだ⁉　ぐっ……。ま、またかっ……⁉」

　右手がブワッと黒光りを始める。

□上空では――

空中でもみ合う三人とアガートラム。

ミリアム「わ、わ！」

ラウラ「たあああっ！」

ガツンと攻撃を受けたアガートラム、たまらずフラフラと落下を始める。

ミリアム「お、落ちるよーっ！」

アリサ「あ！」

ホウキにアガートラムの腕がぶつかり、ボキッと折れてしまい。

アリサ「いやああああっ‼」

エマ「アリサさんっ！」

空中で別々に落下していくアリサと、アガートラム。

ミリアム「ひゃあああ！」

モナ「モナアアアア！」

□公園――

リィン「ぐううっ！　やめろ！　やめてくれっ！」

右手を押さえて苦しむリィンの頭上から、

アリサの声「きゃああああああっ！」

と、叫びながら、アリサが落下してきた！

リィン「なっ⁉」

咄嗟にアリサを受け止めようとするが、

アリサ「いやあああっ！」

その視界にアリサの胸がどアップで迫り――！

リィン「ぐはっ！」

またも顔面にアリサの胸を押しつけられて、気絶するリィン。

ラウラ「アリサ！　大丈夫かっ！」

空から降りてきたラウラとエマが駆け寄ると、

アリサ「あいたたた……」

リィンが下敷きになったおかげで、なんとか無傷のアリサ。

アリサ「だ、大丈夫みたいだけど……」

胸の下で気絶しているリィンに気付く。

アリサ　「きゃああああっ！」

慌てて飛び退くアリサ。

アリサ　「リ、リィン⁉　まさか、見られた……⁉」

エマがリィンを抱き起こすが、完全に意識を失っており、

エマ　「いえ。気絶しているようです。きっと大丈夫なはずです」

ラウラ　「うん、大きいからな。視界を遮るには十分だろう」

アリサ　「な、何がよ、何がっ！」

と、赤面して胸を隠すアリサ。

エマ　「ひとまず、安静にしておきましょう。モナークモナーク！
リィンさんをベンチまで！」

と、リィンが魔法で宙に浮かんで、離れたベンチに寝かされる。

そこに——

ミリアム　「見つけたよっ！」

やや傷ついたアガートラムが、ドゴンとパンチを
繰り出してきた。

アリサたち　「！」

咄嗟に飛び退くアリサ達。

ラウラ　「ぬううっ！　性懲りもなく！　いい加減モナくんを返すのだ！」

ミリアム、べーっと舌を出して、

ミリアム　「返さないよーだ。モナ王国をセイフクするには、国王を
捕らえなきゃだめだって、魔王様に言われたんだから！」

アリサ　「魔王⁉」

その言葉に驚くアリサ達。

×　×　×

離れたベンチで、横たわるリィン。

その体が黒いオーラに覆われていき。

カッと目が見開かれる。

×　×　×

ミリアム　「ボクは魔王様の直属の部下ってヤツだよ。その伝説の
魔法アイテム、ARCUSだっけ？」

アリサ達のARCUSを指さし、

ミリアム　「そいつを奪うために、魔王様の命令でモナ王国に攻め込んだんだよね。でも、国王のてぃんくる☆モナくんに逃げられて。この世界まで追って来たってわけ」

アリサ　「な、何よそれ！」

エマ　「国を征服だなんて、酷いです！」

ラウラ　「そうだ！　てぃんくる☆モナくんという本名を、なぜ教えてくれなかった！」

モナ　「モナっ！　国王は、本名を晒さないものモナっ！」

アリサ　「そこじゃないでしょっ！」

　ツッコミ入れるアリサに、

ミリアム　「そういうわけだから！　キミたちのARCUSも、一緒に貰っちゃうよ！」

　ミリアムの指示で、アガートラムがアリサたちに向かってきた時である。

アリサ　「（目を閉じ）！」

　ガンっ！　と響く銃声。

アリサ　「え⁉」

　銃撃がアガートラムを直撃し、間一髪のところで動きが止まった。

ラウラ　「銃声⁉」

ミリアム　「な、何なの⁉」

　驚くミリアム。

□街中――

　遥か離れたビルの屋上で、狙撃銃を構えていたのは――黒衣に身を包み、仮面を被った謎の男、《C》であった。

《C》　「フ……。さあ、現れるがよい……魔界皇子よ！」

　と、公園に狙いを定めている《C》。

□公園

　アガートラム、ジジジとスパークし、機能停止して姿を消し、

ミリアム　「ガーちゃん！」

ザッとミリアムの前に立ちはだかるラウラ達。

ラウラ　「よく分からんが、ここまでのようだな」

ミリアム　「……！」

後ずさるミリアム。

だが、そこに――。

魔界皇子の声　「疼く……我が右手が疼く！」

アリサ　「この声は……！」

驚くアリサ達。

漆黒のオーラに包まれた魔界皇子が、アリサ達の前に
現れた！

魔界皇子　「オオオオオオッ！　寄越せ！　我が皇子の印をっ！」

エマ　「魔界皇子……！」

ラウラ　「く……こんな時に……！」

ミリアム、フフッと笑って、

ミリアム　「へぇ。オウジ……こんな所にいたんだね！　モナくんはボクの
獲物だから、後はよろしくねっ！」

と、逃げようとするが、

魔界皇子　「我が前から逃げることなど、許さぬわっ……！　おおおおおっ！」

右手から黒いオーラを放つと。

タコの滑り台が怪物に変身して、

怪物　「アシハポーン！」

叫びながら、うねうね動く脚でミリアムに攻撃した。

ミリアム　「ひゃああっ！」

モナ　「モナっ！」

なんとか躱すミリアム、驚いて、

ミリアム　「まさかオウジ!?　ボクのこと、覚えてないの？」

皇子、ズキンと痛む頭を押さえ、

魔界皇子　「黙れ！　我が名は、魔界皇子！　我が前にひれ伏すのだ！」

タコの怪物、アリサ達に向かっていく。

ラウラ　「く……！」

アリサ　「みんな！　変身よ！」

エマ　「ええ！」

素早くＡＲＣＵＳを掲げるアリサ、ラウラ、エマ。

――変身ＢＡＮＫ。

三人、ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

目を閉じ、宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。

まじかる☆アリサ「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。

まじかる☆ラウラ「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」

目を閉じ、杖を手にして、神々しい光に包まれるエマ。

まじかる☆エマ「みんなに届いて！　歌と光と魔法の戦士！」

アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」

ラウラが青色の服を着た、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！

まじかる☆ラウラ「魔法少女！　まじかる☆ラウラ!!」

エマがワインレッドの服を着た、魔法少女まじかる☆エマに変身！

まじかる☆エマ「魔法少女まじかる☆エマ！」

三人、スタッと着地し、かっこよく決めポーズした。

――ＢＡＮＫここまで。

ミリアム「変身したっ!?」

怪物「アシハポーン！」

怪物、アリサ達に向かってくるが、

まじかる☆アリサ「たあああああっ！」

ジャンプして、蹴りを食らわせるアリサ。

まじかる☆エマ「やああああっ！」

続けざまにエマがパンチを食らわせ、

まじかる☆ラウラ「おおおおおっ！」

剣撃を喰らわせるラウラ。

×　×　×

《Ｃ》は皇子に狙いを定めようとするが、

《Ｃ》「ち……」

混戦の中で撃つことが出来ないままだ。

ミリアム「へぇ！　強いねー」

　ジャングルジムの上に立って観戦モードのミリアム。

ミリアム「オウジも形無しじゃない？」

　見やると、皇子、体から黒いオーラが溢れ出して、

魔界皇子「ぐううっ……！」

　苦しみながら――その脳裏に。

×　×　×

　魔王のシルエットや。

　ミリアムら部下の姿が浮かぶ。

×　×　×

魔界皇子「うおおおおっ！」

　その隙に、突っ込んでくるアリサとラウラ。

まじかる☆アリサ「やああああっ！」

　皇子に蹴りを放ち、

魔界皇子「ぐっ！」

　喰らって吹っ飛ばされる皇子。

　ビシッと剣を突きつけるラウラ。

魔界皇子「……！」

　追い詰められる皇子。

まじかる☆ラウラ「世情を惑わし、町を破壊するなど悪事の数々……。このまじかる☆ラウラが成敗してくれるっ！」

　剣を振り上げる！

ミリアム「あーあ。助けるかな」

　ミリアムがボヤいた時、

ユーシスの声「シュトラーール！」

ミリアム「！」

　馬のいななきと共に、シュトラールに跨がった魔界貴族ユーシスが、マントをはためかせ颯爽と現れる。

ラウラ「ぬ！」

　ユーシス、ラウラに馬上からフェンシングの剣撃を繰り出し、

ユーシス「はあああっ！」

ラウラ「くっ！」

　咄嗟のことに対応できず、喰らって後ずさるラウラ。

ラウラ「お主、やるな……」

　ユーシスを見やるラウラ。

魔界皇子「お、お前はっ……！」

　だが、それよりも先に、

ミリアム「ああっ！　ユーシスだー！　ひさしぶりーっ！」

　笑顔のミリアムが、馬に跨がったユーシスの脚に抱きついた。

ユーシス「くっ……離れろ！」

ミリアム「えー！」

まじかる☆アリサ「ま、また出たわね！」

ユーシス「！　……」

　ユーシス、アリサのチョーカーの下で、胸のペンダントが赤く輝いているのを見やって、

ユーシス「力の波動に引かれて来てみれば……。なるほどな」

　ビッと剣をアリサに向けて、

ユーシス「それが皇子の印だな……！」

まじかる☆アリサ「え!?」

ユーシス「行くぞ……！」

　シュトラールと共に突進するユーシス。

魔界皇子「くっ……」

　後方で見守っている皇子。

×　×　×

《C》「……」

　狙撃銃の狙いを皇子に定める《C》。

×　×　×

まじかる☆アリサ「きゃあっ！」



　ユーシス、馬上からの一撃でアリサを吹っ飛ばす！

まじかる☆エマ　「アリサさん！」

まじかる☆ラウラ　「おのれっ！」

怪物　「アシハポーン！」

　エマとラウラは必死に怪物と戦っている。

　倒れて動けないアリサ。

まじかる☆アリサ　「ううっ……」

魔界皇子　「……！」

　その様子を見つめる皇子。

ユーシス　「皇子の印、もらいうけるぞ！」

　手綱を引き、アリサに剣を突きつけるユーシス。

まじかる☆アリサ　「(顔を上げ) な、なんなのよ……。皇子の……印って……」

魔界皇子　「！　ぐ……！」

　アリサの胸の宝石を見つめる皇子。

　その右手の宝石が黒く輝く。

ユーシス　「貴様に答える必要はない！」

　剣を振り下ろそうとした時である！

魔界皇子　「ぐううぅっ！」
皇子の宝石と、アリサの宝石が呼応したように輝いて……！

×　×　×

フラッシュバック——
——教室での笑顔のアリサ。
——先程のホウキに乗ったアリサに下敷きにされた時の姿。
——さらに、幼い頃のアリサの姿が、一瞬だけ蘇る。

×　×　×

魔界皇子　「(M) あ、あいつは……まさか!?」
咄嗟に、立ち上がる皇子。
魔界皇子　「やめるのだ……！」
ユーシス　「なに!?」
皇子の命令に、思わず剣を止めるユーシス。

魔界皇子　「奴は……まじかる☆アリサは、我がライバル。奴にとどめをさすのは我の役目！　手出し無用だ！」
そう言い、ユーシスの前に立ちはだかる魔界皇子。

×　×　×

《C》　「ほう……」
《C》、その様子に銃の引き金にかけた手を止める。

×　×　×

まじかる☆アリサ　「え……！」
驚くアリサ。魔界皇子が自分を庇ってくれているように見えて——。
怪物　「(戸惑い) アシハポン!?」
動きを一瞬止める怪物。
まじかる☆ラウラ　「今だ！」

　　　剣を構えるラウラ。

まじかる☆エマ　「ええっ！」

　　　杖を構えるエマ。

まじかる☆ラウラ　「アルゼイドが秘剣、篤と見よ！　奥義・洸刃乱舞！　はあぁぁっ！」

　　　猛烈な剣撃を喰らわせるラウラ。

怪物　「アシハポンッ！」

　　　さらに、エマが杖を振り上げて、

まじかる☆エマ　「そびえ立て、巨いなる塔！」

　　　怪物を取り囲むように現れる四本の塔。

まじかる☆エマ　「ロードアルベリオン！」

　　　その中心部から魔法の光が飛び出して、怪物を包み込むと。

怪物　「アシハポーンっ！」

まじかる☆エマ　「静かに眠って下さい」

　　　浄化されてタコの滑り台に戻る怪物。
　　　ラウラとエマ、ダッと素早く、アリサの所にジャンプしてきて、

まじかる☆アリサ　「二人とも……！」

まじかる☆ラウラ　「待たせたな！」

まじかる☆エマ　「大丈夫ですか⁉」

　　　身構える三人。
　　　魔界皇子、その様子に、フッと笑うと、

魔界皇子　「フ……。まじかる☆アリサよ、命拾いしたようだな……！」

　　　バッとマントを翻すと、

魔界皇子　「行くぞ！　我が友、魔界貴族よ！」

ユーシス　「！　――」

　　　その言葉に、ハッと驚きの顔になるユーシス。

魔界皇子　「次こそは、貴様らを煉獄の冥府へと叩き落としてやるわ！
　ククク！　ハアアアッハハハハ！」

　　　高笑いしながら去って行く魔界皇子。

ユーシス　「まったく、阿呆が……」

　　　フと、小さく微笑み、手綱を引くと、皇子の後に続いて行く
　　　ユーシス。

×　×　×

ビルの屋上では――いつの間にか《C》が姿を消していて。

×　×　×

変身が解けたアリサ達。

アリサ「な、何だったのかしら？」

ラウラ「まあ、ともかく」

ミリアムの方を振り向くと、

ラウラ「てぃんくる☆モナくんを返してもらうぞ！」

と、竹刀を持って迫るラウラ。

モナ「モ、モナ！」

相変わらずモナ君は鳥カゴに捕まったままで、

ミリアム「ニシシ！　やだよーっ！　またねーっ！」

と、ミリアムが樹の上にジャンプして、撤退しようとしたとき――。

いきなり手裏剣が飛んできて、ミリアムの腕に命中。

ミリアム「あいたっ！」

放り出されたモナくんの鳥カゴを素早い動きで空中でキャッチしたのは――。

なんと、ネコミミ姿の少女だった。

モナ「モナっ⁉」

エマ「え⁉」

ラウラ「手裏剣っ⁉」

ミリアム「ちぇっ！　またねーっ！」

そのまま去って行くミリアム。

少女「あーあ。逃げられちゃった……」

驚くアリサ達の前にスタっと着地する少女。

アリサ「あ、あなたは⁉」

フィー「私は魔界のくのいち、フィー。一緒に魔界を滅ぼさない？」

と、Vサインして、いきなり怪しい提案を持ちかけたところで――。

つづく

第5話Aパートに続く





●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

「東京ザナドゥ」に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第５話Aパート！　魔界の住人が続々と現れ、次第に明らかになっていくリィンの過去。苦悩するリィンに手を差し伸べたのは……？

第5話『白熱のブレードバトル！』

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）
モナくん
○
フィー・クラウゼル
トワ・ハーシェル
クロウ・アームブラスト
○
リィン・シュバルツァー
ユーシス・アルバレア
ミリアム・オライオン

□ 高校前の通り・朝

アリサがモナくんと共に登校してくる。

アリサ「ふわあぁ……」

大きなあくびをするアリサ。

モナ「アリサ、大丈夫モナ?」

アリサ、眠そうな目を擦って、

アリサ「はぁ、昨日は色々ありすぎたからね……」

モナ「それは確かにモナ。三人目が見つかったり、変な貴族とか出てきたり! 大変だったモナ!」

× × ×

一方、リィンもエリゼと共に登校してきている。

エリゼ「まったく、何ですか、あの殿方は!」

プンプン怒っているエリゼ。

エリゼ「いきなり押しかけてきて、一晩泊まっていくなど! 言語道断です!」

リィン「すまない、エリゼ。あいつは親友なんだ……」

苦笑するリィン。

エリゼ「それに、あの変な馬は何です?」

リィン「シュトラールだ」

エリゼ「名前はどうでもいいんです! あのような方が親友など……意味が分かりませんっ!」

リィン「ハハッ……」

苦笑するしかないリィン。

× × ×

教室前で——ばったりと出会うリィンとアリサ。

アリサ「あら、おはよう、リィン」

リィン「ああ、おはよう……」

リィン、アリサを暫し見るが、

アリサ「何?」

リィン　「いや……」

　席に向かっていくリィン。

アリサ　「?」

　アリサの胸と、リィンの右手に隠された宝石が、うっすらと輝く。

　×　×　×

　その様子を、木の上からフィーがジッと見ていて。

□ オープニング

□ 高校の屋上（昼休み）

　アリサ、ラウラ、エマ、モナ君、トワが集まってベンチに座り、話している。

ラウラ　「ふむ……。今日は心なしか、穏やかな天気だな」

　おにぎりを頬張るラウラ。

エマ　「魔界皇子さんも出ませんし、のんびりお弁当もいいですね」

トワ　「うんうん。休息は大事だよっ！」

　エマとトワも、お弁当を楽しそうに食べている。
　そんな中で、アリサが考え込んでいて、

アリサ　「あのフィーって子……。すぐにいなくなったけど、何なのかしらね?」

　×　×　×

　回想で——前話ラストの続き。
　モナの鳥カゴを、アリサに手渡してくれるフィー。
　すぐにシュッと姿を消す。

　×　×　×

ラウラ　「魔界を滅ぼすなどと、物騒なことを言っていたが……」

モナ　「モナを助けてくれた恩人モナ！　きっと異世界の者だと思うモナ……！」

　そこに――。

ラウラ　「その通り」

フィーの声　「む!?」

　一同が見上げると、屋上の国旗掲揚台の上に立っている、制服姿のフィー。

エマ　「あ、あなた……！」

トワ　「わ！　危ないよっ！」

　だが、フィー、身軽にジャンプすると、クルクルと宙返りして、アリサ達の前に着地。

フィー　「私はくノ一の村のクロネコ……。フィー」

　その制服姿に、アリサたち驚いて、

アリサ　「って！　何いきなり、うちの制服着てんのよ！」

フィー　「その辺で調達した」

　と、Vサインするフィー。

アリサ　「調達したじゃないでしょっ！」

フィー　「授業には出てないからセーフ」

エマ　「(汗ジト) セーフかどうかという問題でしょうか……」

　と、ラウラが立ち上がり、

ラウラ　「そなた、昨日から我らにつきまとって、いったい何の用だ?」

フィー　「別に、つきまとっては……」

　ラウラ、グッと眼光鋭く睨み、

ラウラ　「教室の外から、ずっと見張っていただろう？　この私が、気付かぬとでも思ったか!?」

　ベンチに置いていた竹刀を、素早くフィーに突きつける。

フィー　「ふうん。こっちの世界にも、少しは出来る人がいるんだね?」

　フフッと笑うと、突如、懐から双銃剣を取り出して、竹刀を振り払うと、バッと飛び退く。

ラウラ　「む！」

フィー　「けど……私の双銃剣に、そんな玩具で敵うかな?」

ラウラ　「やるな、そなた……。だが、やってみねば分からんぞ」

　フィーとラウラ、間合いを取って対峙。竹刀と双銃剣を構える。

アリサ「ちょ、ちょっと……！」

トワ「まあまあ！　二人ともっ！」

　トワが間に割って入って、

トワ「ここは穏便にねっ。別に、敵同士ってわけじゃなさそうだし……！」

ラウラ「む……。会長の意見も一理あるな」

　竹刀を下げるラウラ。

フィー「……そだね。敵の敵は味方……」

　フィーも双銃剣をしまう。

エマ「敵の敵……とは？」

　フィー、アリサ達一同を見やって、

フィー「……私の村はね。魔王の手下のシロウサギに攻め滅ぼされたの」

アリサ「シロウサギ？」

ラウラ「あの奇妙なからくりを従えた者か！」

フィー「そう。私は一人だけ逃げ出して、敵討ちのためにやってきた」

モナ「そうモナ……！　魔王の手下の白ウサギ、ミリアムは、魔王の先兵として色々な世界を侵略しているモナ！」

ラウラ「しかし、敵討ちとは……」

アリサ「穏やかじゃないわね……」

フィー「敵討ちには、仲間が必要……。あなた達の強さは、昨日見させてもらった」

　フィー、アリサ達に手を差し出して、

フィー「一緒に魔界を滅ぼさない？」

アリサ「……！」

□　街中のスタジオ内

　プロデューサーっぽい男から差し出された書類に、

ユーシス「ほう……。契約書とは、これでいいのだな？」

　サラサラっと魔界の文字でサインするユーシス。今回は普通の服装だ。

□　同・前

——に出て来るユーシス。

ミリアム　「へへっ。みつけた、ユーシスっ！」

ユーシスを待ち受けていたのは、ミリアムだ。

ユーシス　「……貴様か」

ミリアム、ユーシスにペタペタと近寄っていき、

ミリアム　「なになに、ユーシス。ゲーノーカイデビューってやつ？」

ユーシス　「何だそれは？　魔界みたいなものか？」

ミリアム　「んー。確かに魔界みたいに怖いところだって聞いたことはあるけど……。って、そうじゃなくて！」

セルフボケツッコミしつつ、

ミリアム　「なーんで、こんなとこに来てるの？　魔界貴族の任務は？」

ユーシス、フッと笑うと、

ユーシス　「昨日のオーディションとやらで、俺の華麗なパフォーマンスを気に入ったそうでな。金を払って雇ってくれる上に、部屋まで用意してくれるそうだ」

ミリアム　「へ～。凄いじゃん！　じゃあ、ボクがマネージャーになってあげるよ！」

ユーシス　「まねーじゃー？　何だそれは？」

ミリアム、さすがに汗ジトになり、

ミリアム　「ホントに何も知らないんだね……」

ユーシス、構わず続けて、

ユーシス　「人間どもから施しを受けるのは癪に障るが……。この方があいつに迷惑をかけることもないからな……」

ミリアム　「メーワクって？」

ユーシス　「……」

□　ユーシスの回想——リィンの家（昨夜）

パンッとちゃぶ台の上に置かれる夕食。

——リィンの食事はご飯が大盛り。味噌汁に焼き魚に、煮物と健康的だ。

リィン　「あ、ありがとう、エリゼ」

エリゼ　「いいえ、どういたしまして」

その横で、ユーシスの前には——。

ユーシス「おい、これはなんだ？」
　ほんの少し盛られたご飯と、納豆のパックだけが置かれていた。
エリゼ「どうぞ」
ユーシス「は？」
エリゼ「どうぞ、お召し上がり下さいませ」
　有無を言わさず冷たい視線を送るエリゼ。
ユーシス「……」
　冷や汗を浮かべながら、納豆のパックを手に取るユーシス。

□ 回想戻って——

ユーシス「思い出すのも恐ろしい……。ネバネバで、糸を引いてな……。アレが食い物だとは……到底思えんっ！」
　ダンッと壁を叩くユーシス。
ミリアム「へ、へぇ……」
ユーシス「今朝の朝食も、俺の分は謎の板きれのような物だけでな……」

×　×　×

回想フラッシュ——
ユーシスのちゃぶ台の前に、カロリーメイトが置かれている。

×　×　×

ユーシス「あんな小姑のような対応をされるのは、一日だけで勘弁だ……！」
　エリゼの対応に、静かに恐れをなしているユーシス。
ミリアム「なんかよく分かんないけど……働かざる者食うべカラズって感じ？」
ユーシス「ともかく……ヤツの元から離れて見守ることにしたのだ」
ミリアム「あ、そうそう。オウジの記憶はどうなの？　ま、ボクの管轄外だけど」
ユーシス「ああ……それなら……」

□ 高校・教室

リィン　リィンは机で一人、物思いに耽っている。
「……」

□リィンの回想――（昨夜の自室）

ユーシスに話を聞かされるリィン。
リィン「俺が……魔界の皇子だと……!?」
ユーシス「ああ。貴様は、この世界を征服するため、魔力を宿した皇子の印を授かり、幼い頃に派遣された……」
リィン「なぜ、俺一人だけで……!?」
ユーシス「獅子は子を千尋の谷へと突き落とす。貴様は記憶を一時的に失い、この世界について知り、成長する……。そして、時期が来れば、皇子の印によって記憶と力を取り戻し……」
リィンの右手を指すユーシス。
ユーシス「この世界を征服し、魔界に凱旋することになっていたのだ」
リィン「……それで、俺は父さんに拾われて……。エリゼと共に育てられたのか……」

ユーシス「貴様の皇子の印が、なぜ片方だけしかないのか……。あの魔法少女とやらの手に渡っているのか……。理由は分からないのか？」
リィン「く……」
頭を抱え、思い出そうとするリィン。
リィン「分からない。俺には、何も思い出せないんだ……！」
ユーシス「この俺を、友と分かってもか？」
リィン「ああ……。お前のことは、うっすらと記憶の隅にあるが……」

× × ×

フラッシュで――。
幼い日のユーシスが、幼いリィンに跪き、忠誠を誓う姿。

× × ×

リィン「それ以上のことを……思い出そうとすると……」

リィン　　グッと頭を押さえるリィン。
　　　　「ぐああああっ！」
　　　　激しい頭痛に襲われる。
　　　　エリゼがガラッと戸を開けて来て、
エリゼ　「兄様！　リィン兄様！」
リィン　「エリゼ……何でもない……。何でもないんだ……！」
　　　　頭を押さえながら必死に言うリィン。

□回想戻って――

　　　　グッと頭を押さえている現在のリィン。
リィン　「(M) く……。やはり、何も思い出せそうにないか……」

　　　　×　×　×

　　　　フラッシュ――#1、2、3などで、怪物を伴って暴れる魔界皇子の姿。

　　　　×　×　×

リィン　「(M) 俺が……。あんなことをしていたなんて……！　それに……」

　　　　×　×　×

　　　　フラッシュ――
　　　　#4で――アリサの胸に押しつぶされるリィン。
　　　　――皇子と戦うまじかる☆アリサの姿。

　　　　×　×　×

リィン　「(M) あいつは、まさか……」
　　　　チラと、無人のアリサの席の方を見やる。
　　　　と、その視界に現れたのは、
クロウ　「よぉ、リィン。大丈夫か、そんな景気の悪い顔して？」

リィン　「クロウ先輩……」

　　と、クロウが現れた。

　　俯くリィンに、

クロウ　「何があったか知らねえが……。そんなに落ち込んでるなら、帰りに面白いとこに連れてってやるぜ」

　　笑顔で言うクロウ。

リィン　「面白いところ……？」

　　怪訝な顔になるリィン。

□高校・全景（放課後）

　　下校のチャイムが鳴っている。

× × ×

　　ラウラは水泳部のプールで飛び込み。

× × ×

　　エマは図書館で読書している。

□帰り道——

　　アリサとトワが連れ立って歩いていて、

トワ　「いや〜。フィーちゃんも、陸上部とかに入れば凄く活躍出来そうなのになぁ」

アリサ　「ああ、まあ……。そもそも、うちの生徒じゃないですけどね」

　　鞄の中でチラと後ろを見やるモナ。

フィー　「じー……」

　　と、電柱の影からアリサとトワを見やっているフィー。

モナ　「（小声）アリサ、気配を感じるモナ」

アリサ　「……！」

　　パッと走り出すアリサとトワ。

フィー　「ささささ……」

　　素早く電柱の間を移動しながら、続いてくるフィー。

トワ　「……」

途端に二人が走るのをやめると、フィーも急ブレーキで止まって電柱の影へ。アリサ、さすがに振り向いて、

アリサ　「しつこいわねえ！　魔界を滅ぼすなんて、できないって言ったでしょ！」

フィー　「……バレたか」

アリサ　「バレバレよっ！」

と、怒って歩みよるアリサだったが、

トワ　「なんだか様子が変だよ？」

と、トワがフィーを見て気付く。
フィーの足取りが、フラフラとなって、よろけていき、

アリサ　「え!?」

フィー　「腹がへっては……忍びができぬ……」

グウウウと大きなお腹の音が鳴ると、バタリと倒れてしまった。

アリサ　「ちょ、ちょっと……！」

□ マクモナルド・全景

□ 同・店内

フィー　「おいしい……。最高……。ダシがきいてる……」

パクパクとモナバーガーを食べるフィー。

アリサ　「あなた……。私のバイト代、どんだけ使わせる気よ……」

財布を見て不満げなアリサ。

トワ　「まあまあ。こっちに来てから、何も食べてなかったっていうんだし」

店員姿に着替えたトワが笑顔でモナバーガーの追加を持って来る。

フィー　「おなかとせなかが、くっつくとこだった」

そう言い、追加のバーガーもパクパクと食べていく。

アリサ　「いやそれより、その格好じゃ、お腹が冷えて大変じゃないの？」

と、モナくんがガシッとフィーに掴まれて、

モナ　「モナアア！　モナはバーガーじゃないモナアアア！」

フィー　「ああ……つい。満腹だからもういいや」

ポイッと投げ捨てられるモナ。

モナ　「モナッ!?」

トワ　「どう？　気に入った？」

フィー　「うん。すごく……」

コクリと頷くフィー。

トワ　「じゃあ、うちでアルバイトしてみないかな？」

フィー　「ぱいと？」

アリサ　「ちょ、ちょっと、トワ会長……！」

トワ　「これからも暮らしていくなら、お金がないと」

アリサ　「そ、それは確かにそうですけど……」

トワ　「どう？　フィーちゃんがいいなら？」

フィー　「……」

暫し考えると、

フィー　「めんどくさそう……」

だが、店のハンバーガーのメニュー写真を見ると、
ジュルリとヨダレが出て、

フィー　「でも、やってみる」

と、Vサインした。

トワ　「よしっ。働かざる者食うべからずだよ。早速ビシビシ鍛える
からね！」

フィー　「修行なら任せて」

立ち上がるフィー。

アリサ　「くノ一が働いて、謎生物がマスコットのお店って……」

モナ　「モナは謎生物じゃないモナっ！」

その時――。

アリサ　「あれ……？」

外の商店街を、リィンとクロウが連れ立って歩いているのに
気付くアリサ。

アリサ　「リィンとクロウ先輩じゃない」

アリサ、店内から手を振ってみるが、

アリサ　「おかしいわね？」

だが、二人、いつものように店には入らず、前を素通りして
行く。

トワ　「あ……。もしかしてっ！」

ハッと何かに気付くトワ。
だが、店内には他のお客もおり、

トワ「だめだめ！　お仕事中には出られないよ。アリサちゃん、お願い！
クロウくんを止めてっ！」
アリサ「え？」
トワ「このままじゃ、リィンくんが悪の道に染まっちゃうよ！」

□商店街のカードショップ

——の看板を見上げているアリサ。

アリサ「悪の道って、ここが……？」
そこは、何の変哲もないカードショップである。
アリサ「ただのカードショップにしか見えないけど……」
モナ「（頷き）モナ！」

×　×　×

店内に——

アリサ「失礼しまーす」
アリサが恐る恐る入ってくると。
クロウの声「ボルトっ！」
アリサ「……え！」
アリサ、驚き、店の奥の方を見やると、
クロウ「俺の勝ちだ！　５０ミラいただきだぜ！」
なんと、クロウがリィンと共に、ブレードをやっていた
ところで——。

第５話Ｂパートに続く


Bolt
Mirror
50

第5話【白熱のブレードバトル！】

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）
モナくん
○
フィー・クラウゼル
トワ・ハーシェル
クロウ・アームブラスト
○
リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア
ミリアム・オライオン
怪　物
○
〈C〉

□カードショップ・全景

□同・店内

カードショップに入ってくるアリサ。

クロウの声「ボルトっ！」

アリサ「……え！」

アリサ、驚き、店の奥の方を見やると、

クロウ「俺の勝ちだ！　50ミラいただきだぜ！」

得意顔で50ミラのコインを手にするクロウ。

リィン「く……また負けか……」

ガクリと項垂れるリィン。

なんと、クロウとリィンがカードを手にして、ブレードをやっていたのだ。

アリサ「クロウ先輩、リィン！　貴方たち、何やってるのよ……？」

モナ「……モナ！」

アリサに抱きかかえられているモナくん。

クロウとリィン、アリサを振り向いて、

リィン　「アリサ……？　どうしてここに？」

アリサ　「トワ会長に、二人を追うように言われて！　悪の道がどうとかって……！」

クロウ　「こいつは、ただのブレードだぜ？」

アリサ　「え……!?」

　アリサ、近寄ってブレードのカードを手に取る。

アリサ　「確かに……」

　クロウ、ニヤッと笑い、

クロウ　「ただし、ちょいとだけ、スリルを味わうために、ミラを絡めてるけどなぁ……」

アリサ　「それって、賭け事じゃないですか！　上級生が、そんなこと教えるなんて……！」

クロウ　「生憎、今は同級生だぜ。ハハッ」

アリサ　「そんな屁理屈じゃ……！」

リィン　「アリサ、いいんだ」

アリサ　「え!?」

リィン　「誘いに乗ったのは、俺自身だ。少し忘れたいことがあって……。
軽い気晴らしになればと思って」

アリサ　「リィン……」

　ハッとなるアリサ。

×　×　×

　回想で──教室内で俯いているリィン。

×　×　×

アリサ　「（M）なにか、落ち込んでるようには見えたけど……」

　クロウ、カードをシャッフルさせつつ、

クロウ　「んなわけで、男同士の勝負に口を挟むんじゃないぜ！
まだ続けるよな、リィン？」

　リィン、財布の中を見やり、

リィン　「残るはエリゼとの夕食代だが……。仕方ない。もう一勝負だ！」

　と、アリサがリィンの手を掴んで、

アリサ　「だめよ！」

リィン　「な……⁉」

アリサ　「貴方、どう見ても、カモにされてるじゃない。これ以上続けても、ミラを巻き上げられるだけよ」

リィン　「そ、それは……」

アリサ　「ゲームはここまで。こんなことに付き合うのはやめましょう」

　　と、アリサが連れ帰ろうとするが――。

クロウ　「おい……！」

　　真顔でアリサを見やるクロウ。

アリサ　「なに？」

クロウ　「ブレードは、ゲームなんて生半可なもんじゃねえ。お互いの魂を賭けたデュエルだ。デュエルが一度始まったら、勝手に抜けることはできないんだぜ？」

アリサ　「じゃあ、どうすればいいのよ？」

クロウ　「……勝ち抜けだ。抜けるなら、オレに、勝ってからにしな！」

　　戸惑うアリサ。

アリサ　「……勝ち抜け……」

モナ　「（小声で）……モナ⁉」

　　だが、アリサ、グッと決意の顔になると、

アリサ　「いいわ」

リィン　「！」

　　アリサ、前に進み出て、

アリサ　「私が勝って、リィンの負けの分まで、取り返してみせるわよ！」

　　そう言い、カードプレイ用の席に座る。

リィン　「アリサ……！」

クロウ　「フフッ、いいだろう」

　　カードの山を手に取り、軽くシャッフルするクロウ。

クロウ　「ブレードのルールは知ってるか？　お嬢ちゃん」

アリサ　「ええ、多少はね……」

　　クロウ、シャッフルしたカードを、アリサと自分、交互に配りながら、

クロウ　「まず、手札を配り終えたら、お互いの山札をセットする。そして、山札から一枚ずつドローし、同時に場に出す……。数の少ない方が、先攻だ」

　カードを配り終え、アリサと自分、二つの山札を置くクロウ。

アリサ　「先攻の方が少しだけ不利……。できれば、後攻がいいわね……」

　緊張しつつ自分の山札を見やるアリサ。

クロウ　「分かってるじゃねえか」

アリサ　「うちのメイドのシャロンに、鍛えられてるから」

クロウ　「面白そうだ……。行くぜ……！」

　アリサとクロウ、視線を交わすと、

アリサとクロウ　「デュエル！」

　アリサとクロウ、自分サイドの山札に手をかけ、同時に
　カードを引く。

アリサ　「ドロー！」

　アリサのカードは――『6』のカードで。

アリサ　「……！（M）行ける、これなら後攻に……！」

　カードを同時に場に出すアリサとクロウ。

アリサ　「……！」

クロウ　「フフッ」

　だが、クロウが出したのは――『7』のカードだった。

クロウ　「ツイてるな。後攻はいただきだぜ！」

　緊張の顔に包まれるアリサ。

アリサ　「（M）大丈夫。手札の使い方次第で、勝ち目はいくらでも
　あるわ……」

　キッとクロウを見やると、

アリサ　「私のターンからよ……！」

　カードを場に出すアリサ。

×　×　×

　点描で――暫く場が進んで。

クロウ　「オレのターン！」

　プラストのカードを出すクロウ。

クロウ　「プラスト！　相手の手札を一枚選択し、そのカードを破壊する！
　オレは右側のカードを選ぶぜ！」

　指さしたアリサの手札は残り二枚。

アリサ　「！　くっ……！」

　右側の『6』のカードをクロウに見せて、場の外に除外するアリサ。

クロウ　「おおっし。デカイの貰いだぜ！」

　『5』のカードを場に出すクロウ。

クロウ　「ターンエンドだ」

アリサ　「まだよ！　私のターン……！」

　アリサ、最後の一枚のカードを場に出すと——ボルトで。

アリサ　「ボルト！　貴方が最後に場に出した、『5』のカードを無効化するわ！」

　クロウの場の『5』のカードが裏返る。
　クロウの合計値は『20』に戻り、アリサの『24』が上回った。

アリサ　「やったわ！」

　だが、クロウは冷静に、

クロウ　「オレのターン！」

　最後の一枚の手札をピッと指で持ち、

クロウ　「切り札は、フィナーレまで取っておくもんだぜ！　エース！」

　『1』を出すクロウ。

アリサ　「！」

クロウ　「エースの特殊効果により、ボルトで無効化されたカードは復活する！」

　クロウの場の『5』のカードが表に戻り、『1』を加えて合計『26』。
　アリサの合計『24』を越え——。

クロウ　「オレの勝ちだっ！」

アリサ　「くっ……！」

×　×　×

　——次々に勝負が続き。
　フォースのカードを出すクロウ。

クロウ　「フォース！　オレの場のカードの合計値『13』を二倍にする！」

　クロウの場の合計値が『13』から、二倍の『26』になり、
　アリサの『20』を上回る。

アリサ　「私のターン！」

アリサ　アリサ、すかさずミラーのカードを出し、
「ミラー！　場に出ている、自身と相手のカードを全て入れ替える！」
お互いの場のカードが逆転。

アリサ　「これで形勢逆転よっ！」
アリサ『26』、クロウ『20』になる。

クロウ　「それはどうかな？」
ニヤリと笑うクロウ。

アリサ　「え⁉」

クロウ　「オレのターン！　ボルト！」
ボルトのカードを出すクロウ。

アリサ　「なっ……！」

クロウ　「お前の場のフォースは、ボルトの効果で無効になる！」
フォースのカードが裏返り、元の『13』に戻るアリサの場のカード。

アリサ　「(M)元に戻ったら……こっちが不利じゃない……！　まさか、それを見越して⁉」

クロウ　「今ので、オレの手札はラスト。ターンエンドだ！」

アリサ、最後の手札を見やり、

アリサ　「く……私のラストは、『6』よ……」
『6』のカードを出し、アリサの合計『19』になるが――。

クロウ　「おっと……オレの合計は『20』。一歩及ばなかったようだな」
ニヤッと笑って、

クロウ　「ミラーを使わず、先に『6』を出してりゃあ、お互い『26』ポイントで引き分けには持ち込めたのにな……。ま、勝負は時の運ってやつだ！」

アリサ　「……そんな」
ガクリと項垂れるアリサ。

アリサ　「シャロンとはいい勝負ができたのに……。全然通用しないだなんて……」
机の横の席に座らされたモナくんが、

モナ　「アリサ、大丈夫モナ～……」
小声で心配する。

クロウ　「そろそろ打ち止めか？　ここまで負けが込んだら、ミラの請求額は、こんな感じになるんだけどなあ……」

メモをアリサに見せるクロウ。

アリサ　「そ、そんなにっ……！」

リィン　「なっ……！」

アリサ　「わ、私の、一ヶ月分のアルバイト代が……」

真っ青な顔になるアリサ。

リィン　「アリサ！　もういい！　やめるんだ！」

クロウ　「まあ、オレも身ぐるみ剥がそうってほどワルじゃねぇが……」

チラッとアリサの胸元を見やり、

アリサ　「……！　な、何よっ⁉」

クロウ　「そうだな……。お前さんの、その胸のペンダント。そいつで構わないぜ」

アリサのペンダントをクロウが指さす。

アリサ　「こ、これは……！」

クロウ　「オレが次勝ったら、そのペンダントを貰う。お前が勝ったら、今までの負けは、リィンの分も含めてチャラ……。それでどうだ？」

リィン　「そんなこと、アリサにさせるわけには！」

アリサ　「いいの！　貴方、朝からずっと何か悩んでたんでしょ……」

リィン　「え……⁉」

アリサ、フフッとリィンに微笑んで、

アリサ　「その上、こんなことに足を突っ込むなんて、最悪の気分よね……。でも大丈夫。私が全部、取り戻してあげるから！」

気合いを込めて、立ち上がるアリサ。

リィン　「……！」

そんなアリサを、思わずハッと見つめるリィン。

クロウ　「ヘッ、返り討ちにしてやるぜ」

アリサ　「さあ、どうかしらね？」

二人、カードに手をやり、

アリサとクロウ　「デュエルっ！」

□　マクモナルド・店内

トワ　「いらっしゃいませ～！」

フィー　「らっしゃい」

Vサインするフィーの前に、部活帰りのラウラとエマが

やってくる。

エマ「あら、フィーちゃん」

トワ「ふふっ。今日から研修中なんだよ～」

フィー「これも生活のため」

ラウラ「ほう……。ならば、スマイルとやらを貰おうか？」

フィー「じぃー……」

ラウラをジト目で見つめるフィー。

ラウラ「……そんなスマイルがあるか！」

エマ、店内をキョロキョロ見て、

エマ「アリサさんはどこに？」

トワ「あ、そうそう！　大変なんだよ！　リィンくんが悪の道に……！」

□カードショップ・店内

アリサ「……これでラストよ！」

最後のカードを出すアリサ。同点になり、

クロウ「ちっ……！　同点かよ……！」

場のカードをクリアするクロウ。

リィン「引き分けで、お互いの手札はゼロ！　次のドローが……勝負を決める……！」

クロウ「へへッ。もう少しで、そいつはオレのもんだな」

アリサのペンダントに手を伸ばすクロウ。

アリサ「渡さないわ……！」

慌てて胸元を押さえるアリサ。

アリサ「これは、私の大事なものなんだから！」

リィン「！」

カード台の横に座ったモナくんが、

モナ「（コクコクと小さく頷く）」

リィン「（M）アリサ……俺なんかのために……。この勝負……何とか、やめさせられないのかっ⁉」

アリサを見つめるリィン。

と、アリサが手をやった胸元から、キラッとペンダントの光が漏れる。

リィン「……！」

　　　その瞬間、ドクンとリィンの鼓動が高鳴る。
リィン　「……くっ。(M)こ、これは……！」
　　　何かを思い付いたリィン、踵を返す。
アリサ　「リィン？」
クロウ　「なんだ？　世紀の一戦を見届けないのか？」
リィン　「あ、ああ、なんだか心臓に悪くて……。二人で続けててくれ……」
　　　そう言い、店の外に出ていくリィン。
クロウ　「……」
　　　その様子を、チラと見送るクロウ。
クロウ　「まあいい、真剣勝負だ」
アリサ　「ええ……」
　　　ゴクリと息を飲むモナくん。
　　　山札に手をやるクロウ。
クロウ　「いくぜ……。これが最後のドロー。デュエルを決める
　　　ディスティニードローだぁぁあっ……！」
　　　山札に手をやるアリサ。
アリサ　「見てなさいよ！　例えこの私の右手が、べっきり折れたとしても！
　　　引いてやるわっ……！」
　　　ゴゴゴゴっと風が巻き起こり、二人の間に物凄いオーラが
　　　漂う。
モナ　「す、凄い迫力モナー！」
　　　なぜか重そうなカードを、必死に捲ろうとする二人！
アリサとクロウ　「はああああっ！」
　　　さらに、振動で店全体が揺れ始めたかと思われた時――。
　　　ドゴオオオオン！
　　　と、カードショップの入口が何者かによって蹴破られた。
アリサ　「え……!?」
クロウ　「なっ!?」
　　　手を止めるクロウとアリサ。
　　　二人が振り向いた先には、
　　　土煙の中に立っていたのは魔界皇子！
魔界皇子　「疼く……我が右手が疼くぞ！」
クロウ　「あ、あいつはっ!?」
アリサ　「出たわねっ！　ヘンタイ皇子！」

魔界皇子　「否っ！　我が名は魔界皇子であるっ！」

　プワッと黒いオーラを右手から放つと、数枚のブレードカードに直撃。

　カードが巨大化して、剣と鏡が合体した姿の怪物になった！

怪物　「ボールトーーッ！」

　ガガガンと、雷を店内に放つ怪物。

アリサ　「きゃああっ！」

クロウ　「うわわあああっ！」

×　×　×

　爆風の中、必死に店の外に逃げ出してくるアリサ。

アリサ　「……クロウっ！」

　だが、クロウの返事はなく、

アリサ　「……いけない！　助けなきゃ！」

モナ　「アリサ！　変身モナっ！」

　素早くＡＲＣＵＳを掲げるアリサ。

　──変身ＢＡＮＫ。

　アリサ、ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。

　目を閉じ、宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。

まじかる☆アリサ　「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」

　アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！

まじかる☆アリサ　「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」

　スタッと着地し、かっこよく決めポーズ！

　その前に──

魔界皇子　「フゥハハハハハッ！　現れたな！　我が宿敵、まじかる☆アリサよっ！」

　店を破壊する怪物と共に、外に出てくる皇子。

まじかる☆アリサ　「ラウラとエマはまだだけど……！　やるしかないわっ！」

　身構えるアリサ。

魔界皇子　「ハハハハッ！　貴様と俺と一対一か！　久しぶりだな！
やれっ！」

　怪物をけしかける皇子。

怪物　「ミラアアァッ！」

　ピカンと光った鏡の部分から、光線を放つ怪物。

まじかる☆アリサ　「きゃあっ！」

　慌てて宙にジャンプすると、

まじかる☆アリサ　「全然一対一じゃ……ないじゃないのよおおっ！」

　怒りと共に、怪物のミラー部分にキック！

　怪物、悲鳴を上げて吹っ飛ぶ。

魔界皇子　「フハハハハッ！」

　と、アリサの背後に現れる皇子。

魔界皇子　「我が力、思い知るがよい！　漆黒の闇より生まれし、魔界のオーラをっ！　喰らえいっ！」

まじかる☆アリサ　「たああっ！」

　腕を構えた皇子にパンチをかます。

魔界皇子　「ぬぐわっ⁉」

　道路に叩きつけられる皇子。

魔界皇子　「ぬううっ！　卑怯であるぞ！　口上の最中に！」

まじかる☆アリサ　「問答無用っ！」

　ドゴンと、飛び蹴りを繰り出して来て、慌てて避ける皇子。

魔界皇子　「おのれええっ！　貴様の口上の間は、黙ってやってるというのに！」

　着地したアリサ、皇子を睨み、

まじかる☆アリサ　「あら？　そんなの、貴方の勝手でしょ？　はあぁっ！」

　ズババババと、連続して拳を繰り出すアリサ。

魔界皇子　「くっ……！」

　なんとか受け止めるが、押される皇子。

まじかる☆アリサ　「（M）おかしい……！　こいつ、こんなに弱かったかしら⁉」

　違和感に気付いた時である。

声　「おおおおおっ！」

　迫ってくる声と馬のいななき。

まじかる☆アリサ　「⁉」

　ガキンと剣を振るってきたのは、ユーシス！

まじかる☆アリサ　「きゃあああっ！」

　不意打ちを喰らって、倒れるアリサ。

魔界皇子　「……！　おお、来たか」

愛馬シュトラールに跨がっているユーシス。なぜか、宝塚の男役みたいな華麗な衣装に身を包んでいる。

魔界皇子　「我が友、魔界貴族よ！」

ユーシス　「フン。一人で戦うな、阿呆が」

ミリアム　「ボクも一緒だよーっ！」

後ろに跨がっていたミリアムも飛び下りてくる。

皇子、一瞬汗ジトになり、

魔界皇子　「何なのだ、その服装は？」

ユーシス　「気にするな。ただの撮影衣装だ」

魔界皇子　「あ、あぁ……」

モナ、倒れたアリサを押して、

モナ　「アリサ！　起きるモナっ！」

まじかる☆アリサ　「くっ……！」

立ち上がるアリサ、傷ついている。

魔界皇子　「ククク、まじかる☆アリサよ！　これで三対一だな」

怪物　「ボルトーーッ！」

怪物も雷を放ってくる。

まじかる☆アリサ　「（かわしつつ）四対一でしょ……！　これじゃ……！」

魔界皇子　「フウハハハハ！　どうだ！　今までの我が気持ち、思い知ったか！諦めて退くがいい！」

だが、ユーシスが進み出て、

ユーシス　「いや、皇子の印の回収が先だ」

まじかる☆アリサ　「！」

魔界皇子　「む……！　そうであったな！」

躊躇しつつも頷く皇子。

ユーシス、剣を構えると、

ユーシス　「行くぞ！　シュトラール!!」

いななきと共に、突進するシュトラール。

まじかる☆アリサ　「こ、このままじゃ……！」

モナ　「（逃げようと）モナぁぁあっ!?」

ユーシス　「とどめだっ！　アスティオンナイツ！」

振り下ろされるユーシスの剣。

まじかる☆アリサ　「！」

アリサが思わず目を閉じた時である！



ユーシス　「うぐっ……！」

右腕を押さえ、剣を止めるユーシス。

なんと、ユーシスの右腕にはブレードのカードが刺さっていた。

まじかる☆アリサ　「……え⁉」

魔界皇子　「なにっ⁉」

ザザンと踏み出される足。

《C》　「……」

そこに立っていたのは、黒い覆面の男――《C》である。

ユーシス　「お、お前は……！」

驚きの顔で見るユーシス。

《C》　「我が名は《C》……」

そう呟くや、カードを手裏剣のように放ってくる。

ユーシス　「くっ……！」

シュトラールが怯えて下がっていく。

ミリアム　「わわわわっ！」

ミリアムもカードを避けて後退。

まじかる☆アリサ　「何なの、あの人……」
〈C〉　「魔法少女よ……。同志として、手を貸そうではないか」
まじかる☆アリサ　「え!?」
魔界皇子　「……フン。何者かは知らぬが、我が魔界の力の前に、跪くがよいわ！」
〈C〉　「愚かだな……。貴様のその傲慢さ」
魔界皇子　「なに!?」
〈C〉　「その力……。魔界のために使うつもりか？」
魔界皇子　「フハハハ！　愚問だな！　我こそは魔界皇子っ！　行けっ！」

怪物をけしかける皇子。
だが、そこに――。

まじかる☆ラウラ　「だあああああっ！」
まじかる☆エマ　「はあああああっ！」

まじかる☆ラウラとエマが、ダブルキックを繰り出して、
直撃させた。

怪物　「ミラアアアッ!?」

鏡の部分が砕ける怪物。

まじかる☆アリサ　「ラウラ！　エマ！」

まじかる☆ラウラ　「大丈夫か、アリサ！」
まじかる☆エマ　「アリサさん！　お待たせしてすみません！」

×　×　×

トワが離れた建物の影から応援している。

×　×　×

まじかる☆アリサ　「ううん！　来てくれて助かったわ！」

鏡が砕けながらも、アリサに突進してくる怪物。

怪物　「ミラララっ！」
モナ　「今モナっ！」

アリサ、グッと弓を取り出して構えると、怪物に狙いを定め、
引き絞る。

まじかる☆アリサ　「はああああっ！」

愛の力が矢の先に集中して――。

まじかる☆アリサ「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

　グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター!!」

　愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

　虹色の矢が命中し、怪物を包むと――。

怪物「ミラアアアアッ!?」

　元のブレードのカードに戻った。

魔界皇子「ククク！　とんだ邪魔が入ったな……！　まじかる☆アリサよ！
この決着はまたの機会に！　フウハハハハッ！」

　高笑いと共に、ユーシス、ミリアムと共に姿を消す
　魔界皇子で――。

× × ×

　戦い終わって――。

　元の姿に戻っているアリサたちとモナ。

ラウラ「謎の仮面の男だと？」

エマ「私たちが来た時には、もういなかったような……」

アリサ「ええっ!?」

モナ「風のように現れて、風のように去っていったモナ……？」

　首を傾げるモナくん。

アリサ「敵なのか味方なのか……。あの男、いったい何者なの……」

　ふと、元に戻ったカードショップを遠目に見つけて、

アリサ「あ……！　忘れてたっ！」

□カードショップ・店内

　――に慌てて入ってくるアリサたち。

アリサ「クロウ！　大丈夫っ!?」

　だが、店の奥には――。

トワ「ミラー、フォース！　ブラスト、ブラスト、おまけにボルトっ！」

クロウ「げげげっ……！」

　トワに、完膚なきまでに打ち負かされているクロウ。

クロウ「インチキ効果もいい加減にしろっ！」

バッとカードを投げ出した。

トワ　「はい。これで私の勝ちだねっ」

アリサ　「ええええっ！」

トワ　「リィンくん、これで全部取り戻したからねっ」

と、ミラを返して貰うリィン。

リィン　「た、助かりました……会長」

トワ　「クロウくん。二度とリィンくんを、こんな所に連れて来ちゃいけないんだよ。じゃないと、学校に言いつけちゃうから」

クロウ　「へぇへぇ。まあどうせ、最後は返すつもりだったけどさ」

頭を掻いて苦笑するクロウ。

アリサ　「ト、トワ会長が、あんなにブレード強かったなんて……」

モナ　「人は見かけによらないモナ」

と、リィンが来て、

リィン　「俺のせいで、変なことに付き合わせてしまった……。今日は本当にすまなかった、アリサ！」

潔く頭を下げるリィン。

アリサ　「！」

アリサ、そんなリィンの姿に、ハッとなって、

アリサ　「ま、まあ、これに懲りたら、こんな所には寄らずに、マクモに来ることね！　ちょっとくらいは、サービスするわよ！」

少し赤面しつつ言うアリサで――。

〈つづく〉



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

『東京ザナドゥ』に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第6話Aパート！　修学旅行に行くこととなったアリサ一行。しかし、アリサは修学旅行よりも、その近くにある温泉街に関心があるようで……？

第6話（最終回）『アリサとリィン、二人の出会い』

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）
モナくん
○
マキアス・レーグニッツ
エリオット・クレイグ
ガイウス・ウォーゼル
トワ・ハーシェル
クロウ・アームブラスト
トヴァル・ランドナー
○
リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア
ミリアム・オライオン
怪物

□高速道路を走るバス——

緑の木々が生い茂る山あいの道を、バスが走って行く。

× × ×

その車内——。

アリサ、エマ、ラウラが席に座っていて、担任のトヴァル先生が、バスの前方でマイクに向かっている。

トヴァル「お前たち。修学旅行とは言っても、ハメは外しすぎないようにな！」

生徒達「はーい！」

トヴァル「いい返事だ。ホテルに到着するまで、楽しみにしてろよ！」

と、盛り上がる生徒たちの中で——。

アリサ「……」

窓の外をぼんやり見ているアリサ。

エマ「どうしたんですか、アリサさん？」

アリサ「え……⁉」

ラウラ「先程から、窓の外ばかり気にしているようだが……？」

モナ君がアリサの足元の鞄から顔を出す。

モナ「車酔いでもしたモナ？」

だが、ちょうどパンツを覗けるアングルになっていて、

アリサ「ちょっ！ 見ないでよっ！」

モナ「モガッ！」

アリサに踏み潰されるモナくん。

アリサ「……実はね。今夜泊まるホテルって、ずっと行きたいと思ってた、温泉街のそばなのよ」

ラウラ「そなたがアルバイトで、お金を貯めて行こうとしてた場所だったか？」

アリサ「ええ、そうよ」

エマ「ホテルに着いたら、夜まで自由時間ですね。その間に行ってみるのは？」

アリサ、スマホの地図を見ながら、

アリサ「ううん。山を越えるし、歩いて気軽に行けそうじゃないから。残念だなって」

と、エマが微笑んで、

エマ　「大丈夫ですよ、アリサさん。私たち、魔法少女じゃないですか」

アリサ　「え？」

ラウラ　「うん。そうであったな。魔法の力で山にトンネルを掘って……！」

エマ　「(汗ジト)い、いえ、ホウキで飛べば」

アリサ　「そっか！　その手があったわね！　ホウキで山を
ひとっ飛び……！」

笑顔になるアリサ。

× × ×

と、リィンは、物憂げな顔で窓の外を一人見ていて。

リィン　「……」

その視線の先には、火山が聳えていた。

□オープニング

□走るバスの車内

トヴァル　「ゴーファイっ!!」

カラオケで某曲を熱唱するトヴァルがいて、黄色い声援を送り
盛り上がる女子達。

そんな中で——。

リィンと、クロウ、マキアス、エリオットが固まって
座っていて。

エリオット　「女子たち、盛り上がってるねえ」

リィン　「ああ、楽しそうだな」

マキアス　「まったく。学を修めると書いて修学旅行だぞ。遊び半分で
来られては困るっ！」

と、エリオットがゴソゴソとマキアスの鞄を開いて、

エリオット　「へえ……。コレでもそんなこと言えるのかな？」

出て来たのはアイドルのライブＤＶＤの山で、

マキアス「よ、夜に観賞会を開こうと思ってな！　オトナの楽しみだ、構わんだろ！」

エリオット「(苦笑) オトナねえ……」

クロウがニヤッと笑って、懐に手を入れ、

クロウ「おっと。オトナっていうなら、コイツだろ」

出したのはブレードのカード。

クロウ「ブレードで、土産代を賭けて徹夜勝負としゃれ込もうじゃねえか」

リィン「うっ……！　ブレードには、嫌な思い出が……」

クロウ「へへッ。修学旅行の夜の楽しみ方ってのを、教えてやるぜ。二回目のこの俺がなっ」

ドヤ顔で言った途端、ギュッとクロウの耳が誰かの手に引っ張られて、

クロウ「いで、いでででっ！」

トワ「ダメだよ、クロウ君っ。ブレードは没収！」

クロウのブレードを取り上げるトワ。

クロウ「ちょっ！　つーか、何で三年のトワまでついて来てんだよ！」

トワ「生徒会長として、クロウ君の監視のためにね」

リィン「監視……とは？」

胸を張るトワ。

トワ「去年の修学旅行、ブレードでクロウ君がクラス全員のお土産代を巻き上げちゃった前科があってね」

マキアス「な、何ですって……！」

エリオット「恐るべし、ギャンブル狂の力……」

リィン「ハハッ……」

トワ「というわけで、修学旅行中はブレード禁止だからねっ！」

クロウ「ちぇっ、つまんねーなぁ」

□ 高速道路を――

馬のいななきと共に、

ユーシス「はあっ！」

愛馬シュトラールで駆けるユーシス。

アガートラムに乗って、空から追いかけるミリアムが、

ミリアム「待ってってば、ユーシス～！」

ユーシス「フン……。この俺に黙って旅に出るなど、いい度胸ではないか……必ずや追いついて見せる……」

ミリアム「オウジに置いてかれたのが、そんなにショックなんだ～？」

ユーシス「阿呆が。そんな低レベルな話をしているのではない」

ギッと真顔になって、

ユーシス「あいつはこの一月ほど、魔界皇子としての任務を全く果たさず、腑抜けたように家に閉じこもってばかりだ……。この辺りで、活を入れてやらないとな」

ミリアム「ふ～ん。なら、ちょうどいいかもね」

ユーシス「何がだ？」

ミリアム「ほら、あの山」

行く手に見える火山を指さすミリアム。

ミリアム「オウジの行き先って、魔界の出入口の近くじゃないの？」

ユーシス「あれは……確かにそうだ」

火山を見やるユーシス。

ユーシス「あいつが何かを思い出す切っ掛けになるやもしれんな……。急ぐぞっ、シュトラール！」

シュトラール、いななきを上げて猛スピードで駆ける。

ミリアム「わっ！　ちょっと～！」

ユーシス「（M）待っていろ。この俺が、貴様の記憶を必ず取り戻させてやる……！」

ユーシス、驚いて避けた車を、猛スピードで追い抜いていき。

□高原のホテル・全景

□同・一室

エマ、アリサ、ラウラが窓から顔を出し、ベランダに出て来て、

エマ「どうでしょうか？」

ラウラ「大丈夫だ。誰も下にはいない」

アリサ「よしっ……！」

ホウキを手にするアリサ。

モナ「見つからないように、出るモナ……」

その時である！

声　「お邪魔しま〜すっ！」
　　驚くアリサたち。
アリサ　「わっ!?」
ラウラ　「そ、その、これは何でも！」
エマ　「ベランダの掃除をしようと……！」
　　慌ててホウキを後ろに隠したりするが、入ってきたのはトワで、
トワ　「あれ？　どこか行くつもりなの？」
アリサ　「トワ会長……！」

×　×　×

　　ホウキに乗ってベランダ飛び出していくアリサ、ラウラ、エマ（横乗り）。
アリサ　「行くわよ！　ユミル温泉！」
　　モナくんが、ホウキの後ろにくくりつけられていて、
モナ　「モナ！　モナっ！　落ちるモナ！　死ぬモナアア！」
　　トワもアリサの背中にしがみついていて、
トワ　「わあぁ！　凄い！　楽しいっ！」
　　空を飛んでいくアリサたち一同。

□同・ホテル内のロビー
リィン　「……はぁ」
　　缶ジュースを飲みながら、リィンが物憂げに座っている。
リィン　「（M）ユーシスのやつ、黙って出て行ったし、今頃怒ってるだろうな……」

×　×　×

　　回想——リィンに怒るユーシス。
ユーシス　「貴様！　なぜ皇子としての務めを果たそうとせぬ……！」

×　×　×

リィン　「（M）あいつはああ言うが……俺はやはり、いやなんだ……」

　革手袋で包んだ右手を、ジッと見やるリィン。
　そんなリィンの背を、ポンと叩く手。

ガイウス　「リィン」

リィン　「ガイウス？　な、何だ……」

　サッと右手を隠すリィン。

ガイウス　「キミの纏う風が、俺には泣いてるように聞こえてな」

リィン　「風……？」

ガイウス　「そんな時は、爽やかな風を浴びに出るに限る。一緒に釣りに行かないか？」

　そう言い、釣り竿を差し出した。

リィン　「釣り竿なんて、どこで……」

　と、マキアス、エリオット、クロウが釣り竿を手にやってきて、

エリオット　「レンタルだよ」

マキアス　「こういうのも、悪くはないな」

クロウ　「ま、ブレードもねえしなぁ」

リィン　「みんな……」

　クロウたちを見やるリィン。

ガイウス　「さあ」

　リィン、頷き、釣り竿を受け取ると、

リィン　「……ああ。折角の修学旅行なんだものな。行こう！」

　笑顔で立ち上がるリィン。

□　ユミル温泉・全景

□　同・露天風呂

　ザバッと湯舟から湯が溢れる音が響いて。

アリサ　「はあああ〜〜……」

ラウラ　「極楽、極楽……」

エマ　「心が洗われるようですね」

トワ　「うんうん、連れて来てくれてありがとっ」

　アリサたち一同が、露天風呂の湯舟につかって寛いでいる。



モナ「モナは……モナは何も見えないモナアア！」

　アイマスクでガチガチに目を隠されたモナくんが、涙を流して湯舟に浮いている。

ラウラ「心配いらぬ。この私が手取り足取り、世話をしてあげるからな」

　と言って、ギュッとモナを抱き寄せるラウラ。

ラウラ「ふ、ふふふふっ……」

　口から涎が流れる。

モナ「モ、モガ……なんだか、息ができないようなモナっ……!?」

　谷間に挟まれたモナが窒息しそうになる。

ラウラ「む！　これは失礼した」

　慌ててモナを放すラウラ。

モナ「モ、モナ！　いや、全然問題ないモナ！　もう一度ギュッとモナ……！」

アリサ「このヘンタイ国王……」

モナ「そ、そ、そんなことないモナっ！」

　アリサ、ラウラの胸を見て、

アリサ「それにしても、ラウラって、その。やっぱり私よりも……」

ラウラ「何のことだ？」

　アリサ、さらにエマの胸も見て、

アリサ「エマも、うらやましいわね……」

エマ「（赤面し）ア、アリサさん。そんなことはありませんよ……
アリサさんこそ」

　そんなやり取りを、

トワ「ふふっ。いいねえ。修学旅行って感じで」

　と、笑顔で見ているトワ。

アリサ「ふうっ」

　大きく伸びをするアリサ。

　その胸で、赤い宝石をはめたペンダントが輝く。

アリサ「久しぶりに来てみたけど、あの頃と全然変わってないわね」

トワ「あ、そうそう。アリサちゃんの初恋の人、見つかるといいね～」

アリサ「は、初恋だなんて、そんな！」

ラウラ「ほう、それは初耳だな」

エマ「どういう方なんです？」

　アリサに注目する一同。

アリサ「……まだ小さかった頃の話よ」

□

アリサの回想——

　山道で迷い、うずくまって泣いている幼いアリサ。

アリサの声「この温泉に家族で旅行に来たんだけど、みんなとはぐれて、
山の中で迷子になっちゃって……」

　そこに手を差し伸べる幼い男の子の姿。

　（顔はまだ見せず）

アリサの声「その時に、私を助けてくれて、麓の旅館まで私をおぶって
連れて行ってくれた男の子がいたの……」

　幼いアリサ、髪飾りを取って、お礼に男の子に手渡す。

　すると、男の子の口元が微笑んで、赤い宝石を代わりに
　渡してくれた。

アリサの声「お礼に渡した髪飾りのお返しにその子がくれたのが……」

□ 回想戻って——

アリサ「この宝石なのよ」

胸のペンダントの宝石を、一同に見せるアリサ。

トワ「不思議な話だよねぇ」

ラウラ「ふむ。皇子の印などと呼ばれているが、いったいなぜこんな所で……」

エマ「もしかしたら、この土地に、魔界皇子さんの秘密があるのかも？」

アリサ「どうなのかしら……。まさか、あの子が魔界皇子だったなんてことは……。ないと思いたいけど……」

宝石を見やるアリサ。

□ 涼やかに流れる山の渓流で——

リィンとガイウス、クロウ、エリオット、マキアスが釣りを楽しんでいる。

マキアス「ヒット！」

パッと竿を上げるが、

ガイウス「早すぎるな。逃げられた」

ルアーの先には何も付いていなかった。

マキアス「くそおおっ！　今度こそっ！」

再びルアーを投げるマキアス。

エリオット「ふわあああ。頑張ってねえ」

あくびをしていたエリオットの竿が、グッと引かれていて、

マキアス「エリオット！　君の方こそ、引きが来てるぞ！」

エリオット「え？」

スッと引いてみると、見事なイワナがかかっていた。

クロウ「へえっ、やるじゃねえか！」

リィンはジッと竿を垂らして、岩の上に座っている。

リィン「……」

その横にガイウスが来て、

ガイウス「調子はどうだ、リィン？」

リィン「なんだかいいな……。このところずっと、気が晴れる日がなくて。久しぶりに、自分の時間を過ごせてる気分だ」

ガイウス　「それはよかった」

　　微笑むと、ルアーを投げるガイウス。

ガイウス　「どんな悩みがあっても、この大自然の中では忘れることができる。素の自分に戻ることが出来る。それが、自然のいいところだ」

リィン　「ああ……」

　　ふと考え込むリィン。

リィン　「（M）素の自分……か」

× × ×

　　フラッシュバックで――
　　魔界皇子の姿で暴れる様子が蘇る。

× × ×

リィン　「……く」

　　頭を押さえるリィンに、

ガイウス　「どうした？」

リィン　「いや、何でもない。ちょっと向こうの方に行ってくる」

　　立ち上がるリィン。

□ 渓流の別の場所――

　　――を一人で歩くリィン。
　　そばには滝の音が響いている。

リィン　「（M）あれが、俺の本当の姿……。俺はあんな姿になって、何度も戦っていたんだな……」

× × ×

　　回想――魔界皇子に変身するリィン。
　　そして、まじかる☆アリサと戦う皇子。

リィン　「（M）だがあいつとはもう……戦いたくはない……」

リィン　「(M)この一ヶ月は、変身せずに耐えることができている。このまま収まって……普通の人として……。リィン・シュバルツァーとして暮らすことが出来たら……」

× × ×

回想で——父のテオと、母、そして、エリゼに囲まれて暮らすリィンの姿。

リィン　「(M)父さん、母さん、そしてエリゼと……」

× × ×

リィン、山向こうの温泉街の方を見やり、

リィン　「育ってきたあの町で、今まで通りに、過ごすことができたら……」

その時——。

リィン　「!?」

グラッとリィンの足元が揺らいで、

なんと、岩場が崩れて、川に投げ出されるリィン。

リィン　「うわっ……!」

そのまま水に飲まれて急流に流される。

リィン　「くっ……ぐううっ!」

行く手には滝があって——。

リィン　「う、うわあああああっ!」

滝から落ちていくリィン!

その瞬間——脳裏に蘇る記憶。

□ リィンの回想——

——火山の火口付近に倒れている幼いリィン。

開かれたその目が、魔界皇子のように赤く光る。

——赤と黒が合わさった宝石を手に、山道を下っていくが。

——足を踏み外して断崖から落下する。

——そして、崖下で倒れていた幼いリィンを助け起こしたのが、テオだった。

——幼いリィンの手元では、赤と黒の宝石が真っ二つに割れていた。

幼いリィンの目は、赤い光を失っていて。

□ 滝から落ちる中で——

カッと目を見開くリィン。

リィン「(M)そうか……全て思い出した……」

その目は赤く輝いていて。

リィン「(M)やはり……俺は、この世界に魔王から遣わされた……!」

× × ×

ガイウス、マキアス、クロウらが、リィンを探しに滝の上に現れる。

マキアス「おおい!」

川縁に落ちた、リィンの手袋を発見するガイウス。

ガイウス「これは!?」

エリオット「リィン……!」

その時、ブワッと真っ黒なオーラに包まれた魔界皇子が一同の眼前に出現。

魔界皇子「我こそは! 魔界皇子であるっ!」

右手から黒いオーラを放つと、ガイウスの釣り竿が一瞬で怪物に変化した!

怪物「ヒイイイット!」

マキアス「なっ……!」

恐怖におののくマキアスたち。

□ ユミル温泉の露天風呂

ザバッと湯桶で体を流すアリサ。

モナくんはスポンジのように石鹸だらけになって、ラウラに

　　もみ洗いされている。

モナ「ああ、そこ！　そこはだめモナっ！　いや、もっとモナっ！」

アリサ「ほんとにもう……こいつは」

エマ「でも、綺麗になってきましたね」

ラウラ「うん。ぬいぐるみの洗い方を練習してきたからな。こうして揉んだあとは、ギュッと固く絞って、洗濯ばさみで物干しに止めれば完璧だ！」

モナ「モナ!?　モナはぬいぐるみじゃないモナアアア！」

　　と、壁向こうの男湯の方から、

声「静かにしろ、阿呆が」

　　声が聞こえてくる。

トワ「あ、ごめんなさいっ」

　　アリサ、首を傾げて、

アリサ「ん？　この声……どこかで聞いたような」

×　×　×



男湯では――。

なんと、タオルを頭に乗せたユーシスが一人、湯舟で寛いでいた。

ユーシス「ふぅ。人間界の温泉とやらも、捨てた物ではないな」

ブルルといななないて答えるシュトラール。

壁の向こうからミリアムが、シュトラールの首にしがみついて、顔を出していて、

ミリアム「ユーシス～。こんなとこで遊んでていいの～?」

ユーシス「ふん。随分走ったからな。疲労回復だ。必要経費で落とすから問題ない」

× × ×

と、そこに――。

ズズズズン！ と大きな地鳴りが響く。

アリサ「……!?」

驚くアリサたち。

マキアスたちの声「た、助けてくれええっ！」

ラウラ「む！ 何ごとだ!?」

× × ×

ユーシス「……！」

立ち上がるユーシス。

× × ×

魔界皇子の声「感じるぞ……」

ズンズンと響いてくる大きな足音。

いきなり、露天風呂の壁を突き破って、

飛び出して来る釣り竿の怪物。

怪物「ヒイーーーーット！」

アリサ「な、なっ!?」

魔界皇子「見つけたぞ……！ 皇子の印の輝きを!!」

怪物の影から、現れる魔界皇子！

温泉内で全裸のアリサを、思いっきり指さした。

アリサ「きゃ、きゃあああああああっ！」

あまりのことに、絶叫するアリサで――。

〈中ＣＭ〉

第6話（最終回）『アリサとリィン、二人の出会い』

脚本　山下憲一

【登場キャラクター】

アリサ・ラインフォルト（まじかる☆アリサ）
ラウラ・S・アルゼイド（まじかる☆ラウラ）
エマ・ミルスティン（まじかる☆エマ）
モナくん

○

マキアス・レーグニッツ
エリオット・クレイグ
ガイウス・ウォーゼル
トワ・ハーシェル
フィー・クラウゼル

○

リィン・シュバルツァー（魔界皇子リィン）
ユーシス・アルバレア
ミリアム・オライオン
怪物

〈C〉



●脚本：山下憲一　●イラスト：さがら梨々

『東京ザナドゥ』に登場した公式二次創作作品『魔法少女まじかる☆アリサ』を原案にしたオリジナル作品の第6話Bパート！　魔法少女まじかる☆アリサたちと魔界皇子の最終決戦！　だがその戦いには思わぬ展開が待っていて……!?　激動の最終回!!

□　前シーンより——

露天風呂に壁を突き破って乱入してくる、釣り竿型の怪物。

魔界皇子「見つけたぞ……！　皇子の印の輝きを!!」

そして、怪物の影から現れる魔界皇子！
温泉内で全裸のアリサを、思いっきり指さした。

アリサ「きゃ、きゃぁあああああっ！」

あまりのことに、絶叫するアリサ。

ラウラ「貴様！　乙女の風呂場を覗き見るとは、何ということをっ！」

バッと立ち上がるラウラ。

モナ「立ち上がっちゃだめモナ～～っ！」

目隠し状態のモナくんが慌てて隠す。

エマ「どうして、魔界皇子さんが……!?」

トワ「こんなところにまで……!?」

タオルで隠しながら言うエマとトワ。

魔界皇子「ふわははははっ！　魔法少女あるところに魔界皇子ありっ！」

そこに、カポンッと風呂桶が投げつけられて、

魔界皇子「ぐわっ！」

頭に喰らう皇子。

アリサ「いい加減になさいっ！　不埒な真似は、許さないわよっ！」

アリサ、ＡＲＣＵＳを手にしていて、

アリサ「トワ会長は逃げて下さいっ！」

トワ「う、うんっ！」

慌てて出て行くトワ。

アリサ「みんな！　変身よ！」

ラウラ「ああっ！」

エマ「はいっ！」

タオルを纏ったまま、ＡＲＣＵＳを掲げるアリサ、ラウラ、エマ。

——変身ＢＡＮＫ。

三人、ＡＲＣＵＳの光に包まれ、空中に飛び出し、変身を始める。
目を閉じ、宝石を胸に当て、神々しい光に包まれるアリサ。

まじかる☆アリサ「あなたに届け！　愛と希望と魔法の戦士！」
竹刀を持ち、かっこよくポーズを決めて、光に包まれるラウラ。
まじかる☆ラウラ「そなたに届け！　力と勇気と魔法の戦士！」
目を閉じ、杖に変化したマイクを手にして、神々しい光に包まれるエマ。
まじかる☆エマ「みんなに届いて！　歌と光と魔法の戦士！」
アリサがピンク色の服を着た、魔法少女まじかる☆アリサに変身！
まじかる☆アリサ「魔法少女！　まじかる☆アリサ！」
ラウラが青色の服を着た、大剣を手にした魔法少女まじかる☆ラウラに変身！
まじかる☆ラウ「魔法少女！　まじかる☆ラウラ!!」
エマがワインレッドの服を着た、魔法少女まじかる☆エマに変身！
まじかる☆エマ「魔法少女まじかる☆エマ！」
三人、スタッと着地し、かっこよく決めポーズした。
――BANKここまで。

その変身シーンを見ていた皇子。
魔界皇子「(M) そうか……やはり、あいつが……」
だが、すぐに身体からブワッと黒いオーラが立ち昇り、
魔界皇子「うおおおおおおっ！」
右拳をグッと天に掲げる皇子。
すると、空に黒雲が現れ、辺りが一斉に闇に包まれる。
まじかる☆アリサ「な、何をする気!?」

×　×　×

旅館の外に逃げてきたマキアス、エリオット、ガイウスも驚き空を見上げる。

×　×　×

カッと光った空から落雷。
稲妻が皇子の右手に吸い込まれると――。

魔界皇子　「漆黒の闇に包まれし魔界より、今こそ顕現せよ！　我が魔剣『緋皇』っ‼」

　赤黒く輝く日本刀のような魔剣『緋皇』が、皇子の右手に現れた。

まじかる☆ラウラ　「ぬうっ！　魔剣とは面白い……。いざ勝負っ！」

　ラウラ、大剣を振りかざして突進。

モナ　「ラウラ！　待つモナ！」

まじかる☆ラウラ　「はあああああっ！」

　だが、その前に現れたのは——。

ユーシス　「おおおおっ！」

　シュトラールに跨がった浴衣姿のユーシスが、剣を振るってラウラの斬撃を受け止めた。

ユーシス　「貴様の相手は、この俺だ！」

まじかる☆ラウラ　「ぬううっ！」

　さらに、アガートラムに乗ったミリアムも現れて。

ミリアム　「へへッ！　モナくんも捕まえちゃうよー！」

モナ　「モナっ⁉」

　襲いかかってくるが、

まじかる☆エマ　「やあぁっ！」

　杖を振って、アガートラムを打ち据える。

まじかる☆エマ　「私が相手です！」

　魔界皇子、対峙するユーシスとラウラ、ミリアムとエマを横目に見つつ、

魔界皇子　「ククク。どうやら、役者が揃ったようだな……」

まじかる☆アリサ　「く……」

魔界皇子　「我が宿敵、まじかる☆アリサよ！　今こそ、決着を付ける時！」

　怪物をけしかけ、自らも魔剣を構えてアリサに向かってくる。

まじかる☆アリサ　「いいわよ！　いい加減に、決着をつけてやろうじゃないの！
はあああっ！」

　ジャンプして、怪物にキックを喰らわせる。

怪物　「ヒーーット⁉」

□ 宿屋の前では——

トワ「みんな！　なんでこんな所に⁉」

浴衣姿で出て来たトワが、マキアス、エリオット、ガイウスに落ち合った。

マキアス「会長⁉」

エリオット「あの怪物に襲われて……！」

トワ「とにかく、ここから避難だよ！」

ガイウス「しかし……！　リィンの姿が見えないのだ！」

マキアス「クロウもいないぞ！」

トワ「ええっ⁉」

× × ×

離れた森の中——。

樹の上に立っていたのは《C》——。

《C》「……」

まじかる☆アリサたちの戦況を見やり。

□ 露天風呂付近——

まじかる☆アリサ「やあああああっ！」

魔剣を振り下ろしてきた皇子の腕を受け止め、激しく押し合うアリサ。

魔界皇子「ぬううううっ！」

近付くアリサと皇子の顔。

まじかる☆アリサ「くっ……！」

アリサ、ゴーグルの下に僅かに見える皇子の目を見る。

魔界皇子「……ちっ！」

魔剣を引き、間合いを取る皇子。

まじかる☆ラウラ「おおおおおっ！」

大剣を横薙ぎに振ったラウラの一撃が、ユーシスの剣を振り払う。

ユーシス「ぬっ！」

まじかる☆ラウラ　「その姿では、馬上での踏ん張りがきくまい！」
　浴衣姿で裸足のユーシス、シュトラールの鐙を上手く
　踏みしめられずにいる。
ユーシス　「おのれっ！」
　地面に落ちた剣の方へと、後ずさるユーシス。
まじかる☆エマ　「モナークモナーク！　樹よ！　あの子を捕らえて！」
　杖から魔法の光を放ったエマ。
　途端に大木の枝がガサガサと蠢いて、
ミリアム　「わ、わわっ⁉　うそっ⁉」
　アガートラムを絡め取ってしまい、
ミリアム　「わあああ～～っ！」
　地面に落ちるミリアム。
怪物　「ヒイイイット！」
　怪物、ラウラとエマの前にやってくるが、
まじかる☆ラウラ　「エマ！　行くぞ！」
まじかる☆エマ　「ええ！」
　技の構えを取る二人！

まじかる☆ラウラ　「アルゼイドが秘剣、篤と見よ！　奥義・洸刃乱舞！　はあああっ！」
　猛烈な剣撃を喰らわせるラウラ。
怪物　「ヒイイッ⁉」
　さらに、エマが杖を振り上げて、
まじかる☆エマ　「そびえ立て、巨いなる塔！」
　怪物を取り囲むように現れる四本の塔。
まじかる☆エマ　「ロードアルベリオン！」
　その中心部から魔法の光が飛び出して、怪物を包み込むと。
怪物　「ヒイイイイイット！」
まじかる☆エマ　「静かに眠って下さい」
　浄化されて釣り竿に戻る怪物。
魔界皇子　「ぬううっ！」
　その様子を見やる皇子。
魔界皇子　「例え我一人になろうとも！　引きはせぬっ！」
　魔剣を振りかざしてアリサに迫る！
　だが、アリサ、剣撃をかわして高々とジャンプすると、
魔界皇子　「なにっ⁉」

見上げると、空中でたなびくアリサの金髪。

まじかる☆アリサ「はあああああっ！」

アリサ、鮮やかな飛び蹴りを放つ。
その足から魔法の光が迸り、

魔界皇子「ぐおおおおっ……！」

なんとかガードする皇子だったが、その勢いに負けて吹っ飛ばされ、露天風呂の岩に叩きつけられた！
アリサの隣にやってきたモナくんが、

モナ「今だモナ！」

まじかる☆アリサ「現れなさい！　愛の弓、トゥインクル・スター！」

掌に光が集まり、その手に出現する弓、トゥインクル・スター。

まじかる☆アリサ「――ついに追い詰めたわよ、魔界皇子！」

手にした愛弓、トゥインクル・スターを、片膝を突いた皇子に向けて構える。
皇子、魔剣を地面に突き立て、

魔界皇子「フッ、さすがだな……。我が宿敵、まじかる☆アリサ！」

立ち上がり、宙に浮かぶと、余裕の表情でアリサを見下ろす

皇子。
と、目元のゴーグルにピシッと亀裂が走り、僅かにその瞳が露わになる。

まじかる☆アリサ「！　……」

一瞬、弓を引くアリサの手が止まる。

まじかる☆アリサ「(M)……これってもしかして……」

フラッシュ――#1で夢を見てベッドから落ちるアリサ。

まじかる☆アリサ「(M)あの時の、夢のシーン!?」

魔界皇子を見やるアリサ。

まじかる☆アリサ「(M)だったら、この後って……」

フラッシュ――夢の中で。皇子のゴーグルが割れるシーンが蘇る。

モナ「アリサ、どうしたモナ!?　今がチャンスモナ！」

アリサ、ハッとなって、

まじかる☆アリサ「……え、ええ、分かってるわ！」

弓を引きしぼり、狙いを定め、愛の力を一点に集中させるアリサ。

まじかる☆アリサ　「はあああああっ！」

皇子は両腕を広げて身構え、

魔界皇子　「さあ、来い！　今宵訪れた常闇の舞台の幕を引くために！　俺の右腕に潜む『魔』――見事に打ち破ってみせるがいい！」

右手に嵌まった黒い宝石から、右腕全体にオーラが吹き出し、魔剣を包む。

アリサ、キッと皇子を見やると、

まじかる☆アリサ　「あなたにお届け！　愛と希望の流れ星！」

グッと引き絞った弦を解き放ち、

まじかる☆アリサ　「まじかる☆アリサ！　ラブ・シューティングスター‼」

愛の力を込めた虹色の矢を撃った。

皇子、右手に収束させた黒いオーラを纏った魔剣で、矢を受け止めるが、

魔界皇子　「ぐ……！　ぐおわあああああっ‼」

耐えきれず、ハート型の光に包まれて大爆発！

まじかる☆アリサ　「……！」

モナ　「やったモナ⁉」

まじかる☆ラウラ　「おお！」

まじかる☆エマ　「！」

だが――

魔界皇子の声　「……フッ」

爆煙が晴れると、傷つきながらも宙に浮く皇子の姿が露わになる。

魔界皇子　「フハハハハハっ！　足りぬ、足りぬわ！　その程度か、まじかる☆アリサよ‼」

まじかる☆アリサ　「(目を瞠り) うそ……！」

その時、傷ついた皇子のゴールにさらなる亀裂が走る。

皇子の目元を見やるアリサ。

まじかる☆アリサ　「あ、貴方は……⁉」

魔界皇子　「……ふ。このような偽りの仮面など、もういらぬわっ！」

ひび割れたゴーグルを投げ捨てる皇子。

地面に叩きつけられ、ガシャンと割れてバラバラになるゴーグル。

漆黒の夜空を背景に――ついに露わになるその素顔。

まじかる☆アリサ　「え……!?」

まじかる☆ラウラ　「なっ!?」

まじかる☆エマ　「そんな……！」

モナ　「モナっ!?」

　驚くアリサ、ラウラ、エマ、モナくんの顔、顔、顔！

　風にたなびく皇子の髪。

　僅かに微笑むその口元。

　そして、見開かれた赤い瞳。

魔界皇子　「ふわははは！　そうだ！　我こそは魔界皇子――！　魔界皇子リィン!!」

　リィンの素顔を晒し、高笑いする皇子。

モナ　「ど、どういうことモナ!?」

まじかる☆ラウラ　「馬鹿な……！」

まじかる☆エマ　「リィンさんが、魔界皇子!?」

まじかる☆アリサ　「今までずっと、クラスメートと戦っていたなんて……。嘘だと言ってよ、リィンっ!!」

　悲痛な叫びを上げるアリサ。

ユーシス　「阿呆が」

　剣を携えたユーシスが戻って来て。

ユーシス　「こいつは生まれたその日より、魔界の王の息子として、この世界を征服することを運命づけられた男！」

まじかる☆アリサ　「そんな……!?」

ユーシス　「さあ、共に征くぞ！　リィン！」

魔界皇子　「ああ！　我が友、魔界貴族よ！」

ミリアム　「へへっ！　ボクも一緒だよ！」

　三人、一斉にアリサ達に襲いかかって来た時である！

　――突如響く銃声！

ユーシス　「ぐうっ!?」

ミリアム　「わあっ!?」

　銃弾をその身に受けて、倒れるユーシス。消えるアガートラム。

まじかる☆ラウラ　「銃!?」

まじかる☆アリサ　「これって、あの時の!?」

　ザンッと、一同の前に踏み出される足。

　謎の仮面の男――《C》である。

《C》　「……」

銃を構えて立ちはだかる《C》。

ユーシス、片膝を突いて苦しそうに、

ユーシス　「き、貴様は……」

ミリアム　「ガーちゃんを撃ったの、キミだったんだね！」

アリサたち、《C》を見やり、

まじかる☆アリサ　「貴方、何者なの!?」

《C》　「我は《C》。魔界解放戦線がリーダーである」

マスクを通したくぐもった声で言う《C》。

魔界皇子　「魔界解放戦線だと!?」

《C》、皇子に銃を向けると、

《C》　「いかにも」

まじかる☆エマ　「私たちを助けたのは、いったいなぜですか……!?」

《C》　「魔界皇子の動向を探り、その正体を突き止め、暗殺せんがため！」

まじかる☆アリサ　「暗殺!?」

《C》　「貴様が何者か分かった今、もはやその必要もない……」

手をかける《C》

《C》　「消えるがいい。憎き魔王の息子よ！」

銃声が鳴り響いたその瞬間！

まじかる☆アリサ　「だめぇぇえっ！」

そう叫んで、咄嗟に皇子に飛びかかり、庇うアリサ――！

魔界皇子　「なっ……！」

アリサに押し倒された形になった皇子。

魔界皇子　「なぜ、この俺を庇う!?」

まじかる☆アリサ　「当たり前でしょ……リィン。貴方は私の……大事なクラスメートだもの……！」

そう言い、微笑を浮かべるアリサ。

魔界皇子　「――っ！」

ドクンと高鳴る皇子の鼓動。

アリサを抱きかかえたリィンの右腕と、

アリサの胸元のペンダントが近付き。

カッと二人の宝石が光り輝く――。

《C》　「ぬっ!?」

ラウラたち　「!?」

その光に目を覆う一同。

× × ×

回想――

山中で出会う幼い日のアリサ。

そして、その前にいたのは、幼いリィンであった。

幼いリィン、微笑むと、幼いアリサに赤い宝石を手渡した。

× × ×

光の中で話すアリサと皇子。

まじかる☆アリサ「……リィン……やっと会えたわ。あの時、私を助けてくれたのは、リィンだったのね……」

魔界皇子「……アリサ！」

光が消えると、アリサは立ち上がり、

まじかる☆アリサ「願いが叶ったのに……これで終わりなんて、絶対にいやよ！」

《C》に向けて見得を切る。

まじかる☆ラウラ「アリサ……！」

まじかる☆エマ「私たちも加勢を！」

《C》、銃を構えたまま間合いを取り、

《C》「愚かな！」

ズガガガと銃を連射。ラウラ、エマが次々に足元に受けて、思わず後ずさりする。

まじかる☆アリサ「くううっ！」

激しい銃撃に、アリサ、なんとか避けながら《C》に向かっていくが、

《C》「貴様も亡き者としてくれる！」

ピタッと、アリサの胸元に狙いを定める。

《C》「皇子の印の片割れと……共にな！」

まじかる☆アリサ「⁉」

《C》が引き金を引いた時である。

魔界皇子「うおおおおおっ！」

アリサの前に立ちはだかり、銃弾を受ける皇子。

まじかる☆アリサ　「え……！」

ユーシス　「リィン……！」

皇子の胸元から滴る血。

魔界皇子　「ハァハァハァ……」

ザッと一歩を踏み出す皇子。

魔界皇子　「すまなかったな……アリサ」

まじかる☆アリサ　「！」

《C》に向けて剣を構え、歩み寄る魔界皇子。

魔界皇子　「俺と奴との戦いに……お前を。クラスメートを巻き込むわけにはいかない！」

まじかる☆アリサ　「リィン……！」

《C》　「ぬうっ！」

銃を連射する《C》だが、ガンガンと、剣撃で弾くリィン。

魔界皇子　「おおおおおおっ！」

剣を振り上げると突進していく皇子。

魔界皇子　「おぼえておけ！　まじかる☆アリサよ！　これが魔界皇子の……！
お前達を苦しめ、罪を犯したこの俺の！
せめてもの償いだぁあああっ!!」

銃撃を受けながらも、《C》に迫り、剣を一閃。

《C》の銃が真っ二つに斬り裂かれた。

《C》　「……」

魔界皇子　「ハァハァハァ……」

力尽き、その場に倒れる皇子。

まじかる☆アリサ　「そんな……リィン！」

呆然と立ち尽くすアリサ。

《C》、とどめを刺そうと剣の柄に手をかけるが。

まじかる☆ラウラ　「させるか！」

まじかる☆エマ　「やめて下さい！」

剣と杖を構える二人。

《C》　「……目的は果たした。さらばだ！」

姿を消す《C》で――。



□旅館の裏庭――

元の姿に戻ったアリサが、傷つき、血を流すリィンを抱きかかえている。

アリサ「リィン！　起きて、リィン！」

エマ「回復魔法も効きません！　このままでは……！」

リィン「ぐっ……」

うっすらと目を開けるリィン。

リィン「今まですまなかったな――」

そう言い、アリサの手を握ると、

リィン「アリサ……。俺はお前を……」

何かを言いかけたその時――。

漆黒のオーラに包まれるリィン。

アリサ「だめよ、リィン！　行かないで！　やっと、やっと会えたのに……！」

だが、リィンの身体は漆黒のオーラに包まれ、アリサの腕の中から、忽然と姿を消してしまった。

アリサ「いやああっ……!!」
　涙を流すアリサ。と、その背後にいたユーシスが、
ユーシス「……フン。あいつは魔王の力によって、魔界に連れ戻されただけだ」
アリサ「え……!?」
ラウラ「リィンが、魔界に!?」
　ユーシス、キッとアリサ達を睨んで、
ユーシス「貴様達にもう用はない……。皇子率いる魔王本軍にいずれ征服される日まで、残り少ない時をせいぜい楽しむがいい!」
ミリアム「じゃ、まったねー」
　そう言って、ミリアムと共に姿を消すユーシス。
　そこに、トワが、マキアスらと共に駆け寄ってきて、
トワ「みんな! 大丈夫……!」
エマ「……トワ会長」
マキアス「いったい何があったんだ!?」
エリオット「リィンもクロウも見つからないし……どうしちゃったの!?」
ガイウス「手がかりは、この手袋だけか……」
　ガイウスが手にしていたのは、リィンが川で落とした黒手袋だ。
　アリサ、それを見て、キッと決意の顔になると――。
アリサ「……私、決めたわ……!」

□マクモナルド・全景
　テロップ――【数日後】

□同・店内
　フィーが店員のバイトをしており、自動扉が開く。
フィー「らっしゃい」
アリサ「フィー! こないだの話! あなたの誘いに乗るわ!」
　大きなリュックに荷物を大量に持ったアリサがやってくる。
フィー「一緒に……魔界を滅ぼす?」
アリサ「ええ。魔界に殴り込んで、魔界皇子を……ううん。リィンを、魔界から取り戻してみせるわ!」

ラウラ「勝手に行くな、アリサ！」
エマ「私たちもご一緒します！」
モナ「モナも一緒モナ～！」
次々にやってくるラウラ達。
アリサ「みんな……」
嬉しそうに微笑むアリサ。

× × ×

点描で――。
――魔王城のベッドでうなされるリィン。
リィン「アリ……サ……」
それを見守るユーシス、ミリアム。
――魔界に佇む《C》。
魔王城の空に雷鳴と共に稲妻が走り。

× × ×

トワが見送る中、マクモナルドの前から出発していくアリサ達。
アリサの片手には、リィンの黒手袋が嵌められていて――。

〈おわり〉